多賀城市文化財調査報告書第74集

市川橋遺跡

— 第34・35・37・38次調査報告書 —

平成16年3月

多賀城市教育委員会

序　文

私たちの住む多賀城市の先人は、悠久な時の流れに乗り、恵まれた環境に育まれながら豊かな歴史や文化を築いてきました。本市には、国の特別史跡に指定されている多賀城跡や多賀城廃寺跡のほか多くの文化財が存在し、こうした文化遺産を保存活用して、多賀城の長い歴史を後世に継承していくことは私たちの重要な責務の一つと考えております。このため、文化財行政を所管する教育委員会としても、国民の共有財産である遺跡の保護と開発の調和には細心の注意を払いながら対処してまいりました。

さて、近年、本書にも収録しておりますように、建物の基礎工事にパイルを打つ工法による住宅建設が急増してきており、これに対応した発掘調査の方法・体制が求められてきています。教育委員会としても、今後、地下遺構に配慮しながら最善の方策で取り組んでいきたいと考えています。

本書には、平成15年度に国庫補助事業として実施した市川橋遺跡の調査成果を４件収録しています。いずれも調査面積は小規模なものですが「古代都市多賀城」の姿を復元するうえで貴重な資料を提供しました。

本書に掲載した調査成果が今後の文化財の保護と歴史研究の一助となることができれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査の実施から報告書刊行まで、多くの方々からご指導、ご協力をいただきましたことに対して、心より感謝申し上げます。

平成16年３月

多賀城市教育委員会
教育長　櫻井　茂男

例　言

1　本書は、平成15年度の国庫補助事業として実施した市川橋遺跡第34・35・37・38次調査の成果をまとめたものである。

2　各調査における遺構の名称は、第１次調査からの一連番号である。

3　測量法の改正により、平成14年４月１日から経緯度の基準は、日本測地系に代わり世界測地系に従うこととなったが、本書中の各調査区で使用した座標値は、過去の調査区との整合性を図るため、従来の国土座標「平面直角座標系X」を用いている。なお、各調査区の基準線については、X：－189,200、Y：13,850（南北・東西大路交差点の中央付近）の交点を東西・南北の原点とし、１m離れるごとに、東西方向は東にE１・E２・・、西にW１・W２・・・、南北方向は北にN１・N２・・・、南にS１・S２・・・と表示している。

4　挿図中の高さは、標高値を示している。

5　土色は、『新版標準土色帖』（小川・竹原：1996）を使用した。

6　本書の執筆は、Ⅰ・Ⅱを島田敬、Ⅲを村松稔、Ⅳを武田健市、Ⅴを相澤清利、Ⅵを廣瀬真理子が担当し、編集は担当者全員が行った。また、遺物整理については、臨時職員の伊藤美恵子、内海由美子、浦風志恵子、遠藤友美、小野寺雪子、鹿野智子、熊谷純子、今野妙子、坂本英美、中村千恵子、村上和恵、横山佳織、渡辺奈緒の協力を得た。

7　調査に関する諸記録及び出土遺物は、すべて多賀城市教育委員会が保管している。

目　次

Ⅰ　遺跡の地理的・歴史的環境 …… 1
Ⅱ　市川橋遺跡第34次調査 …… 2
Ⅲ　市川橋遺跡第35次調査 …… 8
Ⅳ　市川橋遺跡第37次調査 …… 17
Ⅴ　市川橋遺跡第38次調査 …… 39
Ⅵ　市川橋遺跡第37・38次調査出土木簡について

調　査　要　項

1　調査主体　　多賀城市教育委員会　教育長　櫻井茂男

2　調査担当　　多賀城市埋蔵文化財調査センター　　所長　高倉敏明

3　調査概要

調査次数	所在地	調査面積	調査期間	調査担当者
第34次	市川字鴻ノ池23・24の各1部	15㎡	平成15年4月8日～5月2日	島田　敬、相澤正信
第35次	市川字鴻ノ池38・62、公共用地の各1部	56㎡	平成15年4月9日～4月25日	村松　稔、文屋　亮
第37次	市川字鴻ノ池36の2	60㎡	平成15年6月23日～7月29日	武田健市
第38次	市川字鴻ノ池18・34・35	24㎡	平成15年6月24日～8月4日	相澤清利、文屋　亮

4　調査協力者　　伊勢博之　伊勢泰子　寺沢久　渡辺　朗　渡辺匡子　波多野凱代　渡辺智樹　渡辺由美
大場万太郎　スモリ工業（株）　（株）一条工務店　住友林業（株）　（株）北州ハウジング
多賀城市城南土地区画整理組合　大木建設（株）

5　調査参加者　　赤間かつ子　浅野喜久　男　浅野　忠　芦野しず子　遠藤実　遠藤一代　及川光江　大友良子
大場勝喜　大山貞子　小笠原マキ子　小野寺恵子　小幡　武　後藤恵子　今野和子　塩井一征
鈴木太仲　鈴木寿二　高橋宣子　武山あや子　平山節子　藤澤拓司　藤田恵子　宮川ハルミ
宮下喜代　平　山下裕子　渡辺幹子

凡　例

本書中で使用する遺構略称、遺物分類については、以下のとおりである。

1．遺構略称

ＳＸ：道路、河川及び性格不明な遺構　　ＳＤ：溝　　ＳＫ：土壙　　Ｐｉｔ：柱穴及び小穴

2．遺物分類

1）土師器杯

A類：ロクロ調整を行わないもの

B類：ロクロ調整を行ったもの

ＢⅠ類：ロクロからの切り離し後、回転ヘラケズリされたもの

ＢⅡ類：ロクロからの切り離し後、手持ちヘラケズリされたもの

ＢⅢ類：ロクロからの切り離しがヘラ切りで、再調整されないもの

ＢⅣ類：ロクロからの切り離しが静止糸切りで、再調整されないもの

ＢⅤ類：ロクロからの切り離しが回転糸切りで、再調整されないもの

ＢⅠ・ＢⅡ類では、ロクロからの切り離しが識別できる資料があり、ヘラ切りによるものをａ、静止糸切りによるものをｂ、回転糸切り（糸切り）によるものをｃとして細分する

2）土師器甕

A類：ロクロ調整を行わないもの

B類：ロクロ調整を行ったもの

3）須恵器杯

Ⅰ類：ロクロからの切り離し後、回転ヘラケズリされたもの

Ⅱ類：ロクロからの切り離し後、手持ちヘラケズリされたもの

Ⅲ類：ロクロからの切り離しがヘラ切りで、再調整されないもの

Ⅳ類：ロクロからの切り離しが静止糸切りで、再調整されないもの

Ⅴ類：ロクロからの切り離しが回転糸切りで、再調整されないもの

Ⅰ・Ⅱ類では、ロクロからの切り離しが識別できる資料があり、ヘラ切りによるものをａ、静止糸切りによるものをｂ、回転糸切り（糸切り）によるものをｃとして細分する。

4）瓦の分類

「多賀城跡　政庁跡　図録編」（宮城県多賀城跡調査研究所　1980）、「多賀城跡　政庁跡　本文編」（宮城県多賀城跡調査研究所　1982）の分類基準に従った。

3．本文中で記載する「灰白色火山灰」については、その起源を宮城県北西部に求める説（山田・庄子：1980）と十和田ａ火山灰と同一とする説（町田ほか：1981、阿子島・壇原：1991）があるが、近年は後者の説が有力である。この火山灰の降下年代については、年輪年代測定で907年とされた秋田県払田柵跡外郭線Ｃ期角材列存続期間中に降灰し、承平４年（934）閏正月15日に焼失した陸奥国分寺七重塔の焼土層に覆われていることから、907～934年の間と考える立場（多賀城跡調査研究所：1998）と、『扶桑略記』延喜15年（915）７月13日にある「出羽国言上雨灰高二寸諸郷桑枯損之由」の記事に結びつけ、10世紀前葉とする説（町田ほか：1981、阿子島・壇原：1991）があるが、本書では考古学的な見解を重視し前者に従った。

Ⅰ．遺跡の地理的・歴史的環境

第１図　市川橋遺跡の位置と周辺の遺跡

市川橋遺跡は、特別史跡多賀城跡の南側及び西側に位置し、多賀城跡が所在する低丘陵と砂押川に挟まれた標高２～３ｍの沖積地に立地している。その範囲は、東西 1,400m、南北 1,600mに及び、総面積は約 703,000 ㎡の広大な遺跡である。

本遺跡は、旧石器時代から平安時代にかけての複合遺跡として登録されているが、奈良・平安時代を通して陸奥国府が置かれた多賀城と密接な関係を持つ古代の遺跡として知られている。

周辺の遺跡についてみると、東側の丘陵部には多賀城の附属寺院である多賀城廃寺があり、それを取り巻くように古代の集落跡が広く展開する高崎遺跡が所在する。多賀城と廃寺の中間の小丘陵には館前遺跡（特別史跡多賀城跡に追加指定）があり、国司館と考えられている。また、本遺跡西側には東西方向に微高地が続いており、山王遺跡と新田遺跡が連続して立地している。両遺跡とも大規模な複合遺跡であり、山王遺跡では弥生時代から近世にかけて、新田遺跡では縄文時代から中世にかけての遺構・遺物が発見されている。

本遺跡においては、これまで数多くの発掘調査が実施され多大な成果が得られているが、その中で最も注目されるのは多賀城南面に施工された古代の方格地割りの発見である。これは南北大路、東西大路と呼んでいる二つの主要道路を基準とし、東西・南北の直線道路によっておおよそ１町四方の区画がなされ、まち並みが形成されたものである。その範囲は、東西約 1,100m、南北 750m以上に及び、本遺跡から山王遺跡にかけての地域に広がっている。さらに、東西大路の延長部分は新田遺跡の北東部でも検出されている。このまち並みについては、古代地方都市と位置付けられており、内部及び周辺からは上級官人の邸宅などを構成する掘立柱建物跡や井戸跡、河川やそれに架かる橋（橋脚）、さらに水田跡や畑跡などの多数の遺構が発見されている。

Ⅱ　市川橋遺跡第34次調査

1．調査に至る経緯と経過

本調査は、城南土地区画整理事業地内における個人住宅建設に伴うものである。当該地周辺では、近年区画整理事業や道路建設等に伴う大規模な発掘調査が実施され、古代地方都市に関わる多数の遺構、遺物が発見されている。

今回の建設工事は、基礎工法に直径60㎝、長さ6.5mの鋼管杭を37本打ち込む、いわゆるパイル工法を採用するため、地下遺構への影響が懸念された。そのため、発掘調査実施の協力を地権者に求め、平成15年4月3日に承諾書及び依頼書の提出を受けたことから、事前調査として発掘調査を実施するに至った。

当該地は、区画整理事業に伴う宅地造成の際に約1.2mの厚さで盛土されていたため、現地表面から遺構面までは相当な深さがあり、調査区の掘削に伴い大量の排土が出ることが予想された。よって、排土場所の確保と隣接住宅や道路に対して地盤沈下等の影響が生じないよう配慮したことから、調査区の設定にあたっては面積を制約せざるを得なかった。

第１図　調査区位置図

調査は4月8日から開始し、はじめに重機により盛土及び堆積土の除去を行った。その結果、現地表面から約1.5～1.7m下で最初の遺構面（Ⅲ・Ⅴ層上面）を検出した。4月11日に遺構検出状況を写真撮影し、その後溝跡等の遺構の掘り込みを実施する。これと併せて1/20の縮尺で平面図作成も開始する。なお、本調査における発掘基準線とその表示は、城南土地区画整理事業に伴う各調査と共通にした。調査は、Ⅲ・Ⅳ層の除去及び検出した掘立柱建物跡や溝跡の掘り込みを行い、その状況の写真撮影、実測図作成を行う（4月16日）。次に、Ⅴ層の除去を行い、Ⅵ・Ⅶ層（地山）上面で小溝群を検出する。これらは、東西方向から南北方向への変遷が確認できたことから、新しい時期のものから順に掘り込み、実測図作成を行う（4月24日）。発掘作業は4月25～29日の中断期間を挟み、5月2日に調査区各壁の土層堆積状況の断面図作成を行い、調査を終了する。

2．調査成果

(1) 基本層序

Ⅰa層　区画整理事業に伴う盛土層で、層厚は約1.2m。

Ⅰb層　現代の水田耕作土層で、層厚は10～15㎝。

Ⅰc層　現代の水田の床土層で、層厚は10～15㎝。

Ⅱa層　黒色シルト(2.5Y2/1)で層厚は約5㎝と薄く、調査区の南西部には認められない。古代の土器片

を含む。

IIb 層　黄灰色シルト(2.5Y4/1)で層厚は10～15 cm。調査区全域にほぼ水平に堆積する。古代の土器片を含む。

III 層　黒褐色シルト(2.5Y3/1)で層厚は５～15 cm。調査区北半部に堆積する。上位に灰白色火山灰を斑状に含む。また、須恵系土器を含む古代の土器片を多く含む。ＳＤ3011 溝跡の検出面。

IVa 層　黒色シルト(2.5Y2/1)で層厚は約３cmと薄い。木炭を多く含む。

IVb 層　黄灰色シルト(2.5Y4/1)で層厚は５～10 cm。III層とほぼ同じ位置に堆積する。木炭粒を多く含む。また、古代の土器片を含む。ＳＢ3010 建物跡の検出面。

V 層　暗灰黄色シルト(2.5Y4/2)で層厚は10～20cm。調査区の全域に堆積する。古代の土器片を若干含む。ＳＤ 3012 溝跡等の検出面。

VI 層　にぶい黄色砂質土(2. 5Y6/3)で層厚は５～10cm。調査区の北半部に認められる VII層に類似するが混入土が多い。小溝群の検出面。

VII 層　にぶい黄色砂質土(2. 5Y6/3)で古代の最終遺構検出面と考えられる。小溝群の検出面。

(2)　発見遺構と遺物

ＳＢ3010掘立柱建物跡（第２図）

調査区西半部において３基（Ｐ13～15）の柱穴を検出しただけであるが、その配置から建物跡の北東隅にあたると考えられる。調査区西壁の土層観察から、堆積土のIVb 層上面から掘り込まれていることがわかる。また、ＳＤ3012 溝跡と重複し、これより新しい。方向は、東側柱列でみると北で約１度東に偏している。規模は、北側柱列で柱間が約 2.4m、東側柱列で約1.8mである。柱穴の平面形はおおよそ方形で、一辺は 45～60 cmである。深さは、調査区西壁にかかるＰ13 の断面観察では 45 cmである。北東隅のＰ14 では、柱の抜取穴を確認している。柱穴埋土は黒褐色シルト(2.5Y3/1)を主体とし、掘り方にはにぶい黄色砂質土(2.5Y6/3)が斑状に多く含まれる。

遺物は、土師器杯・甕（Ｂ類）、須恵器杯、土器片製円盤（第３図 12・13）が出土している。

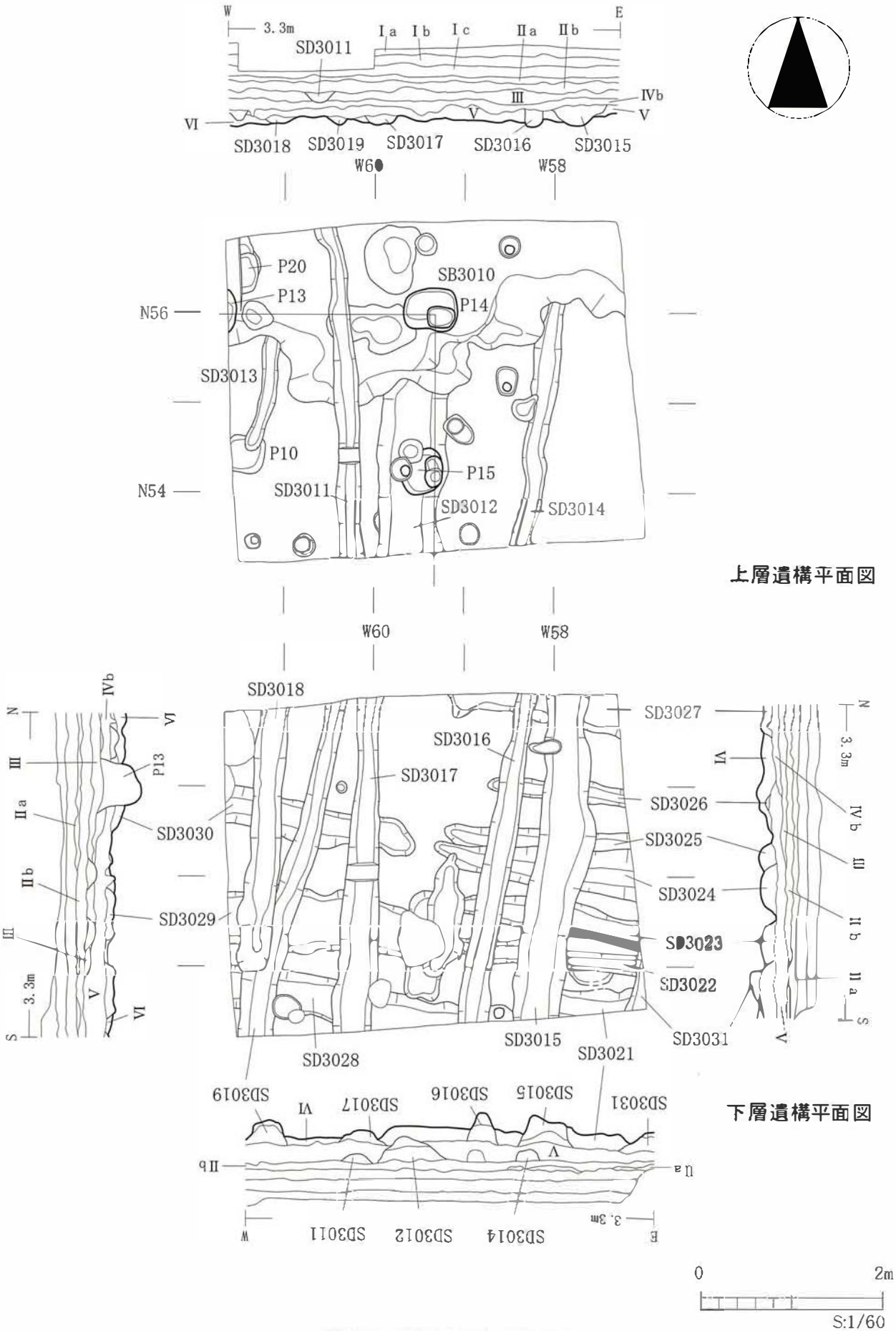
ＳＤ3011溝跡（第２図）

調査区西半部のIII層上面で検出した南北方向の溝跡である。北壁から南壁にかけて約 3.7m検出し、さらに調査区外へ延びている。方向は、北で約３度西に偏している。規模は、上幅 18～28 cm、下幅 6～14 cm、深さ約 12 cmである。底面は舟底状を呈し、壁は緩やかに立ち上がる。埋土は、黒褐色シルト(2.5Y3/1)の単層で木炭粒を多く含んでいる。

遺物は、土師器杯（ＢII類・ＢV類、第３図１）・高台付杯・甕（Ｂ類）、須恵器瓶・甕が出土している。

ＳＤ3012溝跡（第２図）

調査区中央部のＶ層上面で検出した南北方向の溝跡である。北側がIII・IV層に覆われ、重複関係からＳＢ3010 建物跡より古い。確認できた長さは約 2.4m で、南側はさらに調査区外に延びている。方向は、北で約２度東に偏している。規模は、上幅 62～75 cm、下幅 33～42 cm、深さ約 30 cmである。底面は舟底状を呈し、壁は丸味をもって緩やかに立ち上がる。埋土は2層に分けられ、いずれも黒褐色シルト（2.5Y3/1）であるが、下層にはにぶい黄色砂質土(2.5Y6/3)が斑状に含まれる。



第2図　遺構平面図・断面図

遺物は、土師器杯（ＢＶ類）・高台付杯・甕（Ｂ類）、須恵器杯（Ｖ類、第３図２）・瓶・甕、砥石が出土している。

ＳＤ3013溝跡（第２図）

調査区西半部のＶ層上面で検出した南北方向の小規模な溝跡である。調査区内で確認できた長さは約1.3mである。方向は、北で約７度東に偏している。規模は、上幅14～20㎝、下幅８～12㎝、深さ約７㎝である。底面は舟底状を呈し、壁は緩やかに立ち上がる。埋土は黄灰色シルト(2.5Y4/1)の単層で、木炭粒を含んでいる。

遺物は、土師器杯（ＢＶ類）・甕（Ｂ類）が出土している。

ＳＤ3014溝跡（第２図）

調査区東半部のＶ層上面で検出した南北方向の溝跡である。調査区内で確認できた長さは約 2.7mである。方向は、北で約９度東に偏している。規模は、上幅22～30㎝、下幅10～16㎝、深さ約12㎝である。底面は舟底状を呈し、壁は比較的急に立ち上がる。埋土は黒褐色シルト(2.5Y3/1)の単層で、にぶい黄色砂質土(2.5Y6/3)を斑状に若干含んでいる。

遺物は、土師器杯（ＢⅡ類）・甕（Ｂ類）、須恵器杯・瓶・甕が出土している。

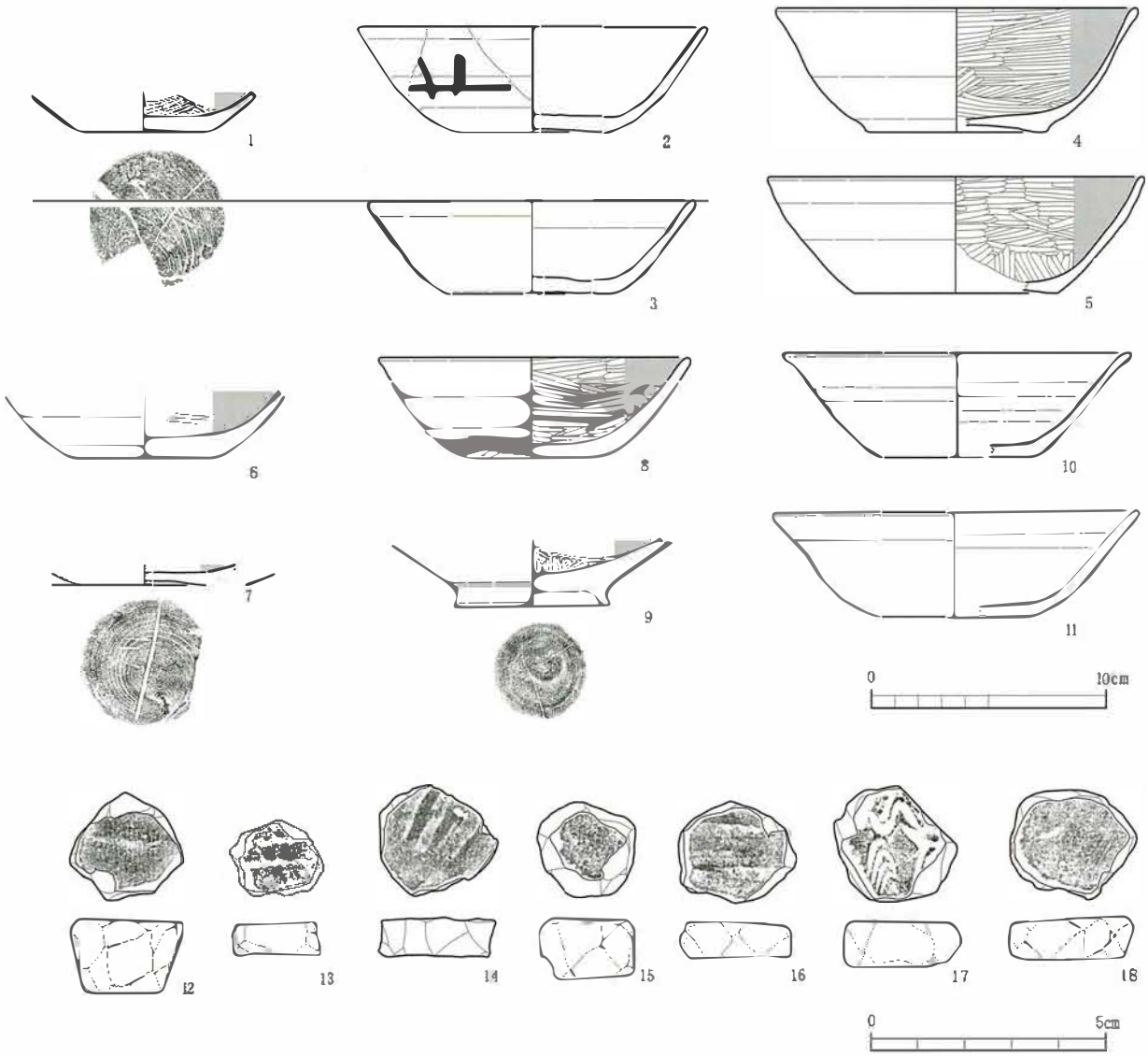
ＳＤ3015～3031小溝群（第２図）

調査区全域で検出した小規模な溝跡のまとまりである。すべてＶ層掘り下げ後のⅥ・Ⅶ層上面で検出した。南北方向のものと、東西方向のものの２つのグループに分けられ、前者は７条、後者は10条検出した。これらは重複関係から、南北方向のものがすべて新しい。さらに、グループ内でも重複があることから、それぞれ最低２時期の変遷があることがうかがえる。前者については、調査区内で確認できる長さは 2.9～3.8mで、大部分の溝跡が北と南の両側でさらに調査区外に延びている。方向は、北で４～10 度東に偏している。規模は、上幅35～60㎝、下幅15～35㎝、深さ 20～30㎝の数値内に収まる。一方、後者については、確認できる長さは1.7～3.1mで、調査区中央付近で溝の端部がみられるものが多い。方向は、東で５～10度南に偏している。規模は、上幅20～40㎝または40～60㎝、下幅８～20㎝または15～55㎝の２つの数値内におおむね収まる。深さはいずれも10㎝前後である。両グループとも底面に凹凸があるものが多く、壁は緩やかに立ち上がるが、南北方向のものに比較的急な立ち上がりをみせるものがある。埋土は黄灰色シルト(2.5Y4/1)の単層が多く、にぶい黄色砂質土(2.5Y6/3)を斑状及び小ブロック状に含んでいる。

遺物は、土師器杯（Ｂ類）・高台付杯・甕（Ｂ類）、須恵器杯（Ⅰ類・Ⅲ類）・甕が出土している。しかし、すべて小破片であり出土量も少ないため、グループごとの傾向や特徴を導き出すことはできない。

３　まとめ

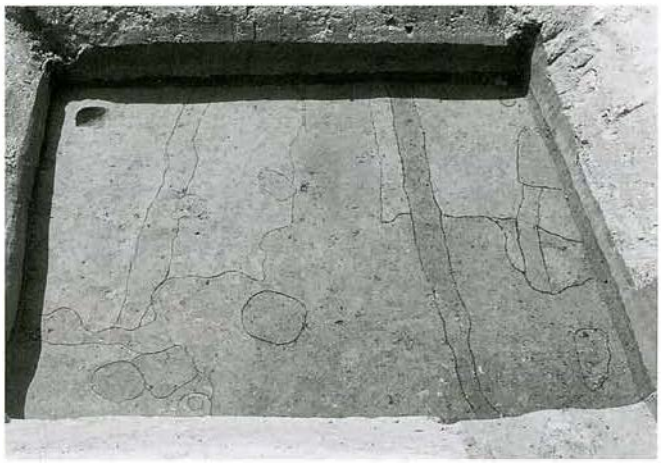
今回の調査で発見された各遺構の年代については、ＳＤ3011溝跡以外はすべてⅢ層に覆われていることから、灰白色火山灰の降下以前の時期、すなわち10世紀前葉以前とすることができる。これは須恵系土器が、Ⅲ層中には含まれるが、各遺構からは出土していないこととも矛盾しない。また上限年代については、一番古い小溝群のいずれにも、非ロクロ調整の土師器（Ａ類）が見られないことから、大きく捉えて８世紀末頃と考えられる。したがって、ＳＤ3011溝跡以外の各遺構は、この間の変遷と理解される。



単位（cm）

番号	種類	遺構・層位	特徴 外面	特徴 内面	口径 残存率	底径 残存率	器高	写真図版	登録番号	備考
1	土師器・杯	SD3011 1層	ロクロナデ 底部：回転糸切り	ヘラミガキ・黒色処理	—	6.0 20/24	—		R 11	底部に「×」のヘラガキ
2	須恵器・杯	SD3012 1層	ロクロナデ 底部：回転糸切り	ロクロナデ	(15.0) 1/24	(6.6) 24/24	4.6	1－5	R 1	体部に墨書
3	須恵器・杯	P 20	ロクロナデ 底部：ヘラ切り	ロクロナデ	(14.1) 3/24	(7.5) 12/24	4.0		R 5	
4	土師器・杯	P 10	ロクロナデ 底部：回転糸切り	ヘラミガキ・黒色処理	(15.4) 6/24	(7.7) 12/24	5.3	1－6	R 2	
5	土師器・杯	P 10	ロクロナデ 底部：不明	ヘラミガキ・黒色処理	(16.0) 7/24	(8.6) 2/24	5.0		R 3	
6	土師器・杯	III 層	ロクロナデ 底部：回転糸切り	ヘラミガキ・黒色処理	—	6.4 24/24	—		R 7	
7	土師器・杯	III 層	ロクロナデ 底部：回転糸切り	ヘラミガキ・黒色処理	—	5.5 18/24	—	1－7	R 8	底部に「—」のヘラガキ
8	土師器・杯	III 層	ロクロナデ 底～体部：手持ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	13.8 16/24	6.2 24/24	4.3		R 6	
9	土師器・高台付杯	III 層	ロクロナデ 底部：不明	ヘラミガキ・黒色処理	—	6.6 18/24	—	1－8	R 9	底部に「×」のヘラガキ
10	須恵器・杯	III 層	ロクロナデ 底部：回転糸切り	ロクロナデ	(14.8) 6/24	(6.5) 8/24	4.5		R 10	
11	須恵器・杯	II 層	ロクロナデ 底部：回転糸切り	ロクロナデ	(15.6) 2/24	(6.9) 10/24	4.5		R 12	
12	土器片製円盤（須恵器・甕転用） P 14出土	13	土器片製円盤（須恵器・甕転用） P 14出土	14	土器片製円盤（須恵器・甕転用） V層出土	15	土器片製円盤（須恵器・甕転用） III層出土			
16	土器片製円盤（須恵器・甕転用） III層出土	17	土器片製円盤（須恵器・甕転用） II層出土	18	土器片製円盤（須恵器・甕転用） II層出土					

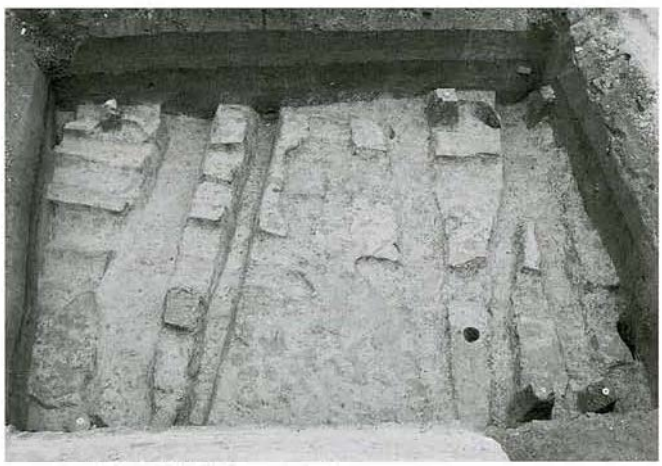
第3図　出土遺物



1　上層遺構検出状況　北より

2　上層遺構完掘状況　北より

3　下層遺構検出状況　北より



4　下層遺構完掘状況　北より

5　SD3012・1層出土　墨書土器　須恵器・杯
（第3図2　R1　S:任意）

6　P10出土　土師器・杯（第3図4　R2　S:1/2）

7　Ⅲ層出土　ヘラ描き土器　土師器・杯
（第3図7　R8　S:任意）

8　Ⅲ層出土　ヘラ描き土器　土師器・高台付杯
（第3図9　R9　S:任意）

写真図版1

Ⅲ　市川橋遺跡第35次調査

1．調査に至る経緯と経過

本調査は、城南土地区画整理地内の個人住宅建設に伴うものである。当該地区周辺では、近年区画整理に伴う大規模な発掘調査が実施され、古代地方都市に関わる遺構・遺物が多数発見されている。

今回の建設工事は、基礎工法に細い鋼管を打ち込むいわゆるパイル工法をとることから、埋蔵文化財に影響を及ぼすことが考えられた。そのため、工法変更により遺構の保存が計れないか協議を行なったが、結論としてパイル工法となった。これを受け地権者から2月17日付けで発掘調査の依頼があった。4月9日から現地において重機による表土除去を行なうとともに、随時写真撮影を行なう。4月15日にはＳＸ3072とＳＸ3074河川跡を発見した。これらの遺構を完掘することは土砂崩落の危険を伴うため行なわなかった。同時に、実測図作成のための基準杭を設置し平面図と断面図の作成を行なった。4月23日には重機でＳＸ3074河川跡の一部を掘り下げ、断面の写真撮影を行なった後、埋め戻しと器材の撤収を行い一切の調査を終了した。

第１図　調査区位置図

2．調査成果

(1)基本層序

Ⅰａ層　区画整理に伴う盛土層で層厚約1.2m。

Ⅰｂ層　現代の水田耕作土層で層厚25～40ｃｍ。

Ⅱ　層　黒褐色シルト（2.5Y3/1）層で層厚３～12ｃｍ。

Ⅲ　層　調査区の西端部に堆積する黄灰色砂質土（2/5Y4/1）層で層厚７～18ｃｍ。灰白色火山灰をブロック状に含む。

Ⅳ　層　黄灰色砂（2.5Y4/1）層で層厚3～20ｃｍ。炭化物を少量含む。

Ⅴ　層　調査区の西半部に堆積する暗灰黄色砂（2/5Y5/2）層で層厚３～21ｃｍ。炭化物を少量含む。

(2)発見遺構と遺物

ＳＸ3072（第２・４図）

調査区の西半部で検出した西へ向かって傾斜する落ち込みである。西側へ拡がっているため、全体は把握できなかった。ＳＸ3074河川跡と重複がありこれより新しい。平面形は不整形であり、検出した規模は東西1.5～5.3m、深さは63～89cmである。底面は概ね平坦であり、壁の立ち上がりは北側ほど急で、南側

ほど緩い。埋土は１層で、砂の粒子が粗い黄褐色砂である。なお、この遺構の北側隣接地には第26次調査のA44区で発見したＳＸ2079がある。ＳＸ2079は南北大路を横断する河川に架かるＳＸ1777橋跡の南東側にあり、東に向かって落ち込んでいる。灰白色火山灰をブロック状に含む層に覆われ、またＳＤ2080溝跡と重複がありこれより新しい。このＳＸ2079と今回発見したＳＸ3072の位置関係や、埋土および平面形のあり方が極めて類似していることから、これらは同一の遺構と考えられる。

遺物は土師器杯（ＢＶ類）・甕（Ｂ類）、須恵器甕が出土している。

ＳＸ3074河川跡（第２・３・４図）

調査区の全面で河川埋土を確認しており、平面形は確認できなかった。底面まで掘り下げはしていないが、断面観察により東に向かって落ち込む堆積状況が確認できた。ＳＸ3072と重複関係がありこれより古い。確認した埋土は２層に分けられ、１層は黄褐色砂、２層はオリーブ褐色砂である。

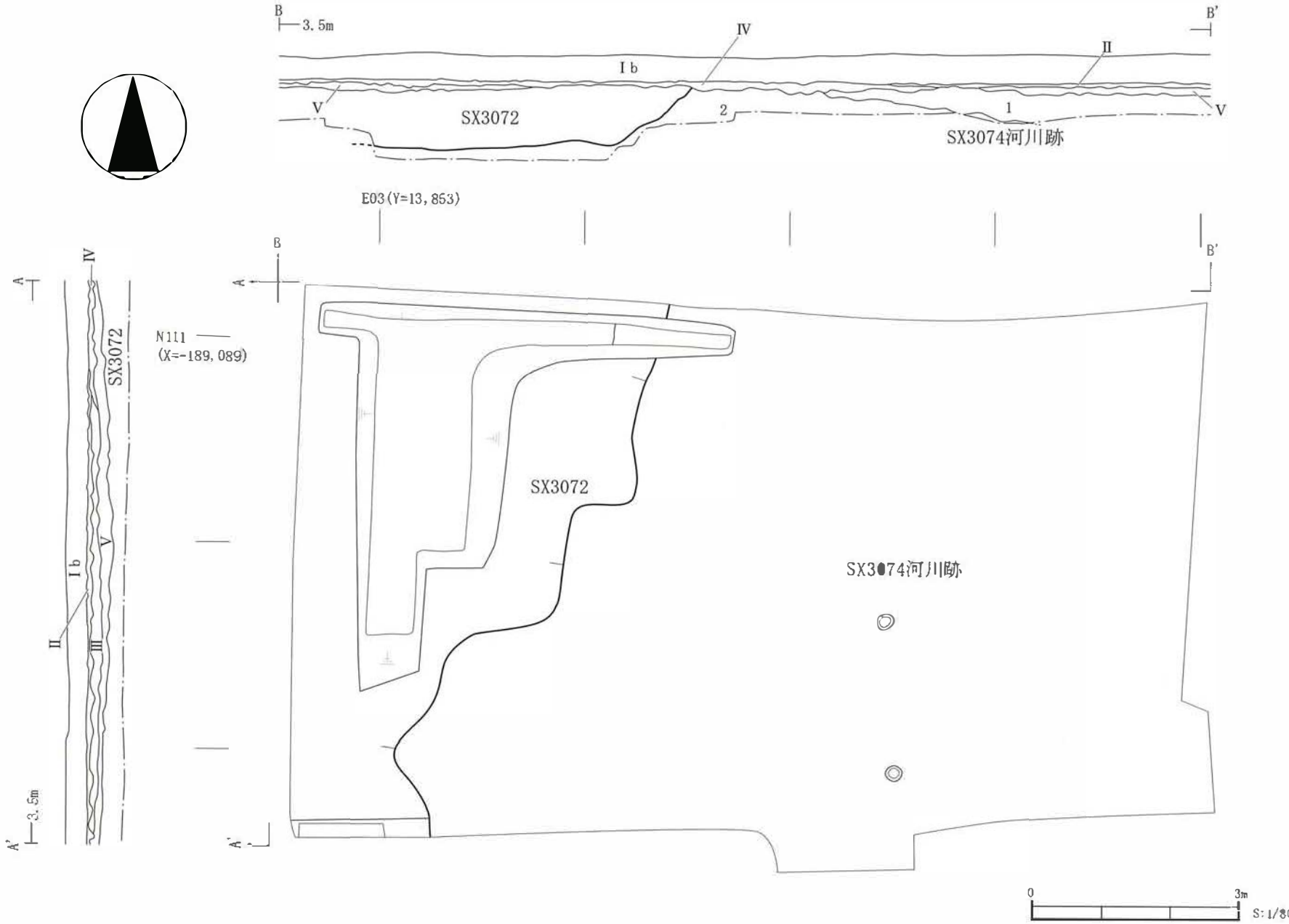
遺物は１層より土師器杯（ＢⅠ類・ＢⅤ類）・甕（Ｂ類）、須恵器杯・甕が出土している。

３．まとめ

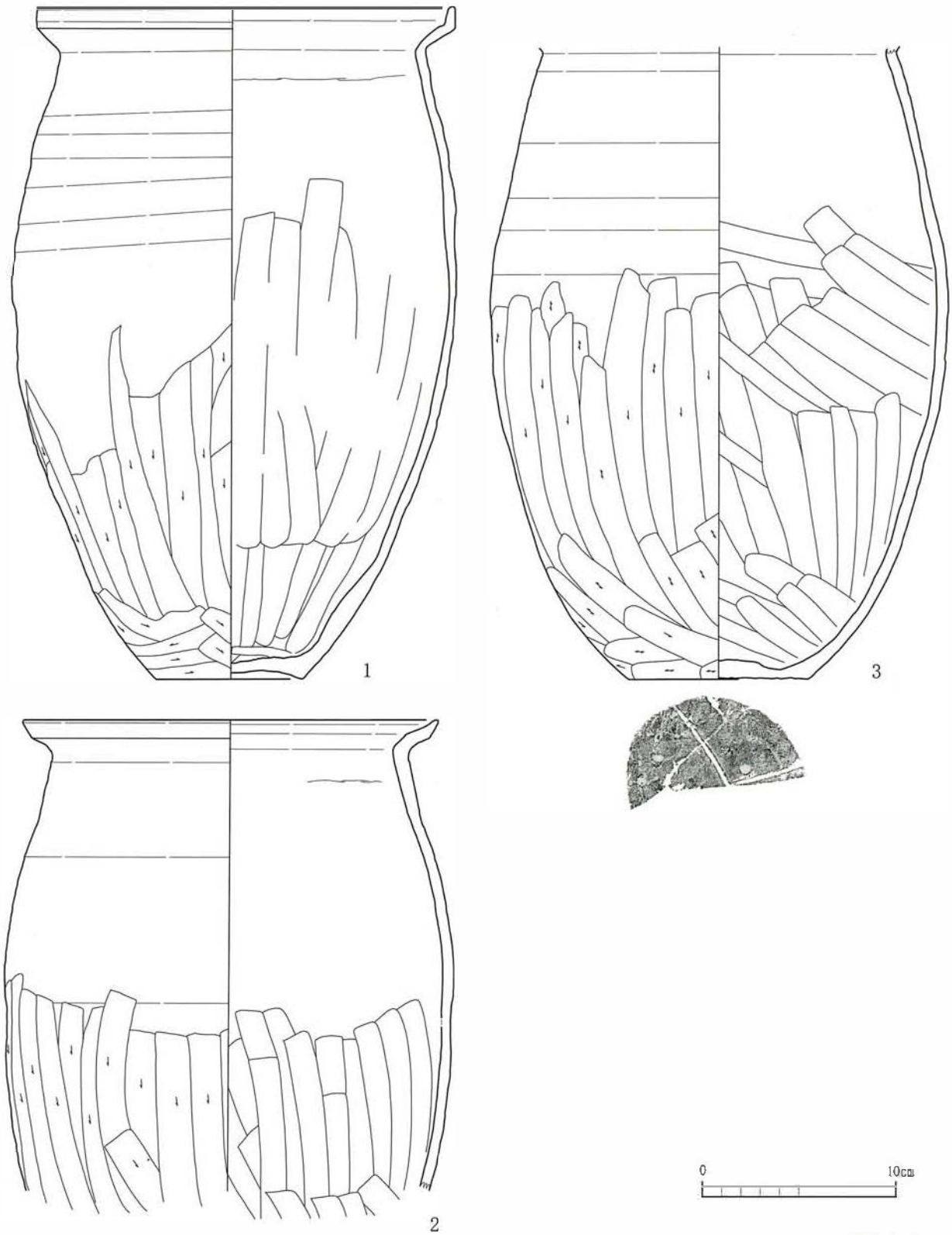
第35次調査では、南北大路を横断する河川に架けられた橋の南東側隣接地を調査した。その結果、ＳＸ3074河川跡とそれより新しい落ち込みであるＳＸ3072を発見した。以下、これらの遺構の年代と性格について考えてみる。

ＳＸ3074河川跡の年代については、底面まで掘り下げることができなかったため、上限の年代を検討する資料が得られなかった。しかし、堆積層との関係や遺構の重複関係を見ると、ＳＸ3074河川跡は灰白色火山灰を含むⅢ層に覆われるＳＸ3072より古いことや、１層から土師器甕（Ｂ類）が出土していることから、９世紀を年代の下限と考えておきたい。一方、ＳＸ3072の年代については、この遺構がＳＸ3074河川跡より新しくまたⅢ層に覆われる。このことは、ＳＸ3072から出土した遺物の特徴がおよそ９世紀代におさまるものであることや、須恵系土器が出土していないことと矛盾しない。したがって、ＳＸ3072の年代はＳＸ3074河川跡埋没以降から10世紀前葉以前と考えられる。

なお、ＳＸ3072および同一の遺構であるＳＸ2079は平面形や壁の立ち上がり方などが一定せず、また埋土もやや粒の大きい砂を主体とした自然堆積である。これらの特徴は第26・27次調査で発見した南北大路の側溝や路面を削る水害の痕跡と似ていることから、ＳＸ3072は人為的な掘り込みとは考えにくく、むしろ水害等の激しい水の流れによって形成されたと考えられる。このことから、この遺構と貞観11（869）年に起きた陸奥国大地震による津波との関連性を調べるため埋土の珪藻分析を実施した。珪藻とは藻類の一種で、淡水や海水などの環境に応じて特定の生息域を持つ。そのため、津波によって海水が流れ込み、本来淡水性や汽水性の珪藻しか生息しない本調査区から海水性のものが検出されることが予想された。その結果、海水性の珪藻は検出されなかったことから、今回の分析からＳＸ3072が津波の痕跡であることを裏付けるには至らなかった。



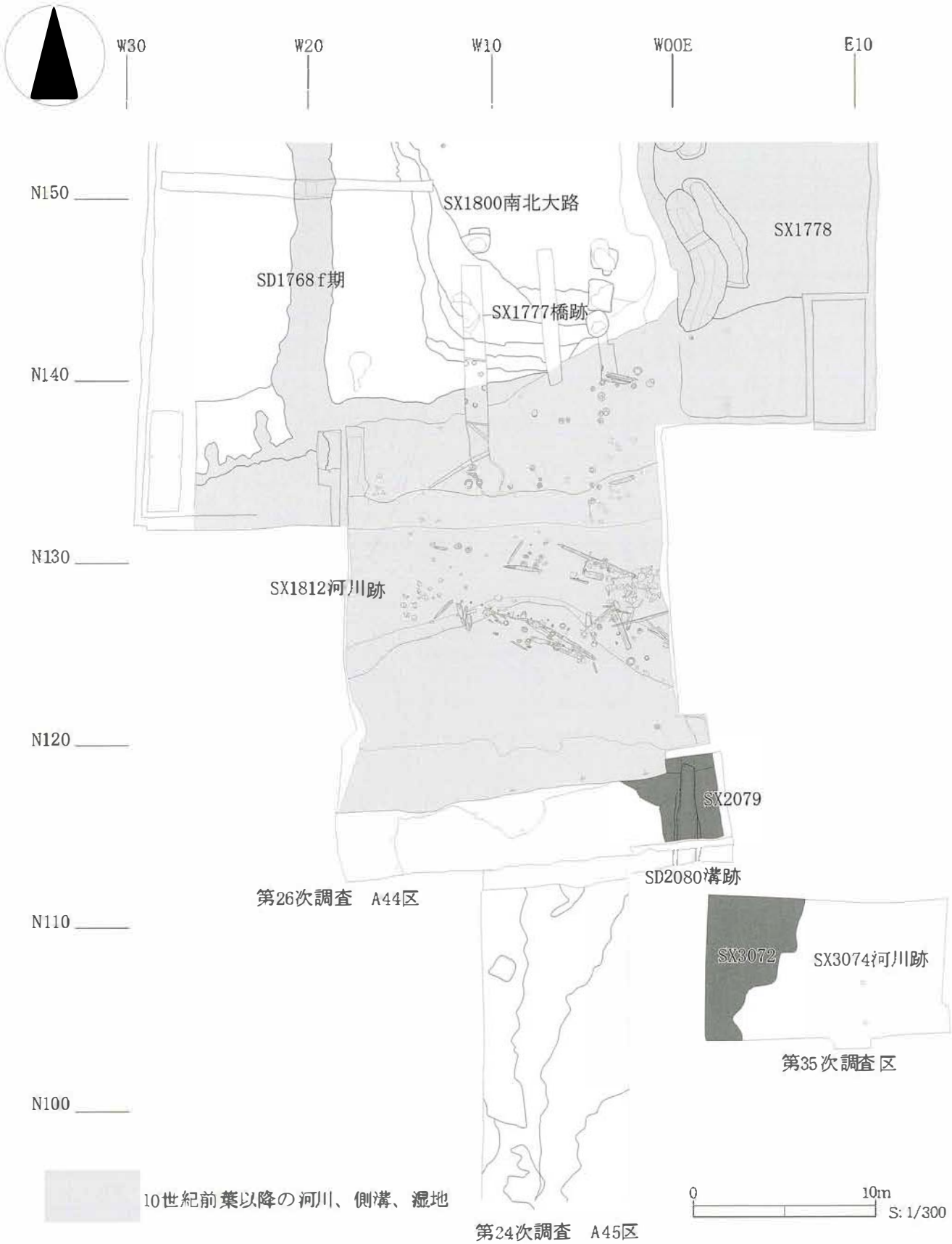
第2図　遺構平面図・断面図



単位(cm)

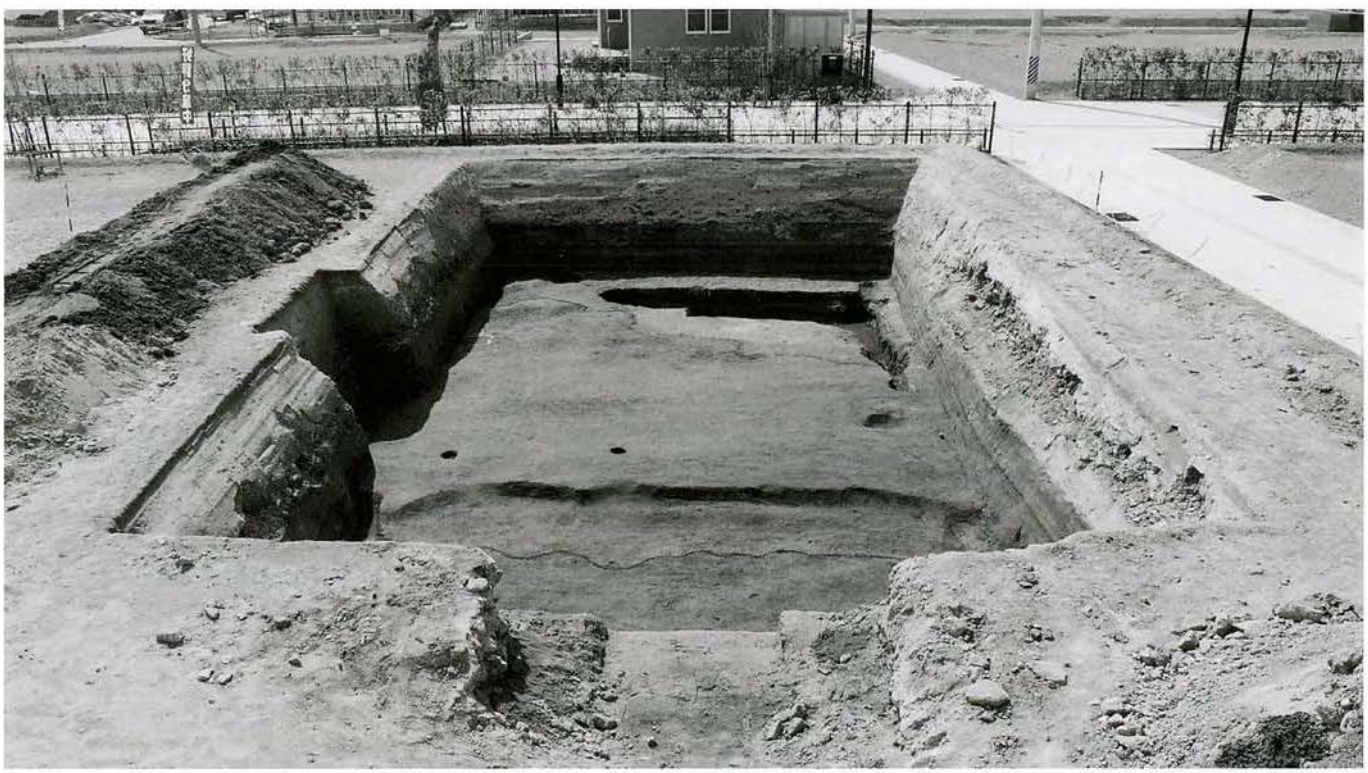
番号	種類	遺構・層位	特徴		口径 残存率	底径 残存率	器高	写真図版	登録番号	備考
			外面	内面						
1	土師器・壺	SX3074・1-1	ロクロナデ、体部下半：手持ちヘラケズリ　底部：ナデ	ロクロナデ、粘土紐積み上げ痕 体部下半：ナデ	21.6 24/24	7.6 24/24	34.8	2-2	R 1	B類
2	土師器・壺	SX3074・1-1	ロクロナデ、体部下半：手持ちヘラケズリ	ロクロナデ、粘土紐積み上げ痕 体部下半：ナデ	21.4 21/24	-	-	-	R 2	B類
3	土師器・壺	SX3074・1-1	ロクロナデ、体部下半：手持ちヘラケズリ	ロクロナデ、体部下半：ナデ	-	9.3 13/24	-	2-3	R 3	B類、底部：ヘラガキ「×」

第3図　出土遺物



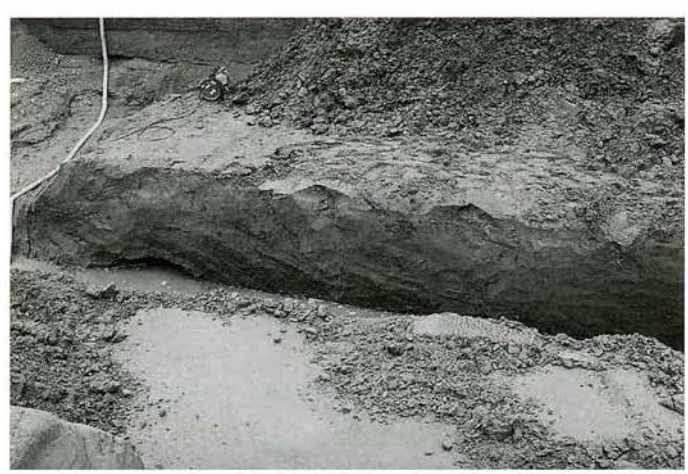
第4図　第35次調査区と周辺の調査区

1　調査区全景　南東より



2　調査区全景　東より

3　SX3074河川跡　土師器甕出土状況　東より

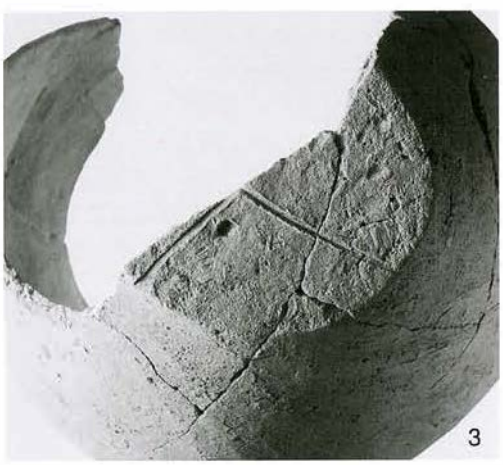


4　SX3074河川跡　掘り抜き断面　南より

写真図版1

1　調査区西壁セクション　東より

2



3

2　SX3074河川跡・1層出土
　　土師器甕(第4図1　R1　S:1/3)

3　SX3074河川跡・1層出土
　　土師器甕　底部(第3図1　R3　S:1/3)

写真図版2

多賀城市、市川橋遺跡における珪藻分析

株式会社 古環境研究所

1．はじめに

珪藻は、珪酸質の被殻を有する単細胞植物であり、海水域や淡水域などの水域をはじめ、湿った土壌、岩石、コケの表面にまで生息している。珪藻の各分類群は、塩分濃度、酸性度、流水性などの環境要因に応じて、それぞれ特定の生息場所を持っている。珪藻化石群集の組成は、当時の堆積環境を反映していることから、水域を主とする古環境復原の指標として利用されている。

ここでは、市川橋遺跡で採取された堆積物について珪藻分析を行い、堆積環境を検討する。

2．試料

分析試料は、試料2（砂礫土）と試料3（砂礫土）の2点である。

3．方法

試料には以下の物理化学処理を施し、プレパラートを作成した。

1）試料から1cm^{3}を秤量する。

2）10%過酸化水素水を加え、加温し反応させながら、一晩放置する。

3）上澄みを捨て、細粒のコロイドおよび薬品の水洗を行う。水を加え、1.5時間静置後、上澄みを捨てる。 この操作を5、6回繰り返す。

4）残渣をマイクロピペットでカバーグラスに滴下し乾燥させる。マウントメディアによって封入しプレパラートを作成する。

プレパラートは生物顕微鏡で600～1500倍で検鏡し、直線視野法により計数を行う。同定・計数は、珪藻被殻が100個体以上になるまで行い、少ない試料についてはプレパラート全面について精査を行った。

4．結果

試料から出現した珪藻は、真一中塩性種（海一汽水生種）4分類群、貧塩性種（淡水生種）47分類群である。計数された珪藻の学名と個数を表1に示す。また珪藻総数を基数とする百分率を算定したダイアグラムを図1に示す。

以下にダイアグラムで表記した主要な分類群を記す。

〔真一中塩性種〕

Achnanthes delicatula、*Actinocyclus* sp.、*Navicula peregrina*

〔貧塩性種〕

Achnanthes lanceolata、*Amphora copulata*、*Aulacoseira* sp.、*Caloneis lauta*、*Cocconeis placentula*、*Diploneis* sp.、*Fragilaria construens*、*Gomphonema parvulum*、*Hantzschia amphioxys*、*Meridion circulare* v. *constrictum*、*Navicula contenta*、*Navicula decussis*、*Navicula elginensis*、*Navicula mutica*、*Navicula pupula*、*Navicula viridula* v. *rostellata*、*Nitzschia brevissima*、*Pinnularia borealis*、*Pinnularia interrupta*、*Pinnularia microstauron*、*Pinnularia subcapitata*、*Pinnularia viridis*、*Rhoicosphenia abbreviata*、*Rhopalodia gibberula*、*Surirella angusta*

1）試料3

貧塩性種（淡水生種）がほとんどを占め、陸生珪藻の*Navicula mutica*、*Nitzschia brevissima*、*Hantzschia amphioxys*が優占し、中～下流性河川環境指標種群の*Achnanthes lanceolata*、沼沢湿地付着生環境指標種群の*Navicula elginensis*の流水性種がやや高率に出現する。真一中塩性種（汽水一海水生種）の海水砂質干潟指標種群の*Achnanthes delicatula*が低率に出現する。

2）試料2

貧塩性種（淡水生種）がほとんどを占め、中～下流性河川環境指標種群の*Achnanthes lanceolata*、沼沢湿地付着生環境指標種群の*Navicula elginensis*などの流水性種の占める割合が高く、*Navicula mutica*、*Navicula contenta*を主に*Hantzschia amphioxys*などの陸生珪藻の割合もやや高い。真一中塩性種（汽水一海水生種）の海水砂質干潟指標種群の*Achnanthes delicatula*が低率に出現する。

5．珪藻分析から推定される堆積環境

以下、下部より堆積環境の推定を行う。

1）試料3（砂礫土）

貧塩性種（淡水生種）がほとんどを占め、中～下流性河川環境指標種群ないし沼沢湿地付着生環境指標種群の流水性種が優占し、陸生珪藻もやや高率に出現する。こうしたことから、河川ないしその縁辺の水草の生育する流水域からやや湿った環境が示唆される。海水砂質干潟環境指標種群などの真一中塩性種（汽水一海水生種）が低率に出現することから、若干ではあるが河口域の干潟の影響を受けた可能性が示唆される。

2）試料2（砂礫土）

珪藻の密度がやや低く、陸生珪藻が高率となり優占する。中～下流性河川環境指標種群および沼沢湿地付着生環境指標種群の流水性種がやや高率に出現する。こうしたことから、河川の縁辺の流水の影響を受ける湿った環境が示唆される。

6．まとめ

市川橋遺跡で採取された2試料について珪藻分析を行った。その結果、下部の試料3（砂礫土）の層準では河川ないしそ

の縁辺の水草の生育する流水域からやや湿った環境が示唆され、弱いながら河口域の干潟の影響が推定された。試料2（砂礫土）の層準になると、河川の縁辺の流水の影響を受ける湿った環境が示唆された。

参考文献

Hustedt,F.(1937-1938)Systematische und ologishe Untersuchungen uber die DiatomeenFlora von Java,Bali und Sumatra nach dem Material der Deutschen Limnologischen Sunda-Expedition. Arch.Hydrobiol, Suppl.15,p.131-506.

Patrick, Reimer, C. W.(1966) The diatom of the United States, vol.1. Monographs of Natural Sciences of Philadelphia, No.13, The Academy of Natural Siences of Philadelphia, 644p.

Lowe,R.L.(1974)EnvironmentalRequirements and pollusion tolerance of fresh-water diatoms. 333p., National Enviroumental Reserch.Center. Philadelphia, No.13, The Academy of Natural Siences of Philadelphia, 213p.

Asai,K.&,Watanabe,T.(1995)Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relaiting to Organic Water Pollution(2) Saprophilous and saproxenous taxa.Diatom,10,p.35-47.

小杉正人（1986）陸生珪藻による古環境解析とその意義ーわが国への導入とその展望ー．植生史研究，第1号，植生史研究会，p. 29-44.

小杉正人（1988）珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用．第四紀研究，27，p. 1-20.

安藤一男（1990）淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復原への応用．東北地理，42，p. 73-88.

伊藤良永・堀内誠示（1991）陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用．珪藻学会誌，6，p. 23-45.

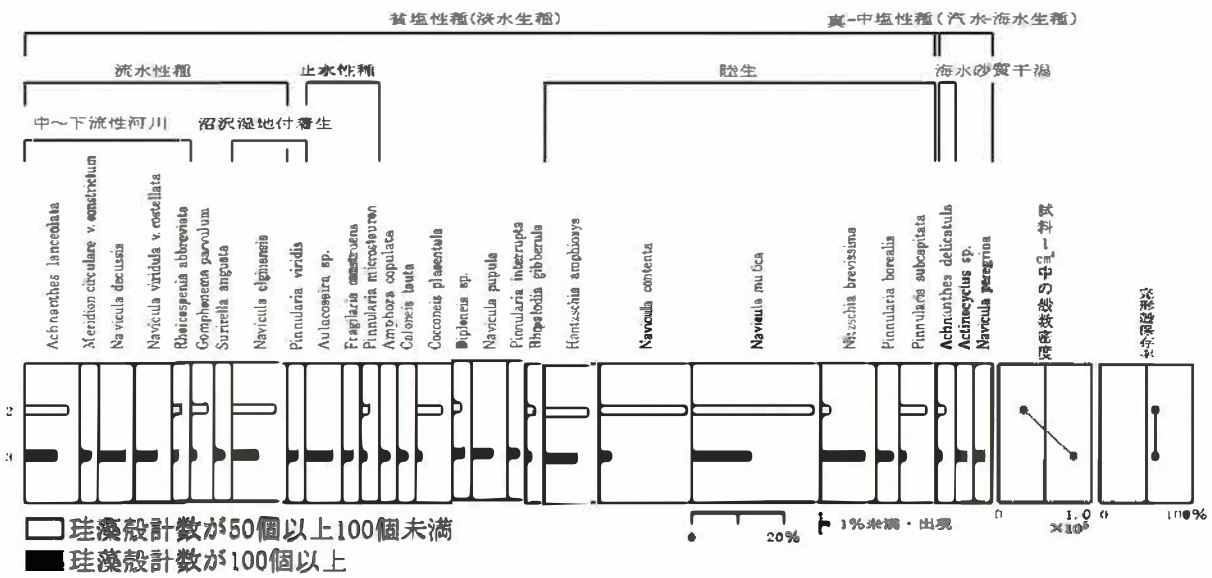
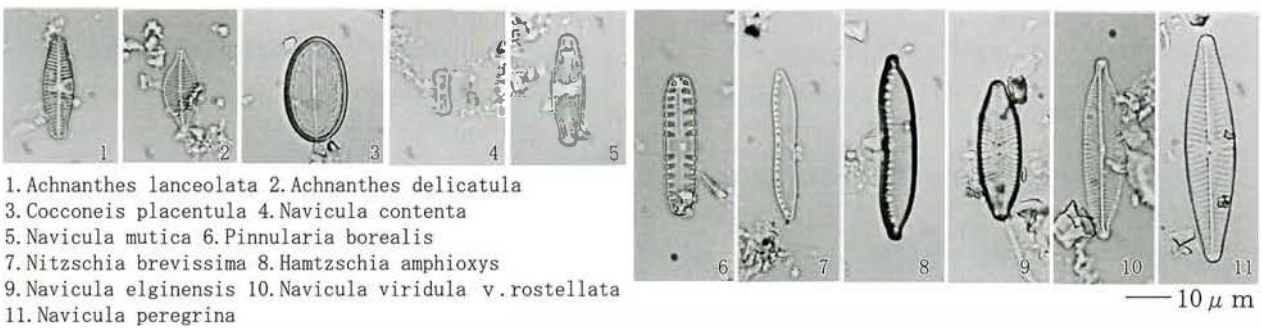


図１　市川橋遺跡における主要珪藻ダイアグラム



1. Achnanthes lanceolata 2. Achnanthes delicatula
3. Cocconeis placentula 4. Navicula contenta
5. Navicula mutica 6. Pinnularia borealis
7. Nitzschia brevissima 8. Hamtzschia amphioxys
9. Navicula elginensis 10. Navicula viridula v. rostellata
11. Navicula peregrina

Ⅳ　市川橋遺跡第37次調査

1．調査に至る経緯と経過

本調査は、城南土地区画整理地内の個人住宅建設に伴うものである。住宅の基礎工事にあたっては、径５ｃｍ、長さ７ｍの鋼管杭を打ち込むことから、地下の遺構への影響が懸念された。このため、施工主及び施工業者と基礎工法の変更についての協議を行ったが、申請された工法で実施することに決定した。

これを受けて、発掘調査にかかる協議を開始することとなった。当該区は、周辺の調査より城外の幹線道路である南北大路の西側溝上にあることが明らかであり、古代都市を解明する上では重要な地点であることから、調査区の設定及び期間について数回の打ち合わせを設けた。この結果、施工主の協力により、調査区については建物の範囲外でも可能な限り広範囲の調査を実施できること、期間については８月中旬までなら可能であることの了解を得た。その後、平成15年６月６日、土地所有者より発掘調査についての依頼書及び承諾書の提出を受け、６月23日より現地調査を開始した。

第1図　調査区位置図

初日は、重機による表土除去を行ったが、区画整理による厚さ1.5ｍの盛土除去に終始した。翌24日、旧水田層の除去を行うとともに、作業員を導入し第26次調査後に施した遺構保護層の除去及び遺構検出作業を開始した。その結果、灰白色火山灰降下以降のＳＸ3070南北大路とＳＤ3071西側溝、ＳＤ3063～3067小溝群などを発見し、これらの遺構が褐灰色砂質土（Ⅲ層）上面で検出されることを確認した。27日より、Ⅲ層上面検出遺構の埋土除去を行い、ＳＤ3071では灰白色火山灰降下以降に２時期（ｃ→ｄ期）の変遷があること、そのうちｃ期がＳＤ3073東西溝と接続することを確認した。７月２日、実測図作成用の基準点を設置し、平面図・断面図の作成に取りかかるが、梅雨時期の調査であったことから雨天が続き、約１週間調査を中断した。９日、調査区の復旧作業を行い、午後より平面図作成を再開する。11日、Ⅲ層上面検出遺構の平面図が終了し、午後よりこれの除去及び下層遺構の検出作業に入る。精査の結果、下層ではＳＤ3071南北大路西側溝（ａ・ｂ期）とＳＸ3061河川跡などを検出し、ＳＤ3071ｂがＳＸ3061河川に合流していることを確認した。14日より、これら下層遺構の埋土除去を開始し、ＳＸ3061より多量の土器類をはじめ、付札木簡や削屑などを発見した。18日、下層遺構の埋土除去が完了し、現地調査の一切を終了した。

2．調査成果

（1）基本層序

今回の調査で確認した層序は、以下のとおりである。

Ⅰａ層　区画整理事業に伴う盛土層で、層厚は約1.6mである。

Ⅰｂ層　現代の水田耕作土で、層厚は約20cmである。

Ⅱａ層　炭化物が多く混入する褐灰色粘土（7.5YR4/1）。南西端部にのみ残存。

Ⅱｂ層　褐灰色シルト（10YR4/1）や黒褐色粘土（10YR3/1）が斑状に混入する灰黄褐色シルト（10YR5/2）。南西端部にのみ残存。

Ⅲ　層　炭化物が若干混入する褐灰色砂質土（10YR4/1）で、層厚は10～20cmである。今回の調査では、Ⅲ層を境に上層の遺構と下層の遺構を確認した。

Ⅳ　層　東半部で確認した、にぶい黄橙色砂（10YR6/4）。本地区周辺においては、この層が古代の最終遺構検出面である。

Ⅴ　層　ＳＸ3061 河川跡底面で確認した泥炭層（スクモ層）。一部深掘りの結果、その下層では砂と互層に堆積していることから、古い河川埋土の可能性がある。

（2）発見遺構と遺物

ＳＸ3070 南北大路跡（第２～６図）

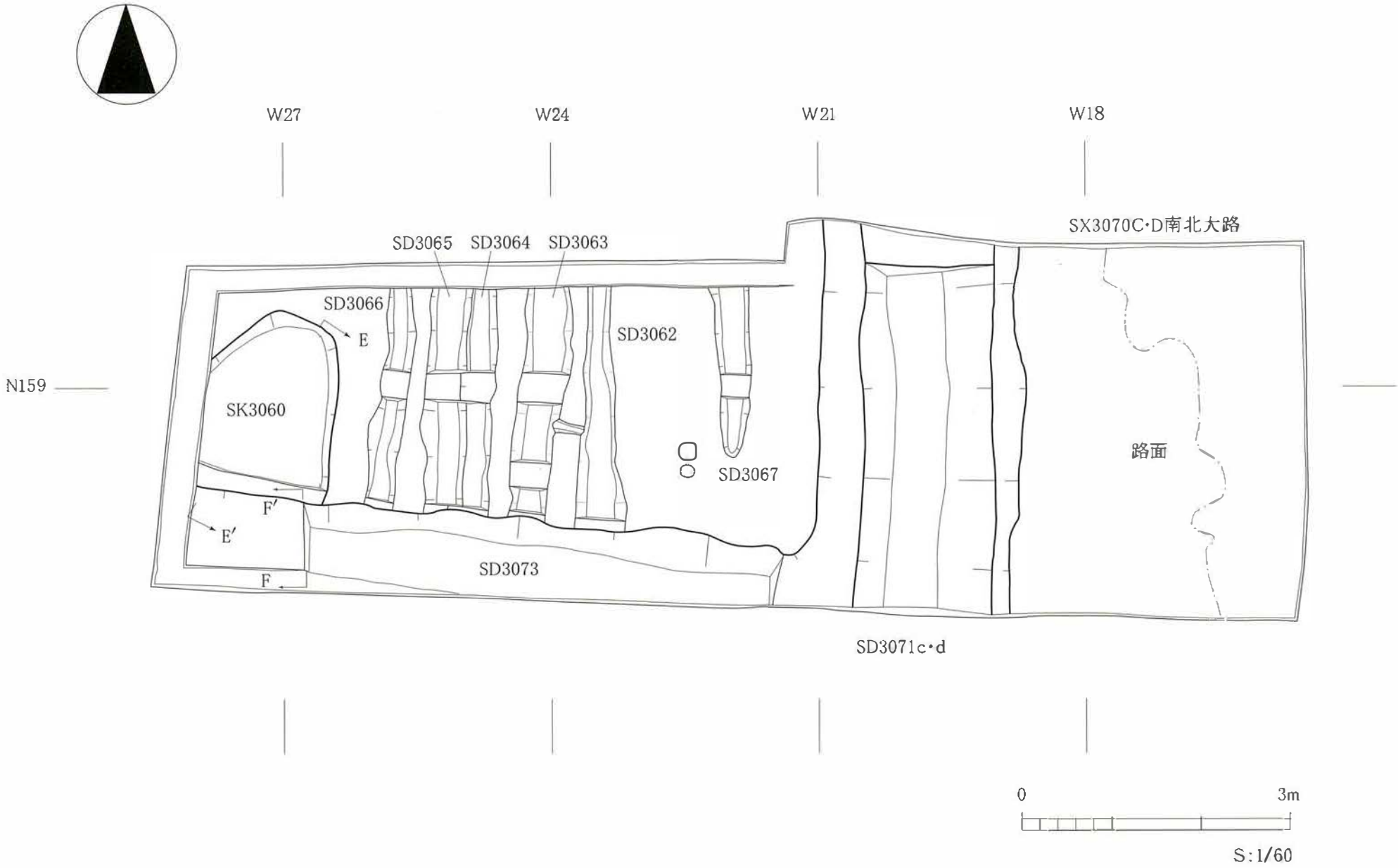
調査区東半部で発見した、幅23～25m段階の南北大路跡である。路面とＳＤ3071 西側溝を検出し、路面で２時期（ａ→ｂ）、西側溝で４時期（ａ→ｄ）の変遷を確認した。ここでは、側溝の変遷から４時期（Ａ→Ｄ）に区分し、各時期ごとに説明する。

ＳＸ3070Ａ：北半部でＳＤ3071ａを約1.4m確認した。ほとんどがＢ期の側溝に破壊されているため、規模及び路面については不明である。

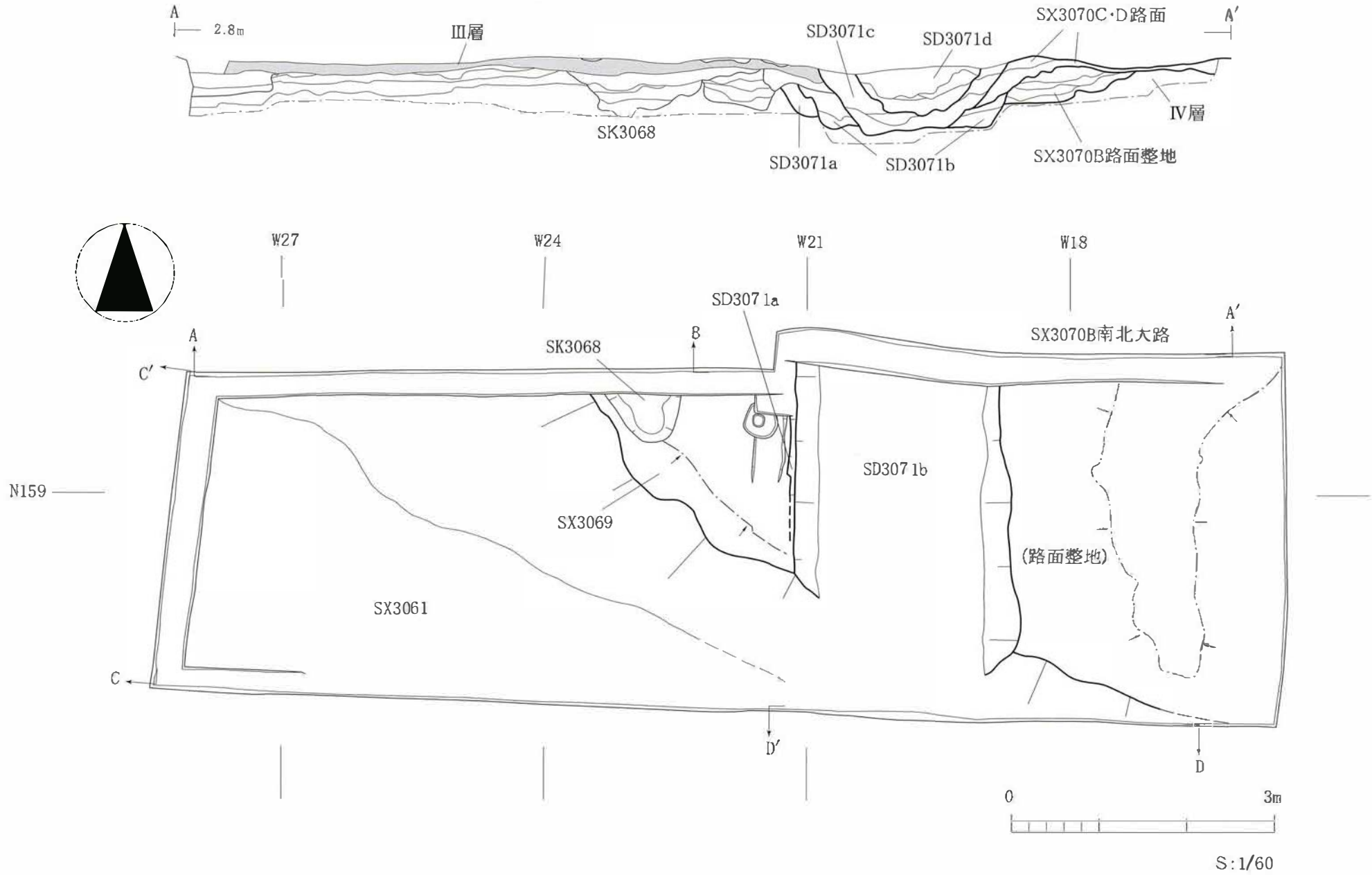
ＳＸ3070Ｂ：Ⅲ層下層で路面ａとＳＤ3071ｂを発見した。調査区南端部でＳＸ3061 河川と接続している。路面はにぶい黄橙色砂（Ⅳ層）であるが、側溝際からＳＸ3061 と接続する南端部及び調査区東端部にかけて整地層を確認した。整地層は側溝際で40cmの厚さがあり、４層に大別することができる（第４図：13～16層）。13層は黒褐色粘土が小ブロック状に多量に混入する灰黄褐色砂質土、14層は灰黄褐色砂が混入する黒褐色粘土、15・16層は黒褐色粘土が多量に混入するにぶい黄橙色シルトである。西側溝は約3.6m検出した。規模は、上幅2.3～2.5m、下幅1.8～1.9m、深さ0.4～0.5mである。方向は北で０度41分東に傾いており、発掘基準線とほぼ一致している。断面形は、逆台形を呈しており、壁はほぼ垂直に立ち上がっている。底面はＣ期側溝に大部分が破壊されているものの、残存する箇所では概ね平坦である。底面における比高差もほとんどない。埋土は２層（第４図：11・12層）に大別できる。上層は黒褐色粘土が多量に混入する褐灰色粘質土、下層は黒色粘土、緑灰色砂が多量に混入する黒褐色粘土である。

遺物は、側溝から須恵器杯（Ⅲ類）が出土している。

ＳＸ3070Ｃ：Ⅲ層上面で路面ｂとＳＤ3071ｃを発見した。調査区南端部でＳＤ3073 東西溝と接続している。路面の埋土は２層（第４図：９・10層）に大別でき、下層が褐灰色砂質土、上層が黒褐色砂質土である。西側溝は上幅2.2～2.3m、下幅1.3～1.4m、深さ0.7～0.8mである。方向は北で０度53分東に傾いており、発掘基準線とほぼ一致している。断面形は、逆台形を呈しており、壁の立ち上がりは急である。底面

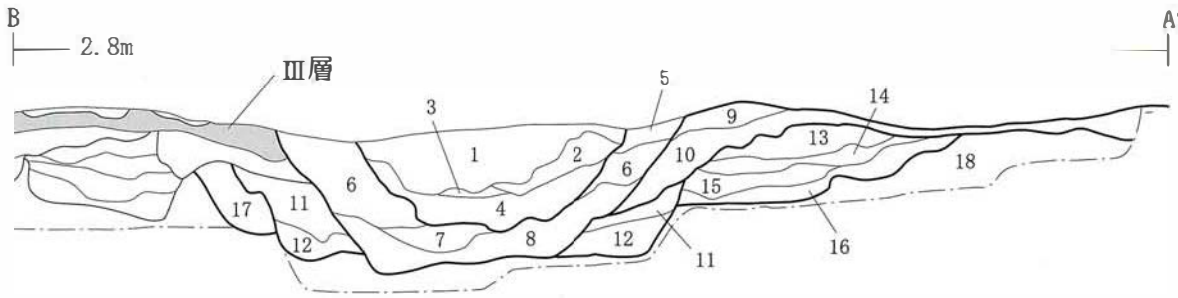


第2図　Ⅲ層上面検出遺構平面図

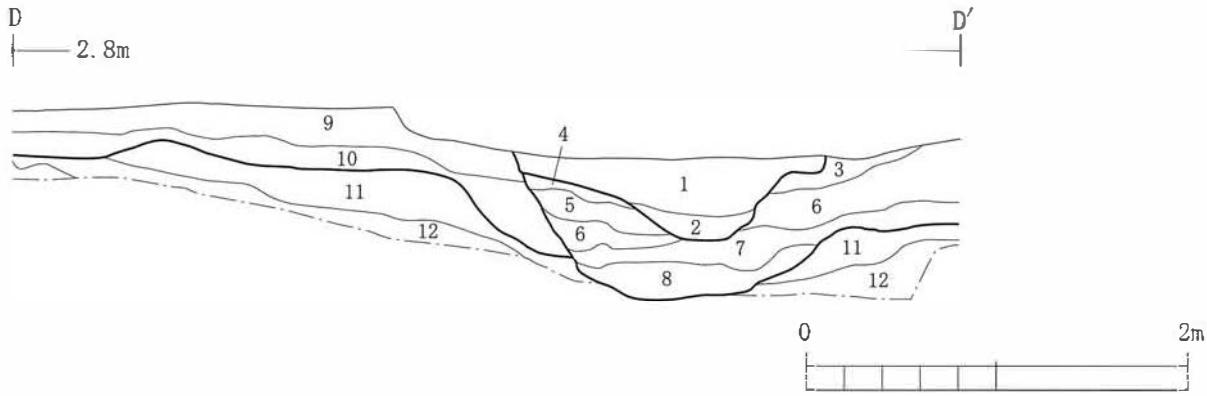


第3図　Ⅲ層下層検出遺構平面図

北壁断面



南壁断面



北壁断面

No.	土色・土性	備考	
1	黒褐色粘土（10YR3/1）	炭化物が斑状に混入	SD3071d期
2	黒色粘土(10YR1.7/1)	炭化物が多量に混入	
3	にぶい黄褐色砂(10YR4/3)	粗砂層	
4	黒褐色粘土(10YR2/2)	粗砂、植物遺体が多量に混入	
5	灰黄褐色砂質土(10YR4/2)	灰白色火山灰二次堆積	SD3071c期
6	褐灰色砂質土(10YR4/1)		
7	緑灰色砂(7.5GY6/1)		
8	褐灰色砂質土(10YR4/1)		
9	黒褐色砂質土(2.5Y3/2)	黒褐色粘土(10YR3/1)が混入	SX3070C・D路面
10	褐灰色砂質土(10YR4/1)	にぶい黄褐色シルト(10YR6/4)、砂粒が混入	
11	緑黒色粘土(5GY2/1)	緑灰色シルト(10GY5/1)が混入	SD3071b期
12	緑灰色シルト(10GY5/1)	オリーブ黒色粘土(5GY2/1)が多量に混入	
13	灰黄褐色砂質土(10YR4/2)	黒褐色粘土(10YR3/1)、粗砂が多量に混入	SX3070B路面整地
14	黒褐色粘土(10YR3/2)	灰黄褐色砂(10YR5/2)が混入	
15	にぶい黄橙色シルト(10YR6/4)	黒褐色粘土(10YR3/1)が多量に混入	
16	にぶい黄橙色シルト(10YR6/4)	黒褐色粘土(10YR3/1)が混入	
17	褐灰色粘土(10YR4/1)	にぶい黄橙色シルト(10YR6/4)が多量に混入	
18	にぶい黄橙色砂(10YR6/4)		Ⅳ層

南壁断面

No.	土色・土性	備考	
1	黒褐色粘土（10YR3/1）	炭化物が斑状に混入	SD3071d期
4	黒褐色粘土(10YR2/2)	粗砂、植物遺体が多量に混入	
a	褐灰色砂質土(10YR4/1)	炭化物が斑状に混入	SD3071c期（6・7層はSD3073溝跡1・2層と同一）
b	灰黄褐色砂(10YR4/2)		
5	灰黄褐色砂質土(10YR4/2)	灰白色火山灰二次堆積（6・7層に多量に混入）	
6	褐灰色砂質土(10YR4/1)		
7	緑灰色砂(7.5GY6/1)		
8	褐灰色砂質土(10YR4/1)		
9	黒褐色砂質土(2.5Y3/2)	黒褐色粘土(10YR3/1)が混入	SX3070C・D路面
10	褐灰色砂質土(10YR4/1)	にぶい黄褐色シルト(10YR5/4)、砂粒が混入	
c	黒褐色ねんど(10YR3/1)	炭化物が多量に混入	SX3061河川埋土
d	緑灰色砂(10GY5/1)	オリーブ黒色粘土(5GY2/1)と互層	

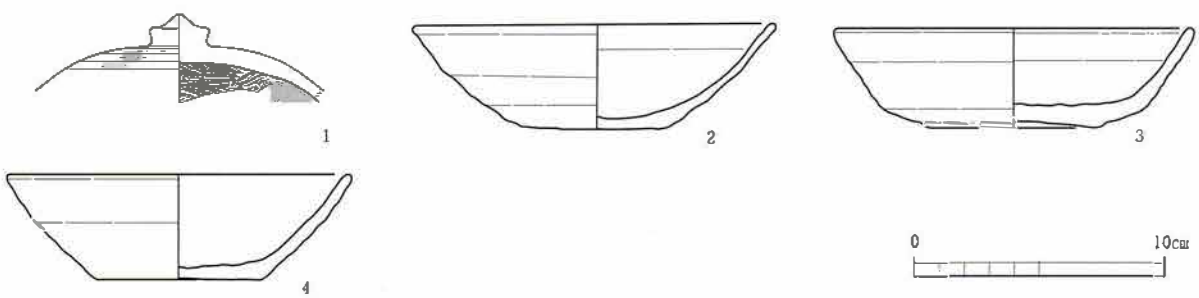
第4図　SD3071南北大路西側溝断面図

には凹凸はほとんど見られず平坦である。底面における比高差については、北側から南側に向かって約20cm傾斜している。埋土は4層に大別できる（第4図：5～8層）。5層はにぶい黄褐色砂質土、6層は褐灰色砂質土、7層は炭化物が混入する褐灰色砂質土、8層は黒褐色シルト、にぶい黄橙色土が混入する褐灰色砂質土である。なお、南壁のa・b層は平面では確認していない。また、いずれの層にも灰白色火山灰が混入するが、特に6・7層にはブロック状に多量に混入している。

遺物は、路面埋土から土師器杯（BV類）、須恵器杯（V類）、鍛冶滓（椀形）、側溝から土師器杯（BV類）・高台付杯・蓋・甕（B類）、須恵器杯（Ⅲ類・V類）・甕・長頸瓶、須恵系土器杯、丸瓦（Ⅱ類）、平瓦（ⅠAa類・ⅡBa類・ⅡC類）がある。

SX3070D：路面とSD3071dを発見した。路面は、C期の路面bを踏襲している。西側溝の規模は、上幅1.4～1.5m、下幅0.5～0.6m、深さ0.5～0.6mであり、方向は北で1度47分東に傾いている。断面形は、椀形を呈しており、壁の立ち上がりは緩やかである。底面には北側で凹凸が認められるもの、全体的には平坦である。底面における比高差は、ほとんどない。埋土は4層に大別できる（第4図：1～4層）。1層は炭化物が若干混入する黒褐色粘土、2層は炭化物が多量に混入する黒色粘土、3層はにぶい黄褐色粗砂、4層は黒褐色粘土である。

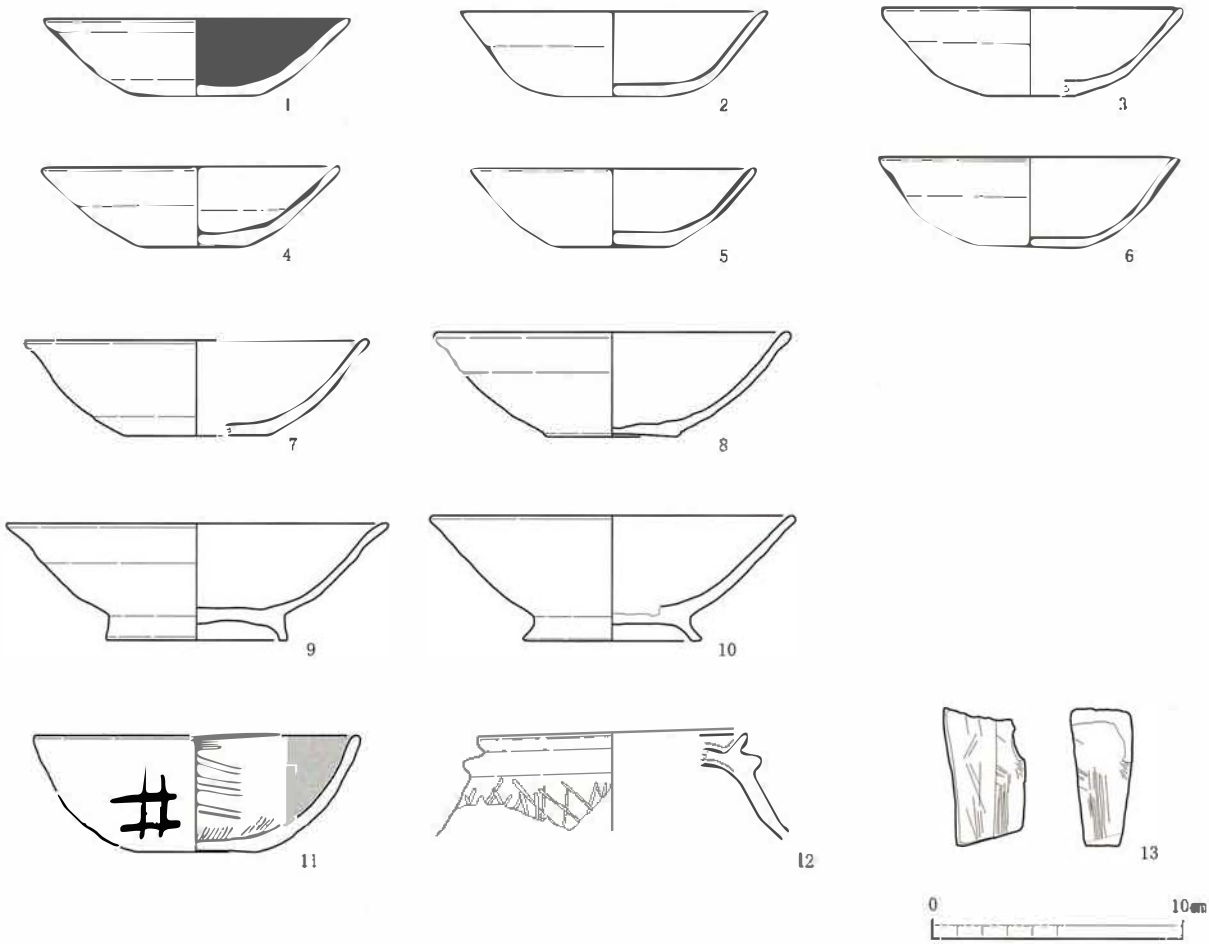
遺物は、側溝から土師器杯（BV類）・甕（A類・B類）、須恵器杯・甕・長頸瓶、須恵系土器杯・高台付杯、灰釉陶器長頸瓶、円面硯、丸瓦（Ⅱ類）、平瓦（ⅠAa類・ⅡBa類）がある。全体の出土数では、須恵系土器の割合が40%と高い割合を占める。また、土師器杯には墨書土器（墨書「廿」）がある。



単位(cm)

番号	種類	遺構・層位	特徴 外面	特徴 内面	口径 残存率	底径 残存率	器高	写真図版	挿図番号	備考
1	土師器・蓋	SD3071c・1層	ロクロナデ、回転ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	—	—	—		R27	
2	須恵系土器・杯	SD3071c・1層	ロクロナデ、回転糸切り	ロクロナデ	(14.3) 19/24	5.9 24/24	4.2	3-2	R28	
3	須恵器・杯	SD3071b・2層	ロクロナデ、回転糸切り	ロクロナデ	(14.3) 8/24	6.9 24/24	4		R26	Ⅲ類
4	須恵器・杯	SX3070B 路面埋土	ロクロナデ、底部：回転糸切り	ロクロナデ	13.7 1/24	6.5 24/24	4.3		R60	V類

第5図　SD3071b・c溝跡、SX3070南北大路路面埋土出土遺物



単位(cm)

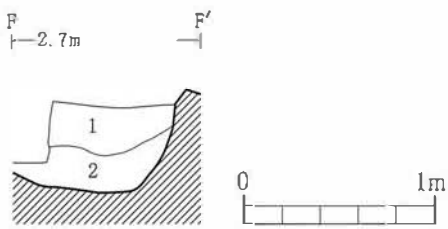
番号	種類	遺構・層位	特徴 外面	特徴 内面	口径 残存率	底径 残存率	器高	ツ写図版	登録番号	備考
1	須恵系土器・杯	1層	ロクロナデ、底部：回転糸切り	ロクロナデ	(12.1) 4/24	5.0 13/24	3.2		R31	
2	須恵系土器・杯	1層	ロクロナデ、底部：回転糸切り	ロクロナデ	(12.1) 4/24	4.8 17/24	3.5		R10	
3	須恵系土器・杯	1層	ロクロナデ、底部：回転糸切り	ロクロナデ	11.9 17/24	(4.2) 4/24	4.6		R12	
4	須恵系土器・杯	2層	ロクロナデ、底部：回転糸切り	ロクロナデ	(11.9) 5/24	4.5 24/24	3.3		R20	
5	須恵系土器・杯	2層	ロクロナデ、底部：回転糸切り	ロクロナデ	(11.3) 5/24	4.7 24/24	3.15		R23	
6	須恵系土器・杯	2層	ロクロナデ、底部：回転糸切り	ロクロナデ	11.9 10/24	3.9 24/24	3.6		R11	
7	須恵系土器・杯	2層	ロクロナデ、底部：回転糸切り	ロクロナデ	13.75 20/24	5.8 12/24	3.85		R19	
8	須恵系土器・杯	2層	ロクロナデ、底部：回転糸切り	ロクロナデ	(14.0) 4/24	5.2 24/24	4.15		R21	
9	須恵系土器 高台付杯	2層	ロクロナデ、底部：回転糸切り	ロクロナデ	(15.1) 7/24	7.2 12/24	4.65		R18	
10	須恵系土器 高台付杯	2層	ロクロナデ、底部：回転糸切り	ロクロナデ	14.5 13/24	7.1 21/24	6.1	3－1	R17	
11	土師器・杯	2層	ロクロナデ、底部：回転糸切り	ヘラミガキ・黒色処理	(12.8) 6/24	4.8 16/24	4.7		R22	体部に墨書「井」BV類
12	円面硯	1層	ロクロナデ	ロクロナデ	(10.5) 5/24	—	—	3－10	R14	
13	砥石	2層	計測値：最大長 5.45、最大幅 2.9、最大厚 2.45						R30	

第6図　SD3071d溝跡出土遺物

ＳＤ3073 溝跡（第２・７図）

調査区南辺部のⅢ層上面で発見した東西方向の溝跡で、長さ約７ｍにわたって検出した。ＳＫ3060、ＳＤ3062・3063・3064・3065・3066 小溝群と重複し、それらよりも新しい。また、東端部でＳＤ3071ｃと接続している。方向は、西で４度50分北に傾いている。規模は上幅1.3～1.5ｍ、下幅0.5～0.6ｍ、深さ0.4～0.5ｍである。断面形は、やや丸みを帯びた逆台形を呈しており、壁は垂直に立ち上がっている。底面は概ね平坦であり、本調査区内での比高差はほとんどない。埋土は2層に大別できる。１層は褐灰色砂質土であり、灰白色火山灰や炭化物が混入している。２層は黒褐色粘土であり、多量の炭化物が混入している。

遺物は、土師器杯（ＢⅡ類・ＢＶ類）・高台付杯・甕（Ｂ類）、須恵器杯（Ⅲ類・Ⅴ類）・甕・瓶、須恵系土器杯、製塩土器、砥石がある。



No.	土色・土性	備考	
1	褐灰色砂質土（10YR4/1）	灰白色火山灰二次堆積	遺物取上げ：１層
2	黒褐色粘質土（10YR2/2）	炭化物が多量に混入	遺物取上げ：２層

第7図　SD3073溝跡断面図

ＳＤ3632～3637 小溝群（第２図）

調査区西半部のⅢ層上面で発見した南北方向の小溝跡である。ＳＤ3071 と重複しており、それよりも古い。方向は、北で２度～６度東に傾いている。規模は上幅0.3～0.6ｍ、下幅0.2～0.3ｍ、深さ４～10㎝である。断面形は皿状であり、壁は緩やかに立ち上がっている。底面は凹凸が著しいもの（ＳＤ3067）と平坦なもの（ＳＤ3062～3066）がある。埋土は褐灰色砂質土であり、灰白色火山灰が自然体積するもの（ＳＤ3062・3065）と、斑状に二次堆積するもの（ＳＤ3063・3064・3065・3066）がある。

遺物は、土師器杯（ＢⅠ類・ＢⅡ類・ＢＶ類）・甕（Ｂ類）・甑、須恵器杯（Ⅱ類・Ⅲ類・Ⅴ類）・瓶、灰釉陶器手付き瓶、丸瓦（Ⅱ類）平瓦（ⅡＢｂ類）、製塩土器がある。

ＳＫ3060 土壙（第２・８・９図）

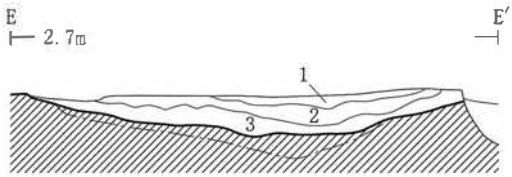
調査区西端部のⅢ層上面で発見した土壙である。ＳＤ3073 と重複し、それよりも古い。平面形は、南北２ｍ以上、東西1.4ｍ以上の不整形であり、深さは約20㎝である。断面形は非常に緩やかな皿状を呈しており、底面には若干の凹凸が確認できる。埋土は3層に大別できる。１層は褐灰色砂質土が多量に混入する黒褐色粘質土、２層は炭化物が多量に混入する黒褐色粘質土、３層が炭化物が若干混入する褐灰色砂質土である。

遺物は、土師器杯（ＢⅠ類・ＢⅡ類・ＢＶ類）・高台付杯・甕、須恵器杯（Ⅲ類・Ⅴ類）・高台付杯、甕・瓶、製塩土器、土器製円盤がある。

ＳＸ3069河川（第３・10図）

調査区北側のⅢ層下層で発見した河川跡である。ＳＸ3061 と重複し、それよりも古い。北側部分の埋土を一部除去したのみであるため、詳細については明らかではない。

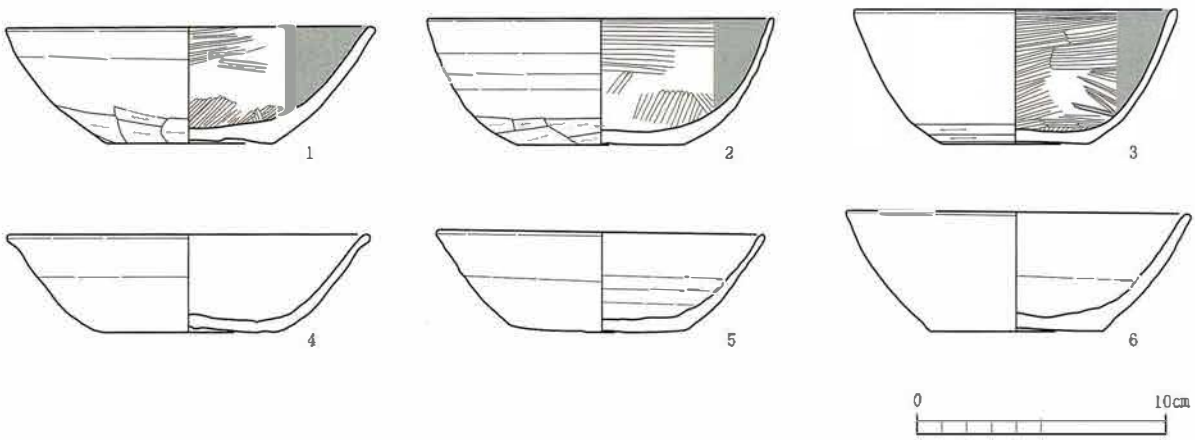
遺物は、土師器杯（Ａ類）が出土している。



No	土色・土質	備考	
1	黒褐色粘質土(10YR3/1)	褐灰色砂質土(10YR4/1)が多量に混入	遺物取上げ：1層
2	黒褐色粘質土(10YR3/1)	炭化物が多量に混入	
3	褐灰色砂質土(10YR4/1)	炭化物が少量混入	遺物取上げ：2層

0　1m

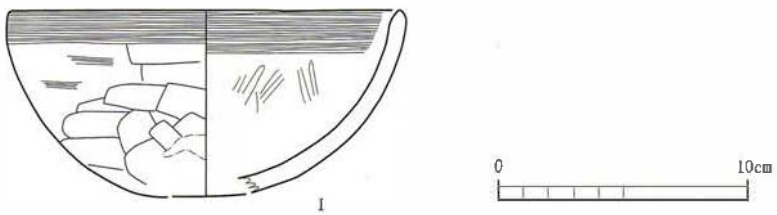
第8図　SK3060 土壙断面図



単位(cm)

番号	種類	遺構・層位	特徴 外面	特徴 内面	口径 残存率	底径 残存率	器高	写真図版	登録番号	備考
1	土師器・杯	1層	ロクロナデ、底部：回転糸切り→手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	14.9 9/24	6.8 24/24	4.65		R1	BⅡc類
2	土師器・杯	1層	ロクロナデ、手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	(13.8) 6/24	6.6 16/24	5.05		R2	BⅡ類
3	土師器・杯	2層	ロクロナデ、回転ヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	(12.85) 4/24	5.8 24/24	5.4		R9	B1類
4	須恵器・杯	2層	ロクロナデ、底部：ヘラ切り	ロクロナデ	(14.6) 9/24	7.7 21/24	3.95		R4	Ⅲ類
5	須恵器・杯	2層	ロクロナデ、底部：ヘラ切り	ロクロナデ	13.1 22/24	6.95 24/24	4	3−5	R7	Ⅲ類
6	須恵器・杯	1層	ロクロナデ、底部：回転糸切り	ロクロナデ	13.75 17/24	6.9 24/24	4.8		R3	Ⅴ類

第9図　SK3060 土壙出土遺物



単位(cm)

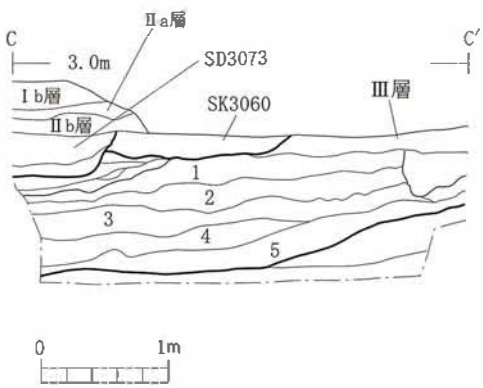
番号	種類	遺構・層位	特徴 外面	特徴 内面	口径 残存率	底径 残存率	器高	写真図版	登録番号	備考
1	土師器・杯		手持ちヘラケズリ、ヨコナデ	ヘラミガキ、ヨコナデ	15.6 18/24		7.45		R8	A類

第10図　SX3069 河川跡出土遺物

ＳＸ3061 河川跡（第３・11～18図）

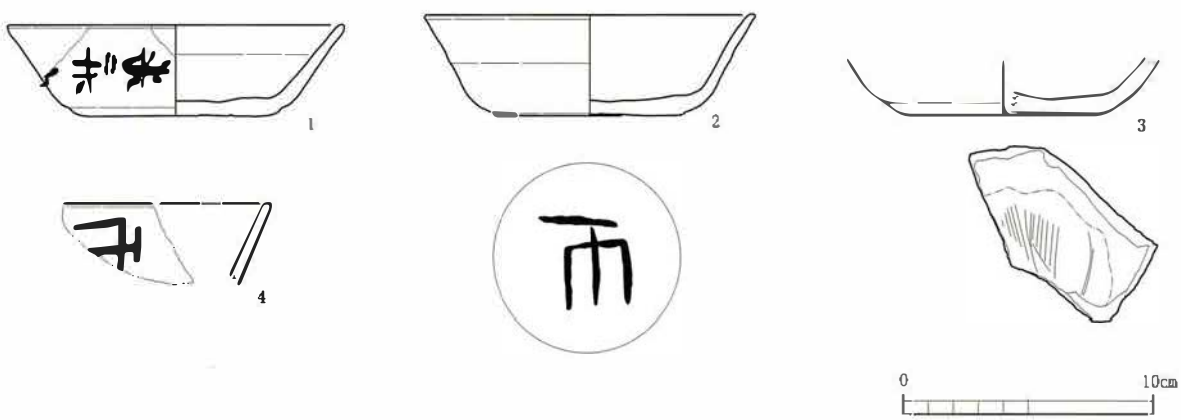
調査区西半部から南側のⅢ層下層で発見した東西方向の河川跡である。ＳＸ3070 南北大路と重複しており、このうちのＢ期と接続し、Ｃ期の路面に覆われている。規模は上幅 4.5m以上、深さ１m以上である。底面及び断面は凹凸がほとんどなく平坦であり、特に壁については地山と埋土に明瞭な境が確認できた。埋土は５層に大別できる。１ 層は炭化物が若干混入する褐灰色粘質土、２層は炭化物が多量に混入する黒褐色粘質土、３層は炭化物・黒褐色砂質土が多量に混入する黒色粘質土、４層は黒褐色粘土が多量に混入する緑灰色砂、５層が緑灰色砂と黒褐色粘土の互層である。

遺物は、土師器杯（ＢⅠ類・ＢⅡ類・ＢⅢ類・ＢⅤ類）・高台付杯・甕（Ｂ類）、須恵器杯（Ⅱ類・Ⅲ類・Ⅴ類）・杯蓋・高台付杯・双耳杯・稜椀・甕・瓶・甑、軒平瓦、丸瓦、刀子、木簡、挽物皿、曲げ物蓋板、椀型滓などがある。このうち須恵器杯では、全体に占めるⅢ類の割合が９割以上と圧倒的に多い。また、須恵器杯、土師器杯には、墨書土器「米二□□」・「本」・「木」や漆付着土器、油煙付着土器などがある。木簡は5点出土している。付札が２点、削屑が１点、用途不明のものが２点である。



No.	土色・土質	備考	
1	褐灰色砂質土（10YR4/1）	炭化物が斑状に混入	遺物取上げ：１層
2	褐灰色砂質土（10YR4/1）	炭化物が多量に混入、黒色粘土(10YR1/2)が混入	遺物取上げ：２層
3	黒褐色粘土(10YR3/1)	炭化物、オリーブ黒色砂質土(5GY2/1)が多量に混入	
4	緑灰色砂(10GY5/1)	黒褐色粘土(10YR3/2)、植物遺体が多量に混入	遺物取上げ：３層
5	緑灰色砂(10GY5/1)	黒褐色粘土(10YR3/1)と互層	

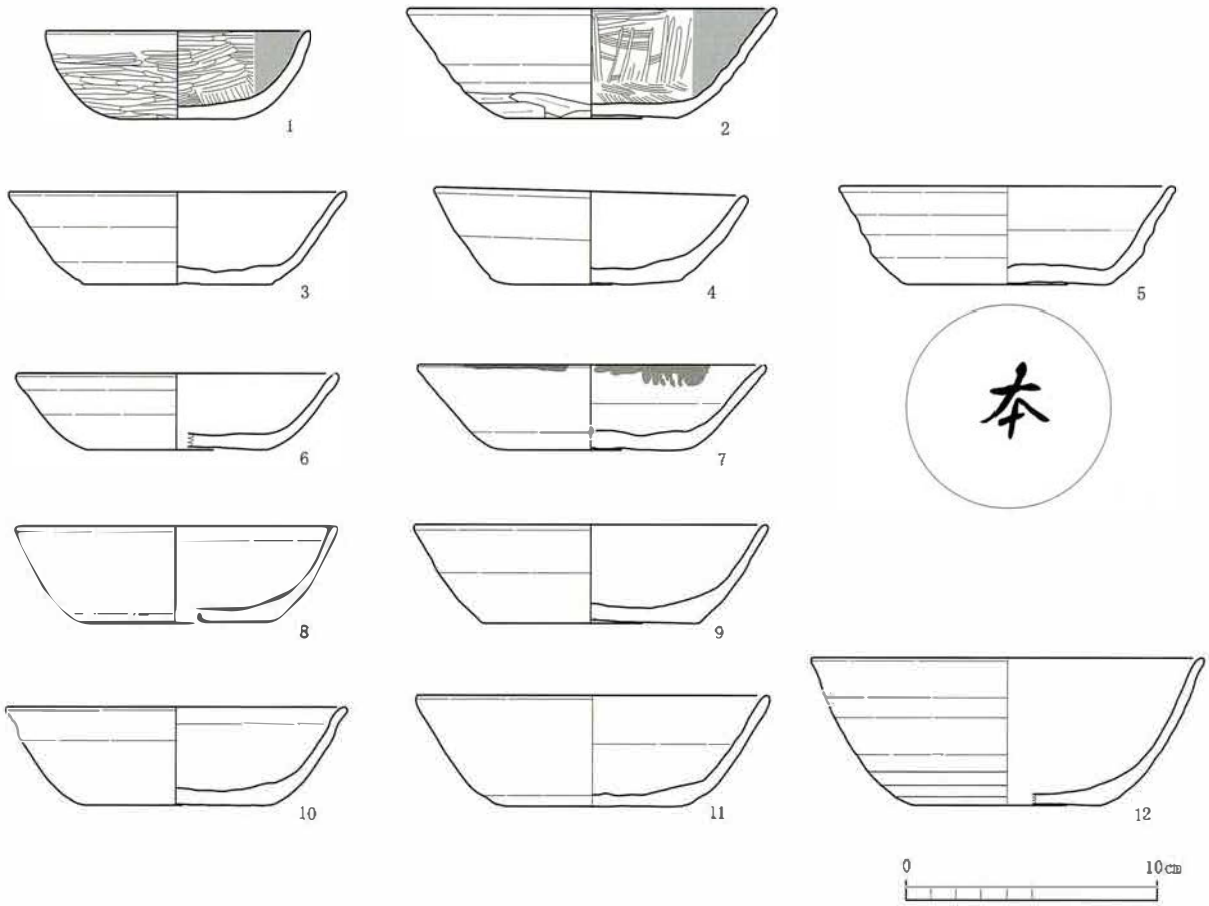
第11図　SX3061 河川跡断面図



単位(cm)

番号	種類	遺構・層位	特徴 外面	特徴 内面	口径 残存率	底径 残存率	器高	写真図版	登録番号	備考
1	須恵器・杯	１層	ロクロナデ、底部：ヘラ切り	ロクロナデ	(13.6) 1/24	7.0 12/24	3.7	3－14	R53	体部に墨書「米二□□」、Ⅲ類
2	須恵器・杯	１層	ロクロナデ、底部：ヘラ切り	ロクロナデ	(13.1) 3/24	7.2 24/24	3.6		R55	底部に墨書「市」、Ⅲ類
3	転用硯 須恵器・杯	１層	ロクロナデ、底部：ヘラ切り	ロクロナデ	—	(7.8) 9/24	—		R60	Ⅲ類
4	須恵器・杯	１層	ロクロナデ	ロクロナデ	—	—	—		R137	墨書「市」

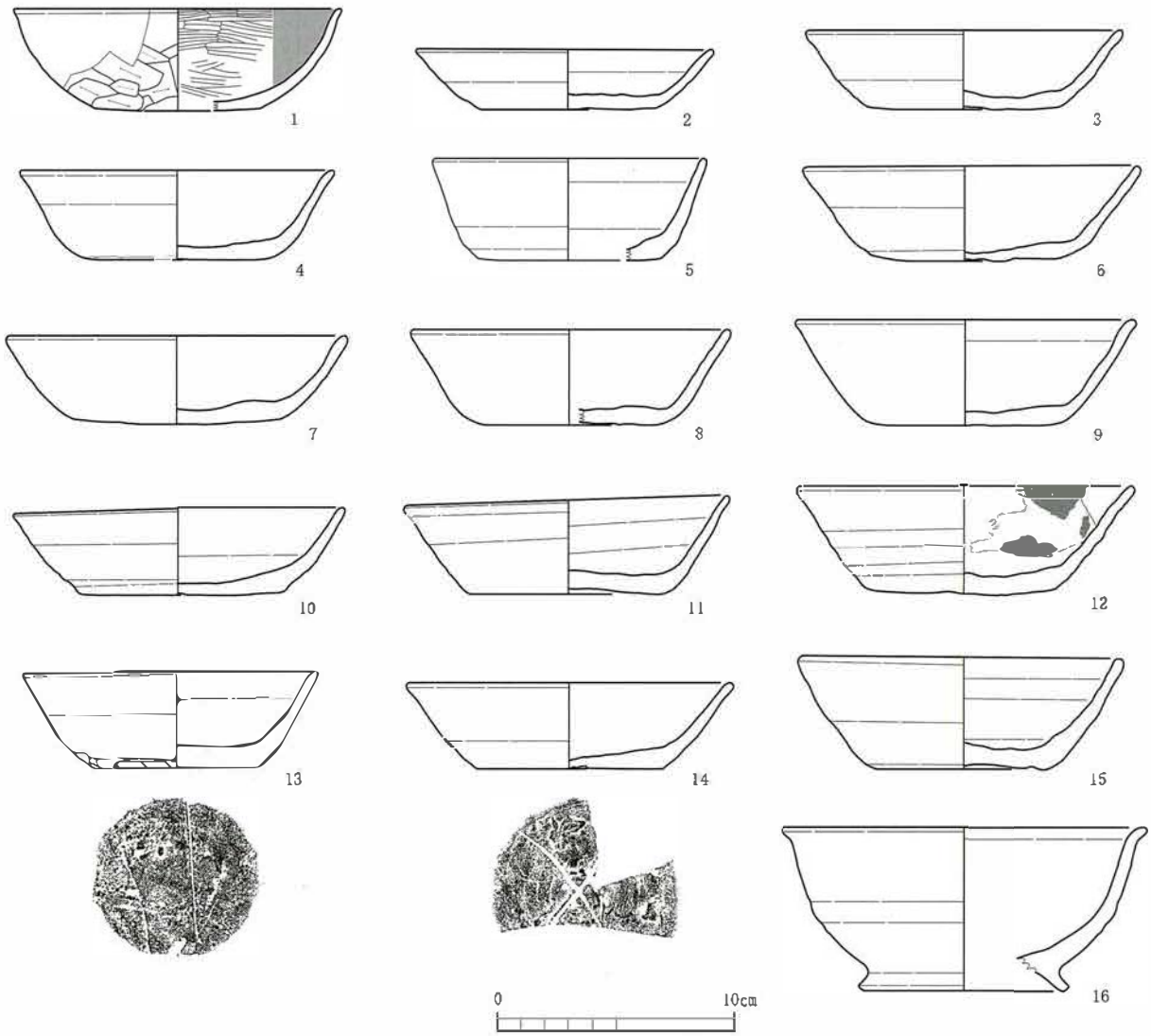
第12図　SX3061 河川跡１層出土遺物



単位(cm)

番号	種類	遺構・層位	特徴 外面	特徴 内面	口径 残存率	底径 残存率	器高	写真図版	登録番号	備考
1	土師器・杯	2層	ロクロナデ、ヘラミガキ 底部：糸切り	ヘラミガキ・黒色処理	(10.4) 11/24	4.6 24/24	3.6	3-3	R95	
2	土師器・杯	2層	ロクロナデ、底部：回転糸きり 体部下半～底部:手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ・黒色処理	(14.8) 9/24	6.9 19/24	4.45		R93	B II c類
3	須恵器・杯	2層	ロクロナデ、 底部：ヘラ切り	ロクロナデ	(13.5) 2/24	(7.4) 6/24	3.7		R86	III類
4	須恵器・杯	2層	ロクロナデ、 底部：ヘラ切り	ロクロナデ	12.2 19/24	7.0 24/24	3.75		R87	III類
5	須恵器・杯	2層	ロクロナデ、 底部：ヘラ切り	ロクロナデ	(13.4) 5/24	8.1 20/24	3.95		R49	底部に墨書「本」、III類
6	須恵器・杯	2層	ロクロナデ、 底部：ヘラ切り	ロクロナデ	(12.9) 11/24	(7.3) 13/24	3.05		R89	III類
7	須恵器・杯	2層	ロクロナデ、 底部：ヘラ切り	ロクロナデ	(14.0) 3/24	(7.6) 11/24	3.45		R96	油煙付着、III類
8	須恵器・杯	2層	ロクロナデ、底部：ヘラ切り、 体部下半：手持ちヘラケズリ	ロクロナデ	(12.9) 5/24	(7.6) 11/24	3.85		R98	II a類
9	須恵器・杯	2層	ロクロナデ、 底部：ヘラ切り	ロクロナデ	(14.2) 1/24	(8.6) 9/24	3.95		RE01	III類
10	須恵器・杯	2層	ロクロナデ、 底部：ヘラ切り	ロクロナデ	(13.5) 3/24	7.4 18/24	3.95		RE02	III類
11	須恵器・杯	2層	ロクロナデ、 底部：ヘラ切り	ロクロナデ	(14.2) 4/24	7.0 12/24	4.45		RE32	III類
12	須恵器・杯	2層	ロクロナデ、底部：ヘラ切り、 体部下半：回転ヘラケズリ	ロクロナデ	(15.6) 2/24	(7.6) 7/24	5.95		R97	I a類

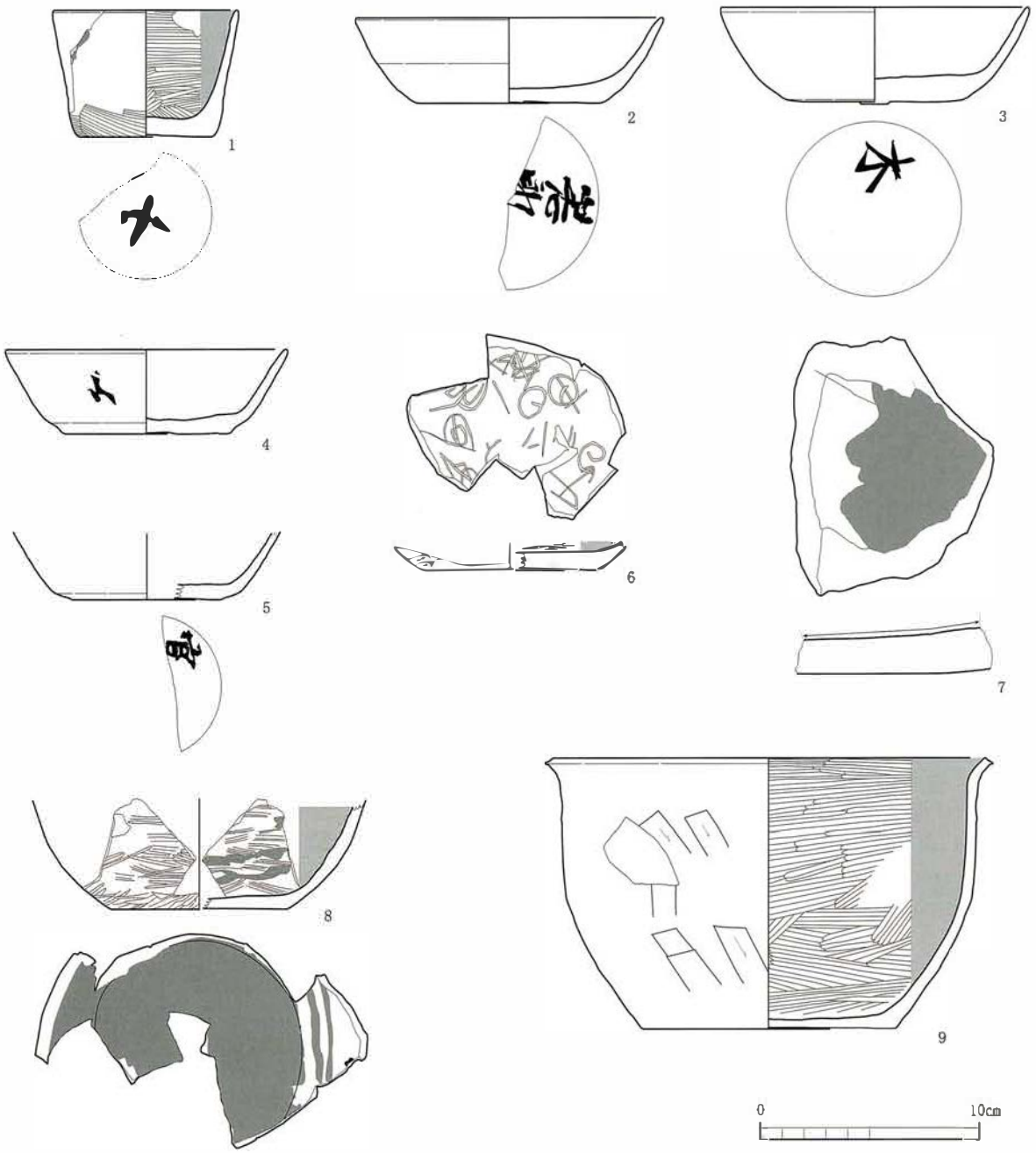
第13図　SX3061 河川跡2層出土遺物



単位(cm)

番号	種類	遺構・層位	特徴 外面	特徴 内面	口径 残存率	底径 残存率	器高	写真図版	登録番号	備考
1	土師器・杯	3層	ロクロナデ 体部下半～底部：手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ、黒色処理	(13.9) 3.5/24	(6.9) 6/24	4.3		R62	BⅡ類
2	須恵器・杯	3層	ロクロナデ、底部：ヘラ切り	ロクロナデ	12.5 21/24	7.4 24/24	2.6	3～4	R125	Ⅲ類
3	須恵器・杯	3層	ロクロナデ、　底部：ヘラ切り	ロクロナデ	13.3 9/24	8.0 13/24	3.4		R116	Ⅲ類
4	須恵器・杯	3層	ロクロナデ 体部下半：手持ちヘラケズリ	ロクロナデ	(13.3) 4/24	(6.6) 7/24	3.8		R127	Ⅱa類
5	須恵器・杯	3層	ロクロナデ、　底部：ヘラ切り	ロクロナデ	(11.5) 3/24	7.8 12/24	4.3		R79	Ⅲ類
6	須恵器・杯	3層	ロクロナデ、　底部：ヘラ切り	ロクロナデ	(14.3) 9/24	8.2 24/24	4.1		R72	Ⅲ類
7	須恵器・杯	3層	ロクロナデ、　底部：ヘラ切り	ロクロナデ	(14.5) 5/24	8.9 22/24	3.8		R129	Ⅲ類
8	須恵器・杯	3層	ロクロナデ、　底部：ヘラ切り	ロクロナデ	(13.5) 4/24	(7.3) 9/24	3.6		R131	Ⅲ類
9	須恵器・杯	3層	ロクロナデ、　底部：ヘラ切り	ロクロナデ	(14.4) 4/24	7.6 18/24	4.5		R133	Ⅲ類
10	須恵器・杯	3層	ロクロナデ、　底部：ヘラ切り	ロクロナデ	14.1 12/24	8.8 24/24	3.7		R80	Ⅲ類
11	須恵器・杯	3層	ロクロナデ、　底部：ヘラ切り	ロクロナデ	13.8 14/24	8.5 24/24	4.0		R78	Ⅲ類
12	須恵器・杯	3層	ロクロナデ、　底部：ヘラ切り	ロクロナデ	14.25 7/24	7.9 24/24	4.6		R134	油煙付着、Ⅲ類
13	須恵器・杯	3層	ロクロナデ、底部：ヘラきり 体部下半～底部：手持ちヘラケズリ	ロクロナデ	12.5 9/24	6.9 24/24	4.1		R114	底部にヘラガキ、Ⅱa類
14	須恵器・杯	3層	ロクロナデ、　底部：ヘラ切り	ロクロナデ	(13.8) 6/24	(7.8) 7/24	3.7		R115	底部にヘラガキ「X」、Ⅲ類
15	須恵器・杯	3層	ロクロナデ、底部：回転糸切り	ロクロナデ	13.7 13/24	7.2 24/24	4.8		R84	Ⅴ類
16	須恵器 高台付杯	3層	ロクロナデ	ロクロナデ	15.4 3/24	(8.6) 15/24	6.9		R82	

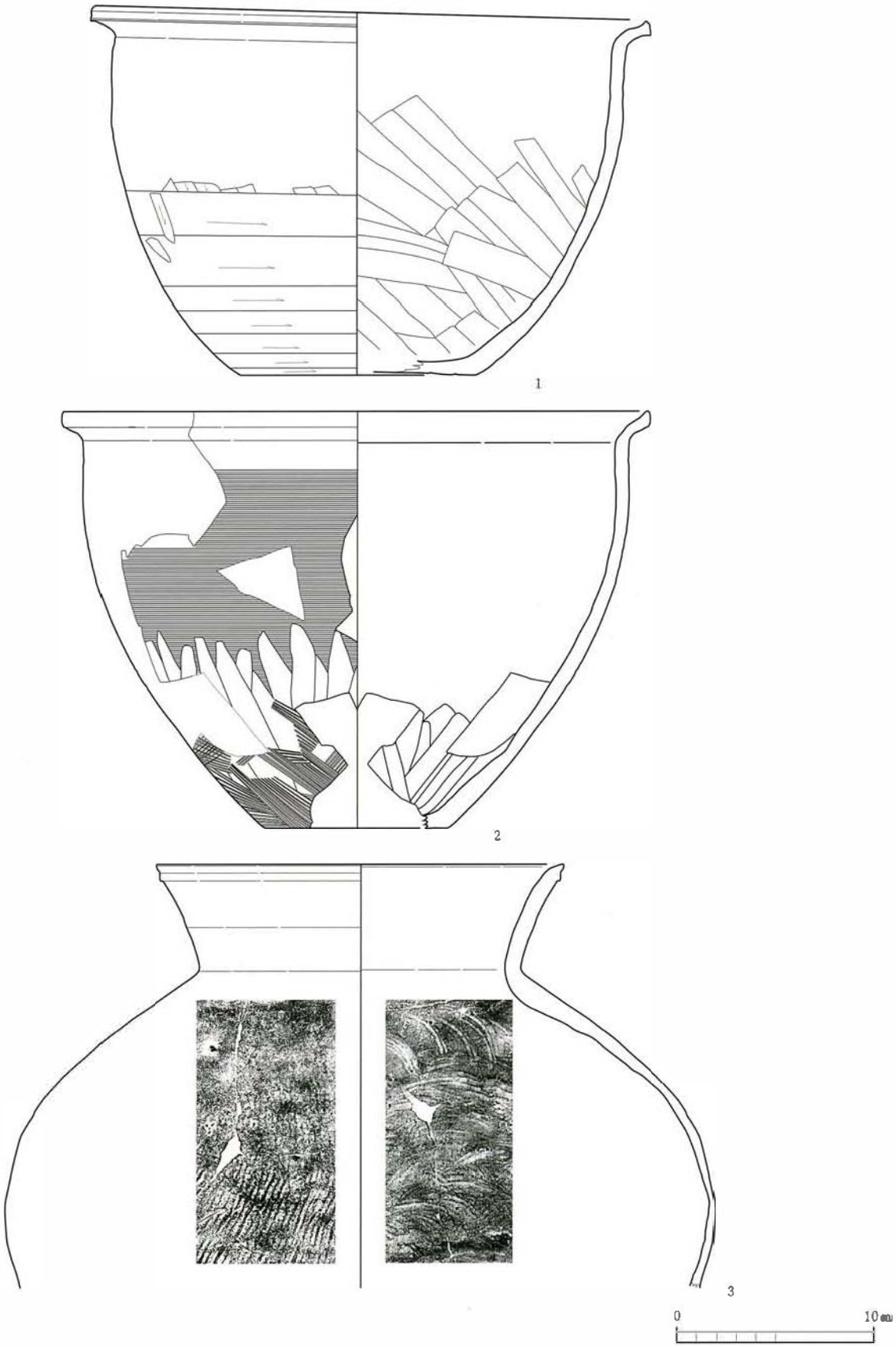
第14図　SX3061 河川跡3層出土遺物（1）



単位(cm)

番号	種類	遺構・層位	特徴 外面	特徴 内面	口径 残存率	底径 残存率	器高	写真図版	登録番号	備考
1	土師器・杯	3層	ロクロナデ、体部下半：ヘラナデ 底部：回転糸切り	ヘラミガキ、黒色処理	(8.3) 1/24	6.0 16/24	5.75	3−11	R119	底部に墨書
2	須恵器・杯	3層	ロクロナデ 底部：ヘラ切り	ロクロナデ	(13.9) 7/24	(8.2) 10/24	3.9	3−13	R121	底部に墨書「□志□」.II類
3	須恵器・杯	3層	ロクロナデ 底部：ヘラ切り	ロクロナデ	(13.9) 6/24	8.0 24/24	4.4	3−12	R122	底部に墨書「木」. III類
4	須恵器・杯	3層	ロクロナデ 底部：ヘラ切り	ロクロナデ	(12.3) 5/24	7.4 24/24	3.85		R117	体部外面に墨痕、III類
5	須恵器・杯	3層	ロクロナデ 底部：ヘラ切り	ロクロナデ	—	(6.8) 11/24	—		R120	底部に墨書「官」. III類
6	土師器・杯	3層	ロクロナデ. 底部：回転糸切り 体部下半：手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ、黒色処理	—	(8.0) 14/25	—	3−7	R106	内面に刻線. B II c類
7	転用硯 (須恵器・甕)	3層						3−8	R112	
8	土師器・杯	3層	ヘラミガキ、黒色処理	ヘラミガキ、黒色処理	—	8.1 17/24	—		R94	内面に漆付着
9	土師器・甕	3層	ロクロナデ、手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ、黒色処理	20.4 13/24	11.6 12/24	12.3	3−9	R135	

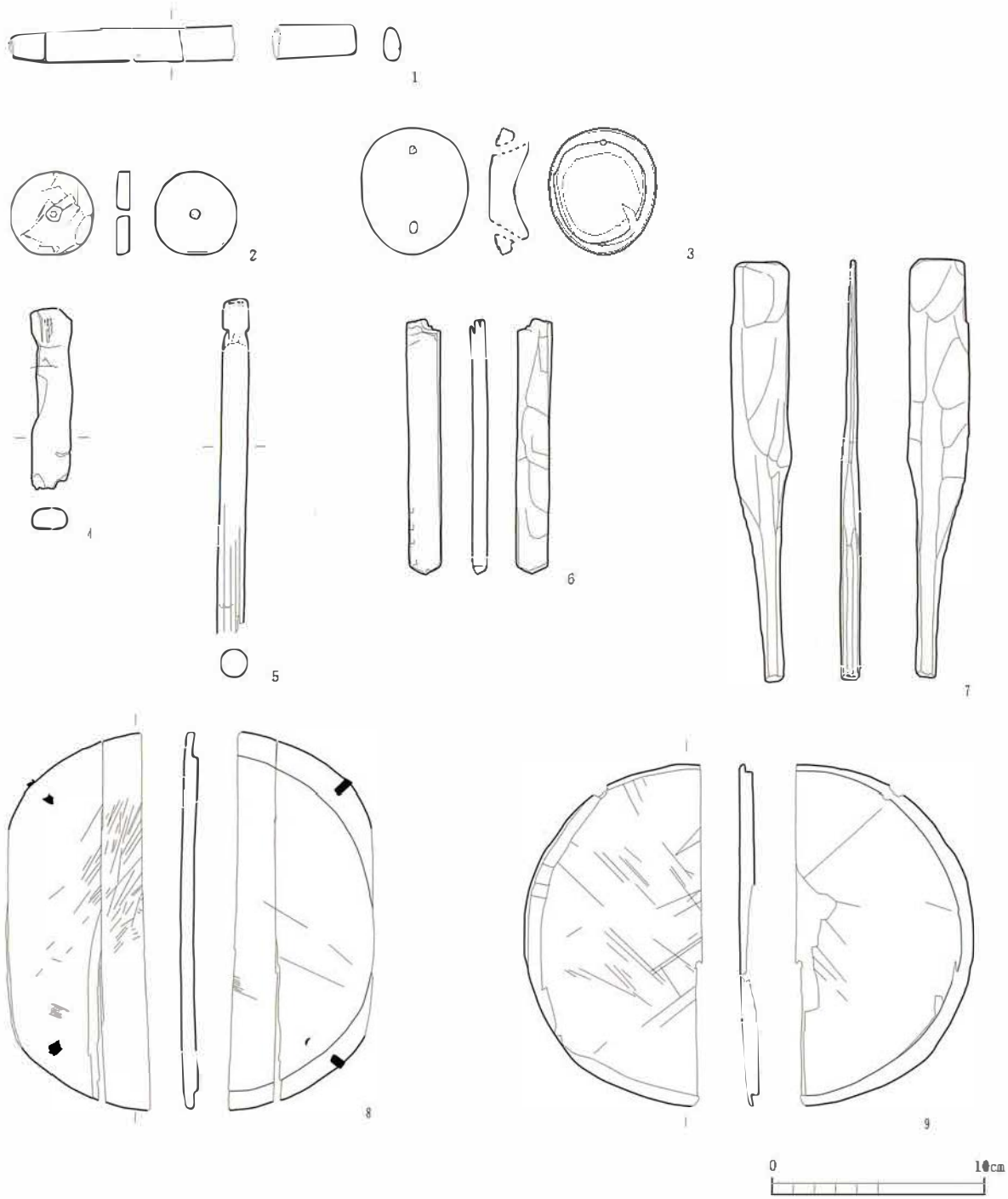
第15図　SX3061 河川跡3層出土遺物(2)



単位(cm)

番号	種類	遺構・層位	特徴 外面	特徴 内面	口径 残存率	底径 残存率	器高	写真図版	登録番号	備考
1	須恵器・壺	3層	ロクロナデ、手持ちヘラケズリ→回転ヘラケズリ	ロクロナデ、ヘラナデ	28.1 14/24	12.0 9/24	18.8	3~6	R42	
2	須恵器・壺	3層	ロクロナデ、回転ハケメ→手持ちヘラケズリ→ハケメ	ロクロナデ、ヘラナデ	(29.8) 4/24	(9.3) 4/24	21.25		R43	
3	須恵器・壺	3層	平行タタキ	当て具痕	(20.8) 10/24	—	—		R41	

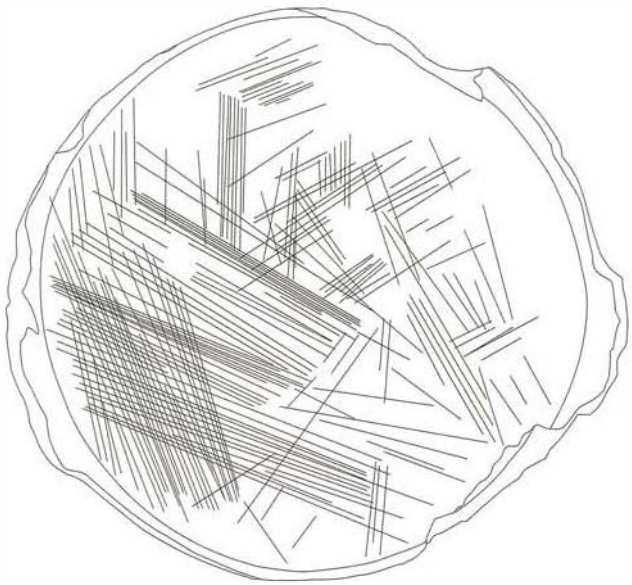
第16図　SX3061 河川跡3層出土遺物(3)



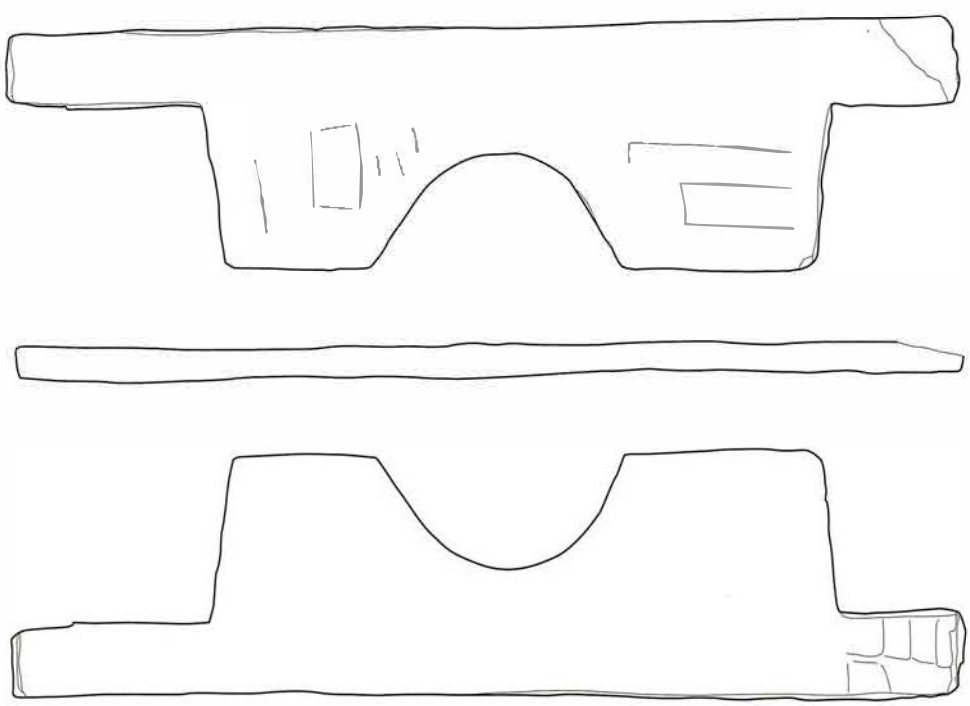
単位(cm)

番号	種類	遺構・層位	法量	写真図版	登録番号	備考
1	刀子	3層	長さ：－　，幅：（身部分）1.3、（柄部分）最大1.55		R1	
2	木製品	3層	直径：3.9、最大厚：0.6、		R4	線付着
3	木製品・栓	3層	最大径：6.0、最大厚：1.55		R2	2箇所に穿孔あり
4	木製品	3層	長さ：8.5以上、最大厚：1.0		R13	
5	木製品	3層	長さ：16以上、最大厚：1.21		R11	
6	木製品	3層	長さ：12以上、最大幅：1.5、最大厚：0.7		R1	木筋状木製品？
7	木製品	3層	長さ：19.8、幅：(身) 2.75、(柄) 0.95～1.2、厚さ：(身) 0.3～0.6、(柄) 0.95		R9	
8	木製品 曲げ物・蓋板	3層	直径：18.0、最大厚：0.65		R5	両面刃物痕
9	木製品 曲げ物・蓋板	3層	直径：16.0、最大厚：0.8		R7	両面刃物痕

第17図　SX3061 河川跡3層出土遺物（4）



1

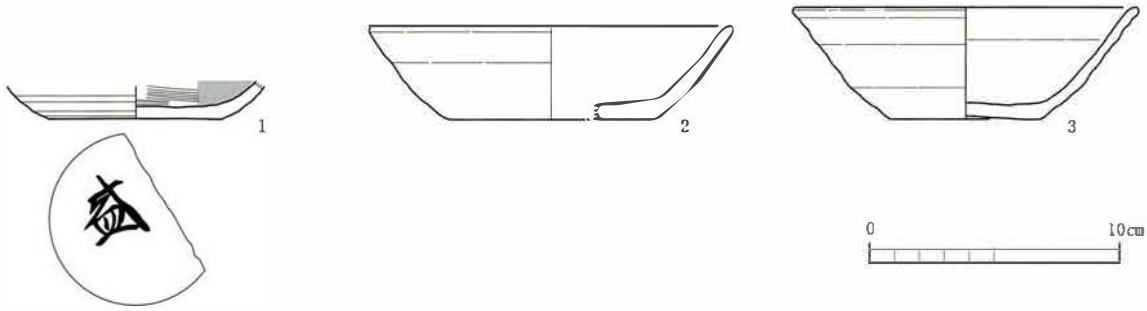


2

単位(cm)

番号	種類	遺構・層位	法量	写真図版	登録番号	備考
1	木製品 挽物・皿	3層	口径：－、底径：20.5、器高：－		R8	内面に刃物痕
2	木製品	3層	長さ：38.2、最大幅：10.0、最大厚：1.5		R5	

第18図　SX3061 河川跡3層出土遺物(5)



単位（cm）

番号	種類	遺構・層位	特徴 外面	特徴 内面	口径残存率	底径残存率	器高	写真図版	登録番号	備考
1	土師器・杯	Ⅲ層	ロクロナデ 体部下半～底部：回転ヘラケズ	ヘラミガキ、黒色処理	—	(6.9) 14/24	—		R64	底部外面に墨書「盛」、BⅠ類
2	須恵器・杯	Ⅲ層	ロクロナデ 底部：ヘラ切り	ロクロナデ	(14.5) 1/24	(8.2) 7/24	3.7		R63	Ⅲ類
3	須恵器・杯	Ⅲ層	ロクロナデ 底部：回転糸切り	ロクロナデ	(13.7) 4/24	6.0 14/24	4.5		R61	Ⅴ類

第19図　Ⅲ層出土遺物

3．考察

今回の調査では、南北大路跡とこれに接続する東西溝跡・河川跡、土壙、小溝群などを発見した。これらの遺構は基本層序Ⅲ層をはさんで、上層の遺構群（ＳＸ3070Ｃ・Ｄ南北大路跡、ＳＤ3073 東西溝跡、ＳＤ3062～3067 小溝群、ＳＫ3060 土壙）と下層の遺構群（ＳＸ3070Ａ・Ｂ南北大路跡、ＳＸ3061・3069 河川跡、ＳＫ3068 土壙）に大別することができる。また、上層の遺構では、ＳＫ3060 を除くすべての遺構埋土中に 10 世紀前葉頃に降下したとされる灰白色火山灰が自然堆積もしくは二次堆積しているのが確認できるが、Ⅲ層及びその下層の遺構には全く認められない。このことは、ＳＫ3060 以外の上層遺構の年代を、10 世紀前葉以降とすることができると同時に、下層遺構については 10 世紀前葉以前に下限年代をもとめることができる。一方、出土した遺物を見ると、ＳＸ3061、ＳＫ3060 から比較的多くの土師器杯・甕、須恵器杯が出土している。以下、これら出土遺物の年代について検討した後、発見した遺構の年代についてまとめてみたい。

（1）出土遺物の年代

ＳＸ3061 は基本層序Ⅲ層下層で発見した河川跡であり、ＳＤ3071Ｂと接続している。埋土は３層に大別できるが、１・２層出土土器が少ないため、ここでは３層出土土器と併せて検討する。土師器杯では、Ａ類が１点確認できる以外はすべてＢ類である。底部切離しあるいは再調整が明らかなものは、ＢⅠ類３点、ＢⅡ類 12 点、ＢⅡｃ類５点、ＢⅢ類１点、ＢⅤ類７点あり、再調整を施すものが７割以上を占める。土師器甕は、９割以上がＢ類である。須恵器杯は、底部切離しが明らかなものはⅡ類５点、Ⅲａ類３点、Ⅲ類 146 点、Ⅴ類９点あり、無調整のⅢ・Ⅴ類が９割以上を占めている。底径／口径比は 49～67、径高指数は 20～38、外傾度は 19～40 の間に分布しており、底径／口径比が 54～61、径高指数が 26～32、外傾度が 26～29、31～34 の間にややまとまって認められる。このような土師器杯・甕及び須恵器杯の特徴は、延暦 24 年（805）を上限とした９世紀中葉頃の年代が与えられている市川橋遺跡ＳＤ1522 出土土器（註１）と類似していることから、ＳＸ3061 出土土器についても９世紀初頭～中葉頃のものと考えられる。

ＳＫ3060 はⅢ層上面で発見した土壙である。前述したとおり、埋土中に灰白色火山灰が全く含まれていないことから、10 世紀前葉を下限年代とすることができる。出土遺物には土師器、須恵器がある。このう

ち土師器杯はすべてB類に限られ、底部切離しあるいは再調整の明らかなものは、BⅠ類1点、BⅡ類2点、BⅤ類2点である。底径／口径比は45～48、径高指数は31～42の間に分布している。土師器甕はA類が1点ある以外はすべてB類である。須恵器杯では、Ⅲ類7点、Ⅴ類6点であり、Ⅲ類とⅤ類がほぼ同量出土している。底径／口径比は50～53、径高指数は27～35の間に分布する。資料数は少ないものの、これらの特徴をみると、土師器杯に限って見れば、9世紀後半頃の年代が与えられている多賀城跡鴻の池第10～11層出土土器（註2）と類似している。一方、須恵器杯については、Ⅲ・Ⅴ類の割合がほぼ半々で、かつそれらが主体となる点をみると、9世紀中葉に位置付けられている多賀城跡SK2167出土の須恵器杯（註3）と類似している。したがって、SK3060出土土器については、9世紀中葉～後葉頃の年代を与えておきたい。

（2）遺構の年代

前述のように、今回発見した遺構は基本層序Ⅲ層を挟んで、上層の遺構と下層の遺構に大別することができ、さらに灰白色火山灰の堆積状況や出土した遺物の年代より、下層のSX3061河川が9世紀初頭～中葉頃、上層のSK3060土壙が9世紀中葉～後葉頃のものと考えられる。また、Ⅲ層の年代については、灰白色火山灰が全く含まれていないことや、SX3061及びSK3060との関係から判断して、SX3061埋没後の9世紀中葉頃に堆積したものとしておきたい。

一方、南北大路についてみると、市川橋遺跡第27次調査の成果より、西側溝において表1のような対応関係を捉えることができる（註4）。年代についてはSD1768cを8世紀末～9世紀中葉頃、SD1768eを10世紀前葉～中葉頃、SD1768fを10世紀中葉頃としている。今回の調査では、SD3071bがSX3061河川跡と接続することから9世紀初頭～中葉頃、SD3071c埋土中に灰白色火山灰が二次堆積することから、SD3071c・dについては10世紀前葉以降であることが判明しており、年代的にも一致している。

SD3073 東西溝はSD3071cと接続していることから、10世紀前葉以降の年代である。

小溝群については、灰白色火山灰が自然堆積するもの（SD3062・3065）と、斑状に二次堆積するもの（SD3063・3064・3066・3067）がある。前者については9世紀後葉～10世紀前葉頃、後者については10世紀前葉以降と考えておきたい。

第27次SD1768西側溝	SD3071
a期：創建期	—
b期：	a期
c期：規模最大	b期：SX3061と合流
d期：上層に灰白色火山灰が自然堆積	—
e期	c期
f期	d期

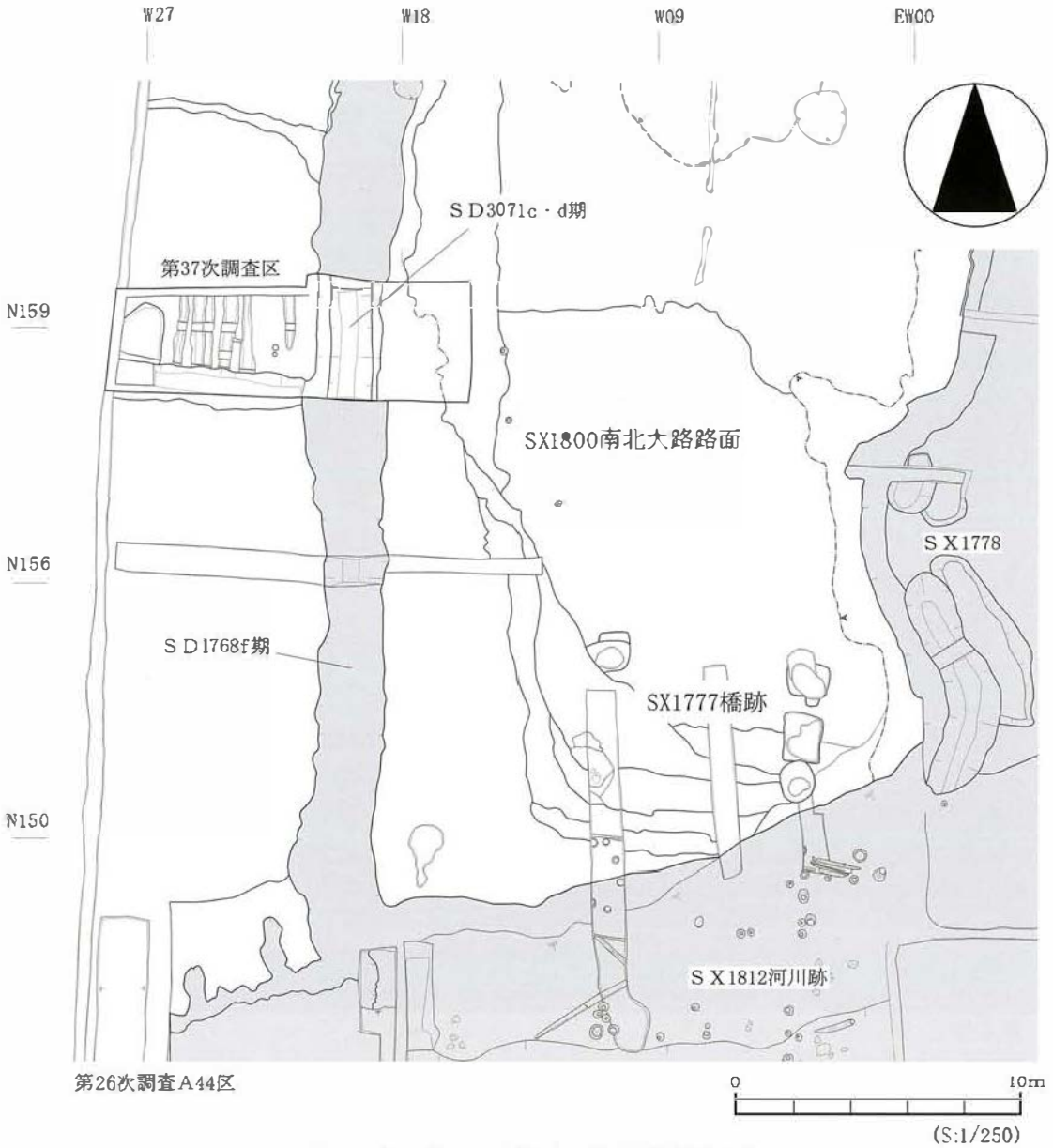
表1

4．まとめ

1．城外の区画道路のうち、南北大路とその西側の一部を調査した。

2．南北大路では、4時期の変遷を確認した。このうちB期では9世紀初頭～中葉頃のSX3061河川跡と合流していることが明らかとなった。

3．今回の調査区では、南北大路建設当初の西側溝は確認することができなかった。



第20図　第37次調査区周辺遺構配置図

(註1) SD1522 出土土器の特徴としては、①土師器杯にはA・B類があるが、A類は極めて少ない、②土師器B類は底部切離し後、再調整を施したものが7割を占める、③土師器甕にはA・B類があり、A類が約2割、B類が約8割である、④須恵器杯では無調整のⅢ・Ⅴ類が9割を占め、このうちⅢ類が約7割、Ⅴ類が3割である、ということがあげられる。また、須恵器杯については、径高指数が24～41の間に分布し、1層で26～33、2層で25～31周辺に集中すること、外傾度については21～42の間に分布し、1層で34～40、2層で31～36、38～42周辺に集中する傾向が認められる。（多賀城市教育委員会　『市川橋遺跡－城南土地区画整理事業にかかる発掘調査報告書Ⅱ』多賀城市文化財調査報告書第70集　2003）。SX3061 河川跡出土遺物については、須恵器杯Ⅲ類の占める割合が圧倒的であることや、外傾度がやや小さい点で相違するものの、相対的に見て同様であると判断した。

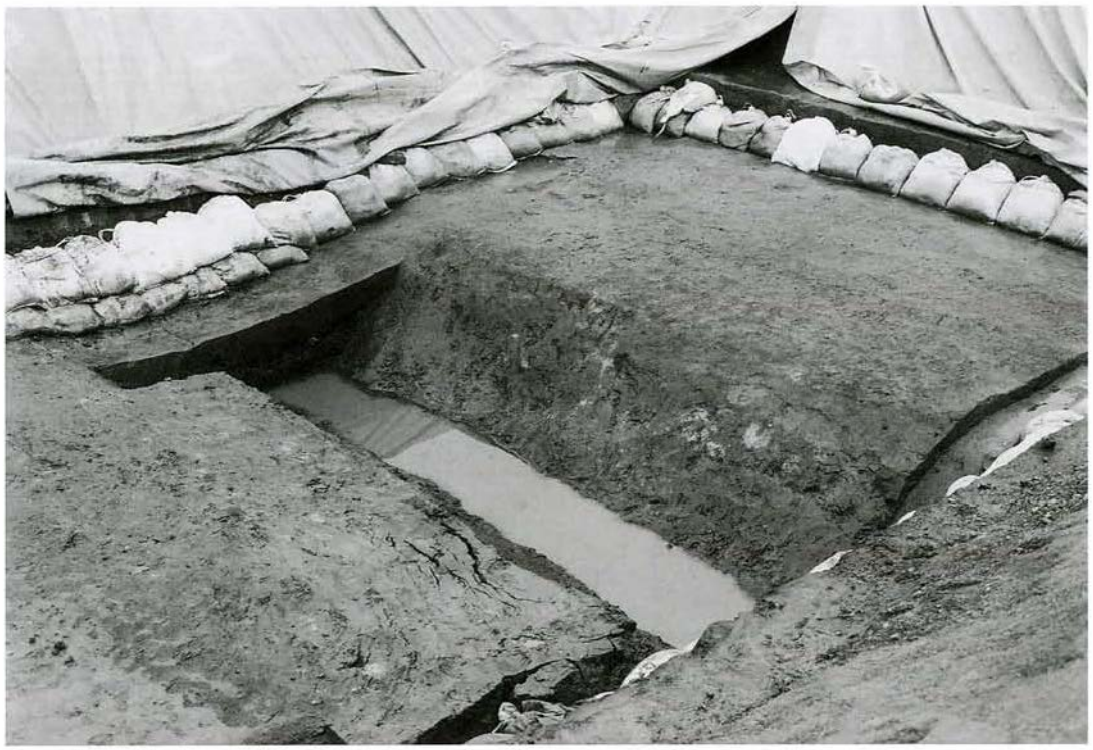
(註2)　第11層出土土師器では、①底径／口径比が40～50前後、②底部の切り離しが明らかなものはすべて回転糸切り、③再調整されたものの占める割合が多いこと、第10層出土土師器では、①底径／口径比が36～46、径高指数が27～38、②底部の切り離しは圧倒的に回転糸切りのもが多い、③半数は再調整されないものであるとうい特徴が指摘されている（宮城県多賀城跡調査研究所　『宮城県多賀城跡調査研究所年報1991』 1992）。これらと比較すると、SK3061出土土師器は、概ね10～11層出土土師器の範疇におさまるものと考えられる。

(註3) SK2167出土の須恵器杯では、ヘラ切りのものが47%、回転糸切りのものが30%あり、全体の約8割を占めている。（宮城県多賀城跡調査研究所　『宮城県多賀城跡調査研究所年報1992』 1993）

(註4)　多賀城市教育委員会　『市川橋遺跡－城南土地区画整理事業にかかる発掘調査報告書Ⅲ』多賀城市文化財調査報告書第75集　2004

1　調査区全景　西より

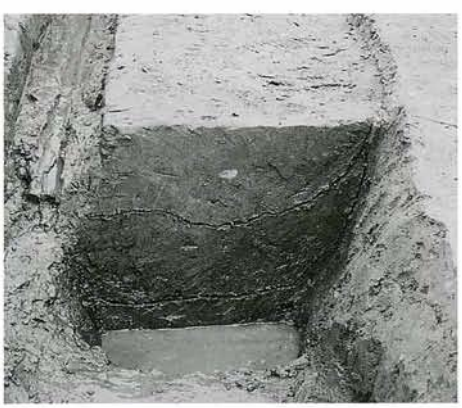
2　調査区全景　南東より



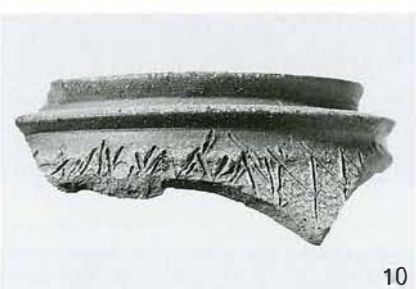
1　SX3070D南北大路　南西より

2　SD3071南北大路西側溝跡　南より

3　SK3060土壙断面　西より



4　SD3073溝跡断面　東より



1　S D3071d・2層出土　須恵系土器・高台付杯
（第6図10　R17　S:1/3）
2　S D3071c・1層出土　須恵系土器・杯
（第5図1　R28　S:1/3）
3　S X3061・2層出土　土師器・杯
（第13図1　R95　S:1/3）
4　S X3061・3層出土　須恵器・杯
（第14図2　R125　S:1/3）
5　S K3060・2層出土　須恵器・杯
（第9図5　R7　S:1/3）
6　S X3061・3層出土　須恵器・甕
（第16図1　R42　S:1/3）
7　S X3061・3層出土　土師器・杯
（第15図6　R106　S:1/2）
8　S X3061・1層出土　転用硯　須恵器・杯
（第15図2　R50　S:1/2）
9　S X3061・3層出土　土師器・甕
（第15図8　R135　S:1/3）
10　S D3071d・1層出土　円面硯
（第6図12　R14　S:1/2）
11　S X3061・3層出土　墨書土器　土師器・杯
（第15図1　R119　S:任意）
12　S X3061・3層出土　墨書土器　土師器・杯
（第15図3　R122　S:任意）
13　S X3061・3層出土　墨書土器　土師器・杯
（第15図2　R121　S:任意）
14　S X3061・1層出土　墨書土器　土師器・杯
（第12図1　R53　S:任意）

写真図版3

V　市川橋遺跡第38次調査

1．調査に至る経緯と経過

本調査は、個人住宅建設に伴うものである。今回の開発計画は基礎工事に湿式柱状改良工法をとることから、埋蔵文化財への影響が懸念された。そのため、発掘調査実施の協力を地権者に求め、平成15年6月6日に承諾書の提出をうけたことから事前調査として実施した。なお、本調査地点は、城南土地区画整理事業に伴う第27次調査A4区に隣接していることから、古墳時代から平安時代にかけての河川跡の存在が当初より予想された。調査は6月24日から開始し、はじめに重機を使用して城南土地区画整理事業に伴う盛土（Ⅰa層）・現代の水田層（Ⅰb層）の除去を行い、灰白色火山灰粒を含むⅡ層を検出した。26日からは作業員を動員してⅡ層の除去を行い、遺物を包含する堆積層とその北辺に若干のピットを発見する。この堆積層の性格を把握するために調査区際に土層観察および排水溝を兼ねたサブトレンチをめぐらせた。平面・断面での土層観察の結果、東西方向に流れる河川跡の北岸付近であることが判明した。堆積土中には土器等の遺物が比較的多量に含まれていることから、上層（SX3057B河川跡埋土）より掘り進めることとした。この作業と並行して北側に分布するSX3057A河川跡埋土上面で検出したピットの精査と平面・断面図の作成を行った。遺物は層ごとに取り上げ、7月16日までにはSX3057A河川跡埋土まで掘り進めた。翌日、調査区全景および土層断面の写真撮影、平面・断面図の作成を行い現地での調査を終了した。この後、直ちに埋め戻しを行う予定であったが、悪天候が続き8月4日に埋め戻しを行い一切の調査を完了した。

第1図　調査区位置図

2．調査成果

（1）　基本層序

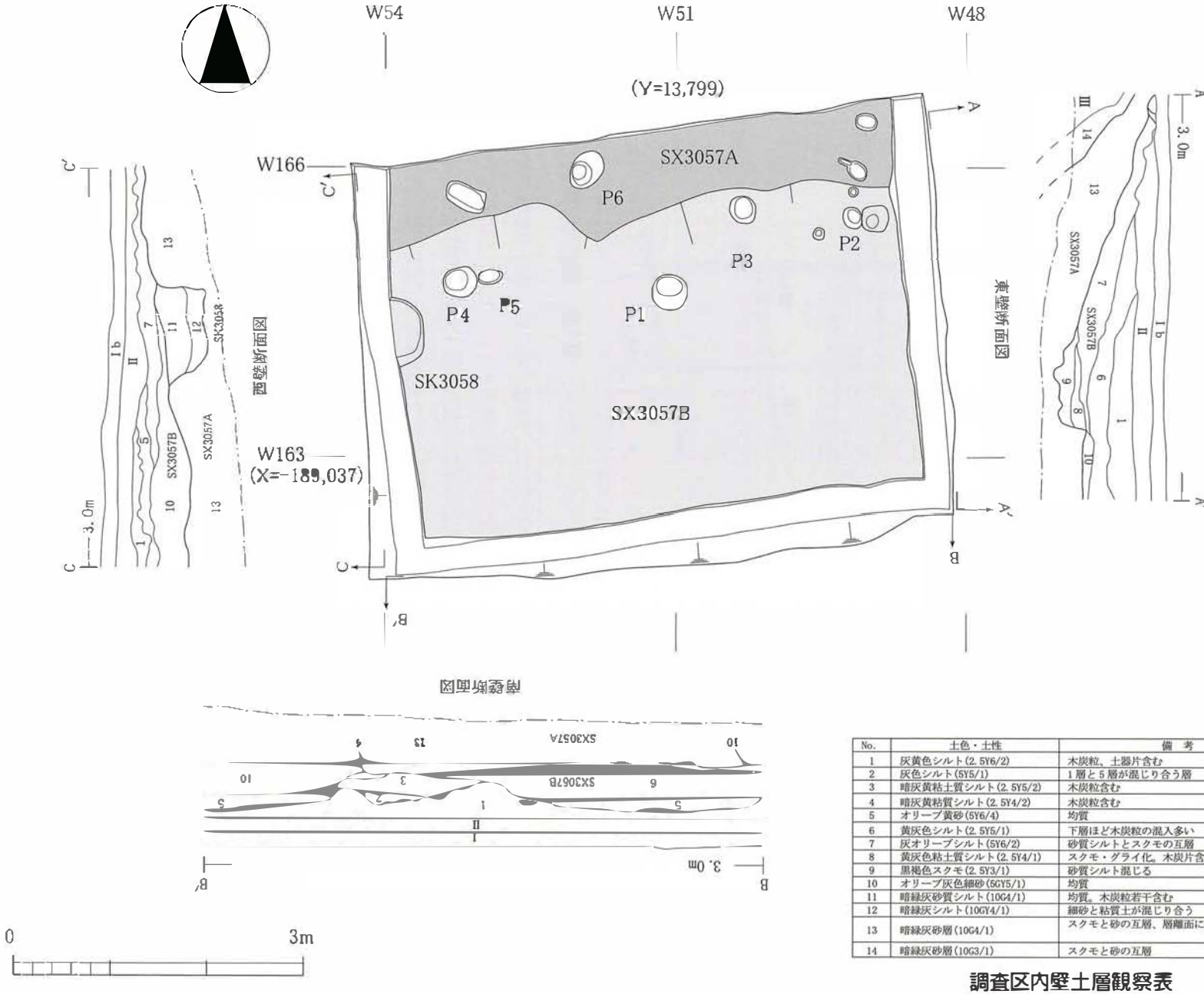
今回の調査区で確認された基本層序は以下の通りである。

Ⅰa層：区画整理に伴う盛土層で、層厚は1.7m。

Ⅰb層：現代の水田耕作土層で、層厚は15cm前後。

Ⅱ　層：褐灰色シルト(10YR4/1)で、層厚は10～20cm。　調査区全域に分布し、灰白色火山灰粒を含むことから、10世紀前葉以降に堆積した土層。　平安時代の河川埋土を覆う。

Ⅲ　層：浅黄色砂質土(5Y7/4)で、層厚は50cm以上。平安時代の河川埋土より古い。



No.	土色・土性	備　考	
1	灰黄色シルト(2.5Y6/2)	木炭粒、土器片含む	SX3057B 上層
2	灰色シルト(5Y5/1)	1層と5層が混じり合う層	〃
3	暗灰黄粘土質シルト(2.5Y5/2)	木炭粒含む	〃
4	暗灰黄粘質シルト(2.5Y4/2)	木炭粒含む	〃
5	オリーブ黄砂(5Y6/4)	均質	〃
6	黄灰色シルト(2.5Y5/1)	下層ほど木炭粒の混入多い	SX3057B 中層
7	灰オリーブシルト(5Y6/2)	砂質シルトとスクモの互層	SX3057B 下層
8	黄灰色粘土質シルト(2.5Y4/1)	スクモ・グライ化。木炭片含む	〃
9	黒褐色スクモ(2.5Y3/1)	砂質シルト混じる	〃
10	オリーブ灰色細砂(5GY5/1)	均質	〃
11	暗緑灰砂質シルト(10G4/1)	均質。木炭粒若干含む	SK3058 埋土
12	暗緑灰シルト(10GY4/1)	細砂と粘質土が混じり合う	〃
13	暗緑灰砂層(10G4/1)	スクモと砂の互層、層離面に木炭層が入る	SX3057A 埋土
14	暗緑灰砂層(10G3/1)	スクモと砂の互層	〃

調査区内壁土層観察表

第2図　遺構平面図・断面図

（2） 発見遺構と遺物

ＳＸ3057 河川跡：ほぼ同位置で２時期（Ａ→Ｂ期）の変遷を確認した。以下古い順に説明する。

ＳＸ3057Ａ河川跡（第３～５図）

東西約 6m、南北約 4.5mの調査区全域で検出した東西方向に流れる河川跡である。Ｂ期の埋土でほぼ全面を覆われている。ＳＫ3058 と重複しておりこれより古い。深さは0.6m以上、埋土は２層に分けられ、いずれもスクモ（木炭粒と遺物を含む）と砂の互層である。北岸の立ち上がりはＢ期に比べ角度を持って傾斜する。なお、Ａ期河川跡の底面までは完掘していない。

遺物は埋土（13 層）より土師器杯・甕、須恵器杯・高台付杯・蓋・鉢・高杯・瓶・長頸瓶・甕、丸瓦（Ⅱａ類・ⅡＢａ類）・平瓦（ⅡＢ類・ⅡＢａ類）、墨書土器・人面墨書土器、製塩土器、木簡状木製品、斎串、糸巻き、挽物、鋏具、金具?、砥石、剥片（黒曜石製）が出土し、須恵器の量が最も多い。土師器杯は 21 点中、ＢⅠ類が 48%、ＢⅡ類が 52%と約半々の割合である。土師器甕はＡ類とＢ類のものとがあるが、後者の量が圧倒的に多い。Ｂ類のものには体部上半にタタキ痕を残すものもある（この痕跡はＢ期出土の甕にもみられる）。須恵器杯は96 点中、Ⅰ類・6%、Ⅱ類・5%と少量であり、Ⅲ類が 89%とほぼ９割を占める。底径／口径比では、図示した坏で見た場合 50～67 の間に分布する。平均は58 である。

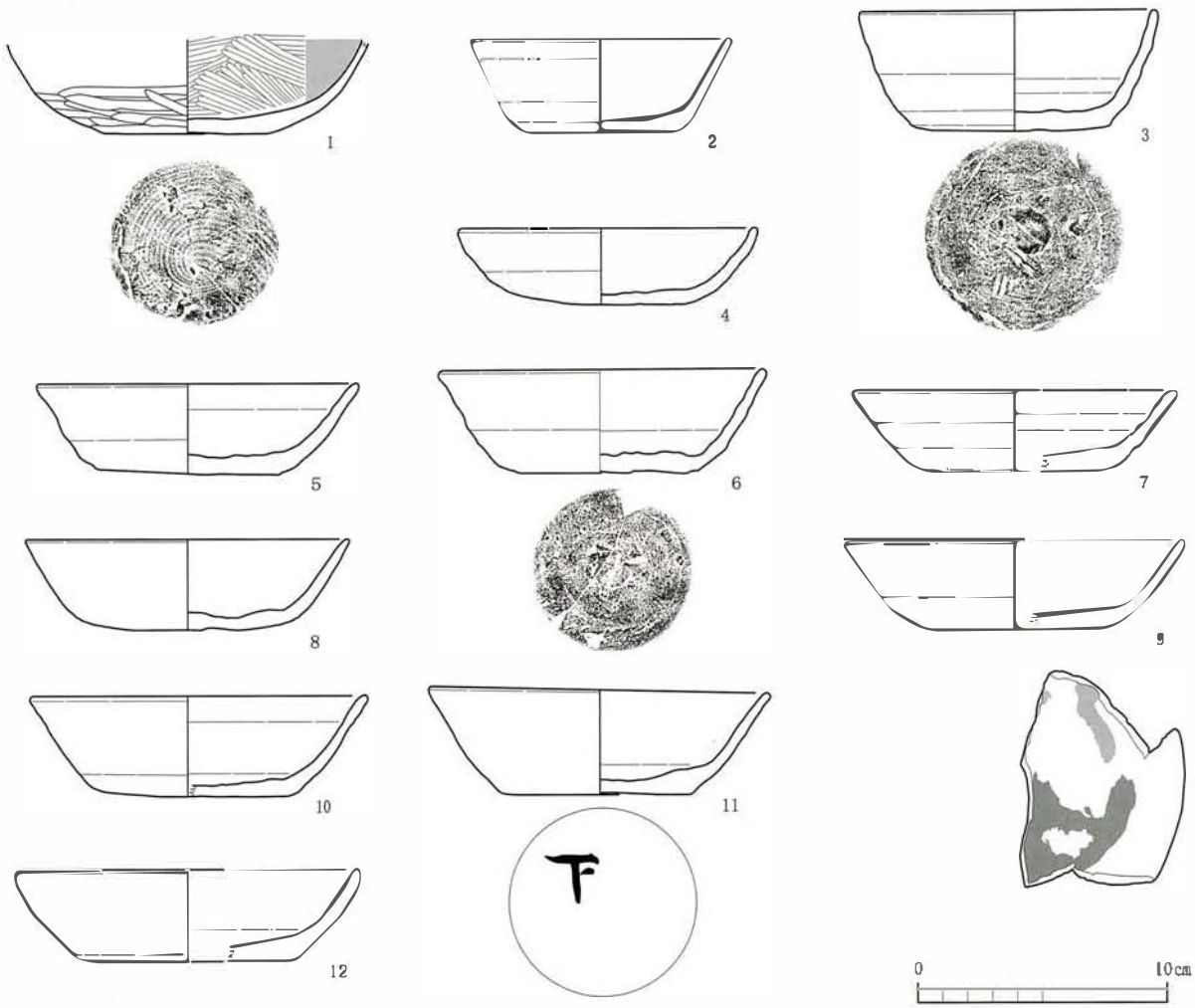
ＳＸ3057Ｂ河川跡（第５～７図）

Ａ期と同様調査区全域で検出した。Ⅱ層によって全面を覆われている。ＳＫ3058 と重複しておりこれより新しい。深さは 0.6～0.8mを計る。北岸の立ち上がりは緩やかに傾斜する。埋土は大別すると３層に分けられ、上層（1～5 層）、中層（6 層）、下層（7～10 層）となる。上層は木炭粒を含む灰黄色シルトとオリーブ黄色砂質土からなる。中層は下にいくほど木炭粒の混入が多い黄灰色シルト。下層は灰オリーブシルトとスクモの互層である。

下層から出土した遺物には、土師器杯・鉢・甕・甑、須恵器杯・高台付杯・双耳杯・稜椀・双耳鉢・鉢・蓋・高杯・瓶・小瓶・甕、軒丸瓦（重弁蓮華文）・丸瓦（Ⅱ類・ⅡＢ類）・平瓦（ⅡＢ類）、墨書土器・人面墨書土器、漆付着土器、漆器（箱）、カマド形土器、転用硯、砥石、鉄滓（炉底滓）がある。土師器杯は 26 点中、ＢⅠ類が 19%、ＢⅡ類が 81%である。この内、ＢⅠ類に底部が回転糸切り→体部下端回転ヘラケズリ調整で、内面に回転ヘラミガキ調整を施すものが１点認められた。須恵器杯は152 点中、Ⅲ類が94%を占め、残りがⅠ類・4%、Ⅱ類・1%であるが、わずかに１点Ⅴ類（1%）が認められた。底径/口径比では、図示した坏で見た場合 49～64 の間に分布する。平均は55 である。

中層から出土した遺物には、土師器杯・鉢・甕・甑、須恵器杯・高台付杯・蓋・高杯・瓶・小瓶・長頸瓶・甕、・丸瓦（ⅡＡ類）・平瓦（ⅠＡ類・ⅡＢａ類）、墨書土器・ヘラ描き土器、漆付着土器がある。土師器杯は６点中、ＢⅠ類・ＢⅡ類がそれぞれ半々を占める。この内、ＢⅠ類に内面調整が回転ヘラミガキを施すものが２点認められた。須恵器杯は 43 点中、Ⅲ類が 74%で、他はⅠ類・5%、Ⅱ類 21%である。底径/口径比では、図示した坏が２点と少ないが 50 と 56 である。

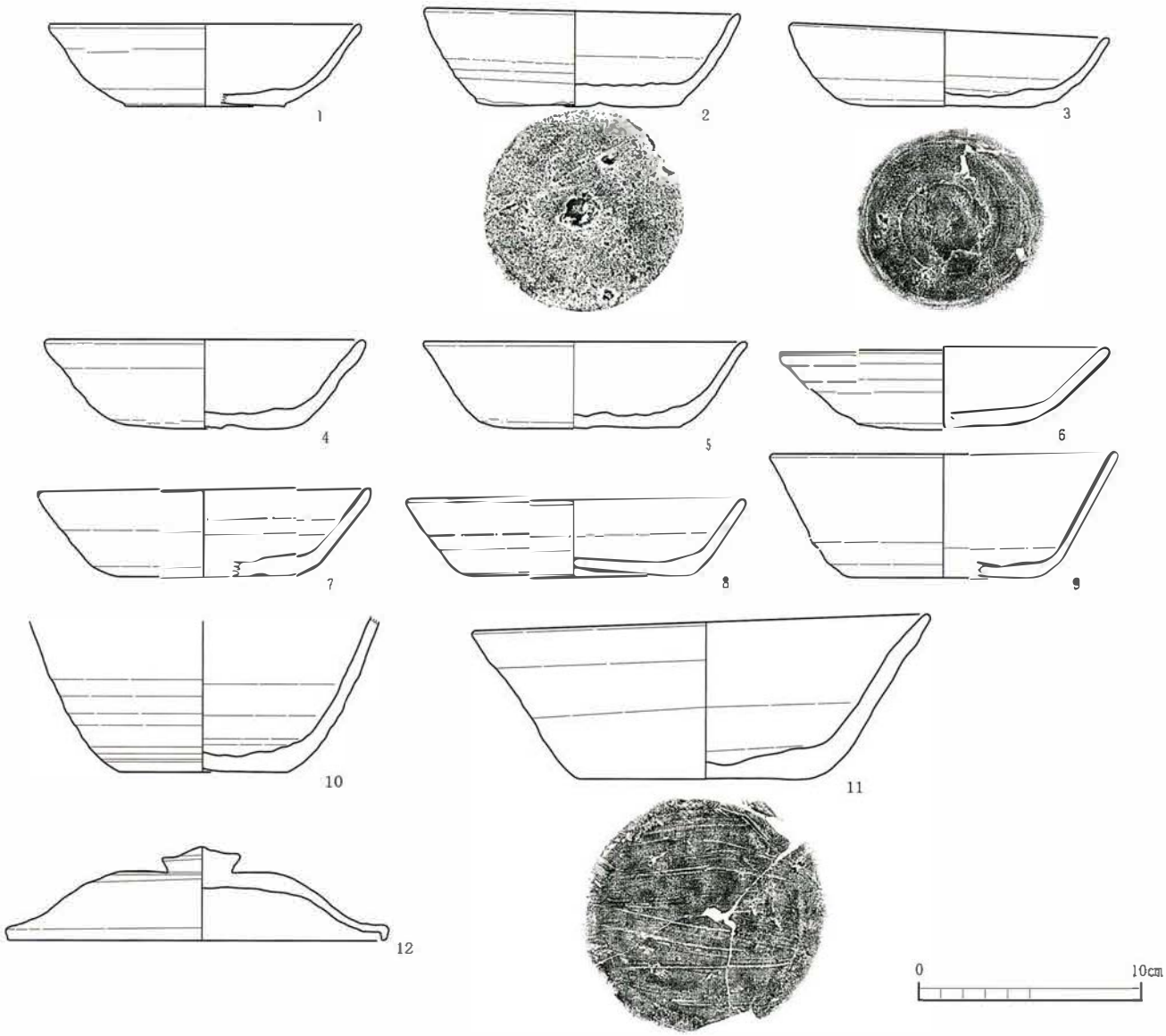
上層から出土した遺物には、土師器杯・甕、須恵器杯・高台付杯・高台付椀・蓋・瓶・長頸瓶(壷Ｇを含む)・甕、灰釉陶器、転用硯、丸瓦（Ⅱ類）・平瓦（ⅡＢ類・ⅡＢａ類）、墨書土器、カマド形土器、製塩土器、土器片製円盤、砥石、鉄滓がある。土師器杯は 75 点中、ＢⅠ類が 29%、ＢⅡ類が 39%、ＢⅤ類が 32%で構成される。須恵器杯は 139 点中、Ⅲ類が 86%、Ⅰ・Ⅱ類が 2%、Ⅴ類が 12%認められる。底径/口径比では、図示した坏が２点と少ないが 44 と 61 である。



単位（cm）

番号	種類	遺構・層位	特徴 外面	特徴 内面	口径 残存率	底径 残存率	器高	写真図版	登録番号	備考
1	土師器・杯	SX3057A・埋土	ロクロナデ、体部下半：手持ちヘラケズリ　底部：回転糸切り	ヘラミガキ、黒色処理	－	6.4 24/24	－		R26	Ⅲc類
2	須恵器・杯	SX3057A・埋土	ロクロナデ、底部：ヘラ切り	ロクロナデ	(10.5) 4.5/24	(5.4) 7.5/24	3.8		R15	Ⅲ類
3	須恵器・杯	SX3057A・埋土	ロクロナデ、底部：ヘラ切り	ロクロナデ	(11.9) 22/24	8.0 24/24	4.8	2－1	R7	Ⅲ類
4	須恵器・杯	SX3057A・埋土	ロクロナデ、底部：ヘラ切り	ロクロナデ	(12.1) 5/24	7.4 24/24	3.1		R16	Ⅲ類
5	須恵器・杯	SX3057A・埋土	ロクロナデ、底部：ヘラ切り	ロクロナデ	(12.9) 4/24	7.6 24/24	3.7		R1	Ⅲ類
6	須恵器・杯	SX3057A・埋土	ロクロナデ、底部：ヘラ切り	ロクロナデ	(13.2) 15/24	(6.8) 22/24	4.2	2－2	R10	Ⅲ類
7	須恵器・杯	SX3057A・埋土	ロクロナデ、底部：ヘラ切り	ロクロナデ	(13.0) 6/24	(7.4) 11/24	3.3		R5	Ⅲ類
8	須恵器・杯	SX3057A・埋土	ロクロナデ、底部：ヘラ切り	ロクロナデ	(13.0) 5/24	(8.4) 7/24	3.5		R179	Ⅲ類
9	須恵器・杯	SX3057A・埋土	ロクロナデ、底部：ヘラ切り	ロクロナデ	(13.6) 3.5/24	(7.2) 11/24	3.6		R19	底部内面に油煙付着　Ⅲ類
10	須恵器・杯	SX3057A・埋土	ロクロナデ、底部：ヘラ切り	ロクロナデ	(13.6) 4.5/24	(7.8) 18/24	4.1		R2	Ⅲ類
11	須恵器・杯	SX3057A・埋土	ロクロナデ、底部：ヘラ切り	ロクロナデ	(13.7) 13/24	(7.6) 18/24	4.4	2－3	R74	底部外面に墨書「下」、外面に油煙付着　Ⅲ類
12	須恵器・杯	SX3057A・埋土	ロクロナデ、底部：ヘラ切り	ロクロナデ	(13.8) 5/24	(9.1) 6/24	3.7		R6	Ⅲ類

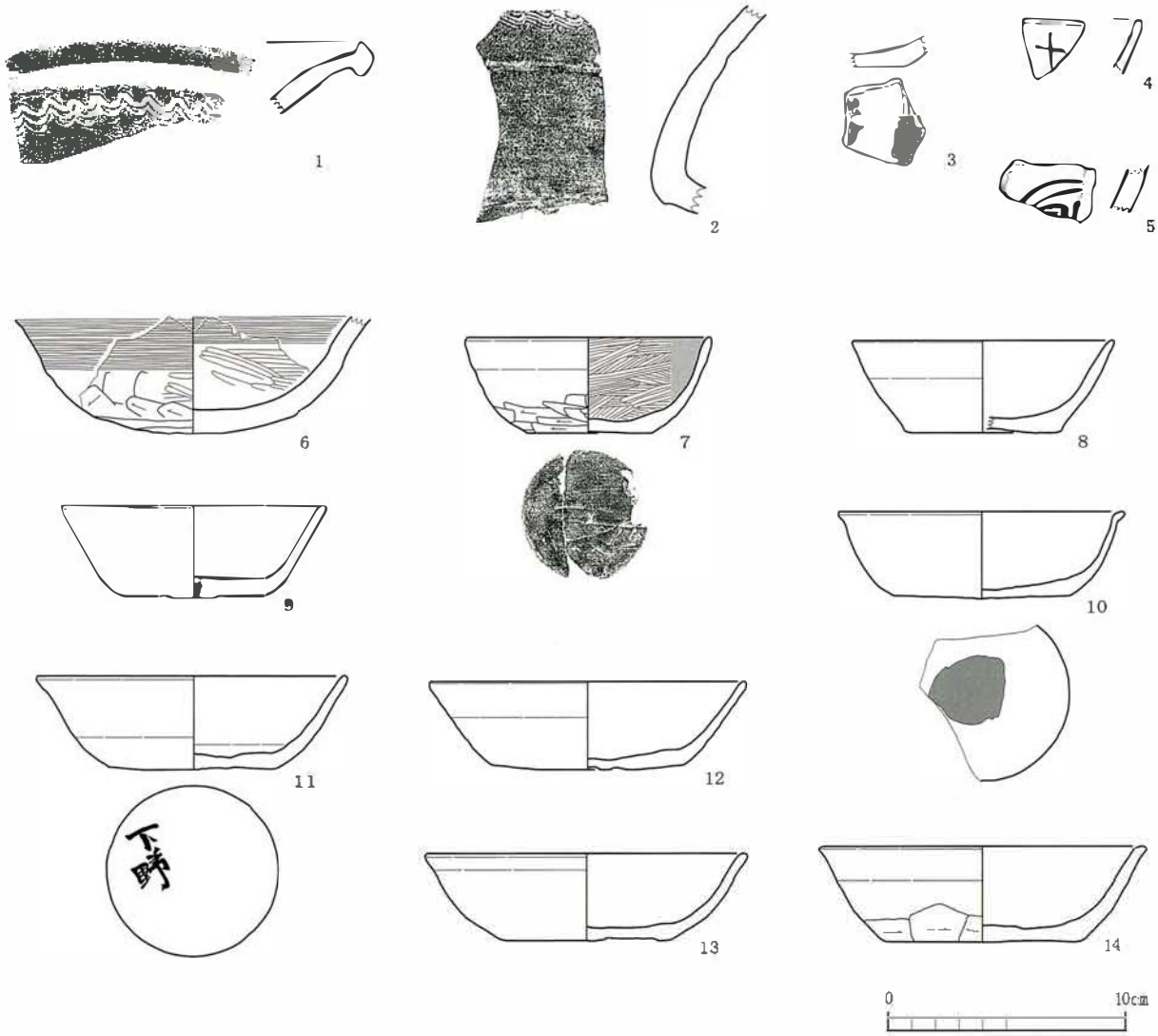
第3図　SX3057A河川跡出土遺物（1）



単位（cm）

番号	種類	遺構・層位	特徴 外面	特徴 内面	口径 残存率	底径 残存率	器高	写真図版	登録番号	備考
1	須恵器・杯	SX3057A・埋土	ロクロナデ、底部：ヘラ切り	ロクロナデ	(14.0) 6.5/24	(7.2) 11/24	3.7		R18	Ⅲ類
2	須恵器・杯	SX3057A・埋土	ロクロナデ、底部：ヘラ切り	ロクロナデ	(14.2) 13/24	9.2 24/24	4.4	2－4	R3	Ⅲ類
3	須恵器・杯	SX3057A・埋土	ロクロナデ、底部：ヘラ切り	ロクロナデ	(14.4) 14/24	8.4 24/24	3.8	2－5	R8	Ⅲ類
4	須恵器・杯	SX3057A・埋土	ロクロナデ、底部：ヘラ切り	ロクロナデ	(14.5) 7.5/24	(8.6) 20/24	4.0		R17	Ⅲ類
5	須恵器・杯	SX3057A・埋土	ロクロナデ、底部：ヘラ切り	ロクロナデ	(14.6) 4/24	(9.2) 18/24	3.9		R9	Ⅲ類
6	須恵器・杯	SX3057A・埋土	ロクロナデ、底部：ヘラ切り	ロクロナデ	(14.8) 3/24	(7.8) 9/24	3.6		R14	Ⅲ類
7	須恵器・杯	SX3057A・埋土	ロクロナデ、底部：ヘラ切り	ロクロナデ	(15.1) 2/24	(8.0) 9/24	3.9		R13	Ⅲ類
8	須恵器・杯	SX3057A・埋土	ロクロナデ、底部：ヘラ切り	ロクロナデ	(15.3) 14/24	(9.9) 14/24	3.6	2－6	R47	Ⅲ類
9	須恵器・杯	SX3057A・埋土	ロクロナデ、底部：ヘラ切り→手持ちヘラケズリ	ロクロナデ	(15.6) 3/24	(8.7) 7/24	5.6		R20	Ⅱa類
10	須恵器・杯	SX3057A・埋土	ロクロナデ、底部：ヘラ切り	ロクロナデ	－	(7.7) 12/24	－		R4	Ⅲ類
11	須恵器・杯	SX3057A・埋土	ロクロナデ、底部：ヘラ切り→手持ちヘラケズリ	ロクロナデ	(20.5) 20/24	(11.3) 23/24	7.5	2－7	R12	Ⅱa類
12	須恵器・蓋	SX3057A・埋土	ロクロナデ、天井部：回転ヘラケズリ	ロクロナデ	(17.3) 9/24	(3.5) 21/24	4.2	2－8	R22	

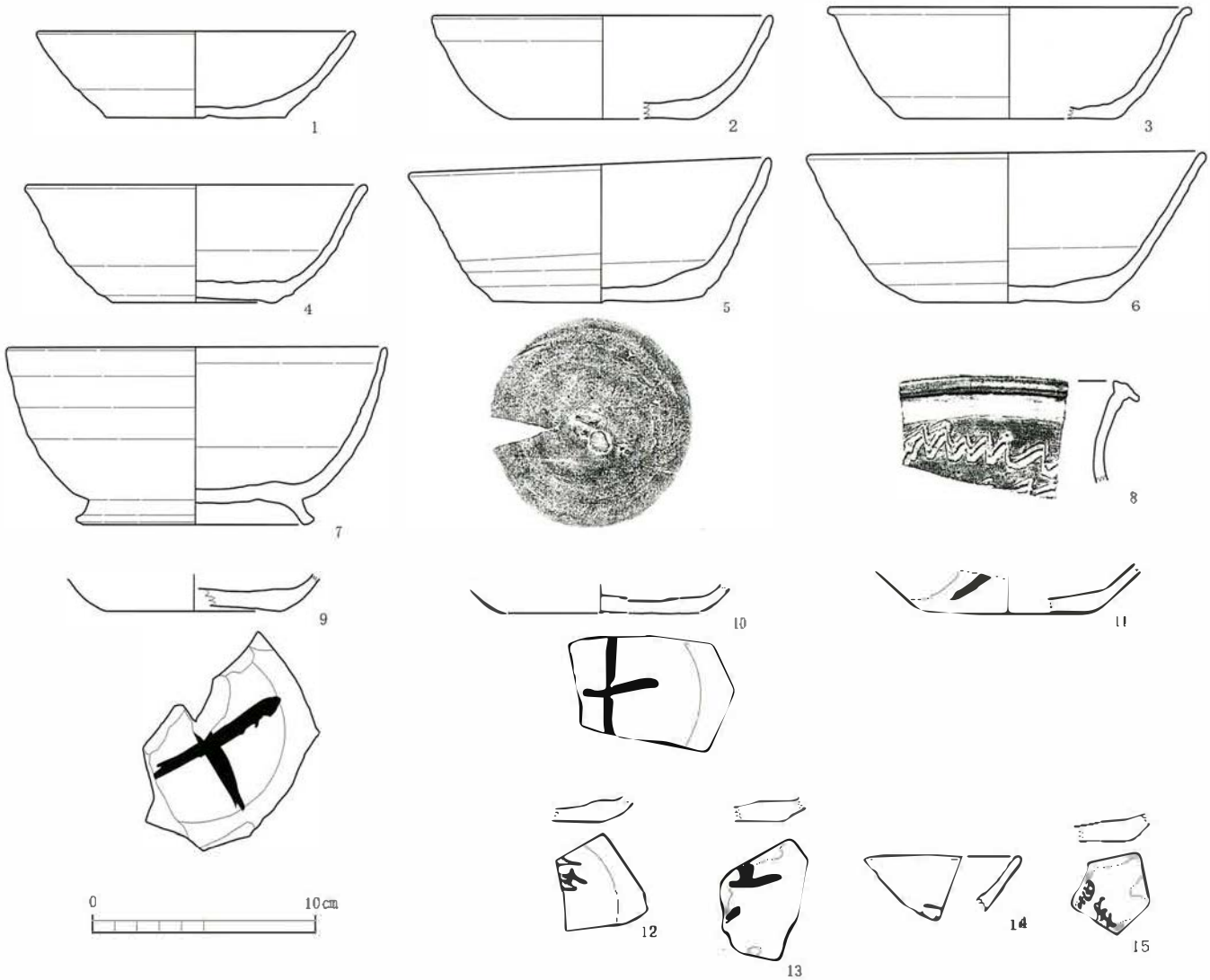
第4図　SX3057A河川跡出土遺物（2）



単位（cm）

番号	種類	遺構・層位	特徴 外面	特徴 内面	口径 残存率	底径 残存率	器高	写真図版	登録番号	備考
1	須恵器・甕	SX3057A・埋土	ロクロナデ、櫛描波状文	ロクロナデ	－	－	－		R23	
2	須恵器・甕	SX3057A・埋土	ロクロナデ、櫛描波状文	ロクロナデ	－	－	－		R24	
3	土師器・杯	SX3057A・埋土	ロクロナデ、手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ、黒色処理	－	－	－		R28	底部外面に墨書「□」BⅡ類
4	土師器・杯	SX3057A・埋土	ロクロナデ	ヘラミガキ、黒色処理	－	－	－		R29	外面に墨書「十」
5	土師器・甕	SX3057A・埋土	ロクロナデ	ロクロナデ	－	－	－	2－12	R27	体部外面に人面墨書
6	土師器・杯	SX3057B・下層	口縁部　ヨコナデ、体部下半から底部：手持ちヘラケズリ→ヘラミガキ	ヨコナデ、ヘラミガキ	－	－	－		R108	古墳時代中期
7	土師器・杯	SX3057B・下層	ロクロナデ、体部下半～底部：手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ、黒色処理	(10.4) 11/24	(5.3) 16/24	4.1		R48	BⅡ類
8	須恵器・杯	SX3057B・下層	ロクロナデ、底部：ヘラ切り	ロクロナデ	(11.0) 11/24	(6.6) 11/24	3.9		R37	Ⅲ類
9	須恵器・杯	SX3057B・下層	ロクロナデ、底部：ヘラ切り	ロクロナデ	(11.2) 8/24	(6.1) 12/24	3.9		R40	Ⅲ類
10	須恵器・杯	SX3057B・下層	ロクロナデ、底部：回転ヘラケズリ	ロクロナデ	(12.0) 5/24	(7.4) 10/24	3.7		R45	底部外面に墨痕有り　1類
11	須恵器・杯	SX3057B・下層	ロクロナデ、底部：ヘラ切り	ロクロナデ	(12.9) 16/24	7.3 24/24	3.8	2－16	R44	底部外面に墨書「下野」Ⅲ類
12	須恵器・杯	SX3057B・下層	ロクロナデ、底部：ヘラ切り	ロクロナデ	(13.4) 2/24	(8.2) 7/24	3.7		R127	Ⅲ類
13	須恵器・杯	SX3057B・下層	ロクロナデ、底部：ヘラ切り	ロクロナデ	(13.6) 2/24	(7.3) 11/24	3.7		R43	Ⅲ類
14	須恵器・杯	SX3057B・下層	ロクロナデ、体部下半～底部：手持ちヘラケズリ	ロクロナデ	(13.8) 4/24	(8.4) 10/24	4.1		R95	Ⅱ類

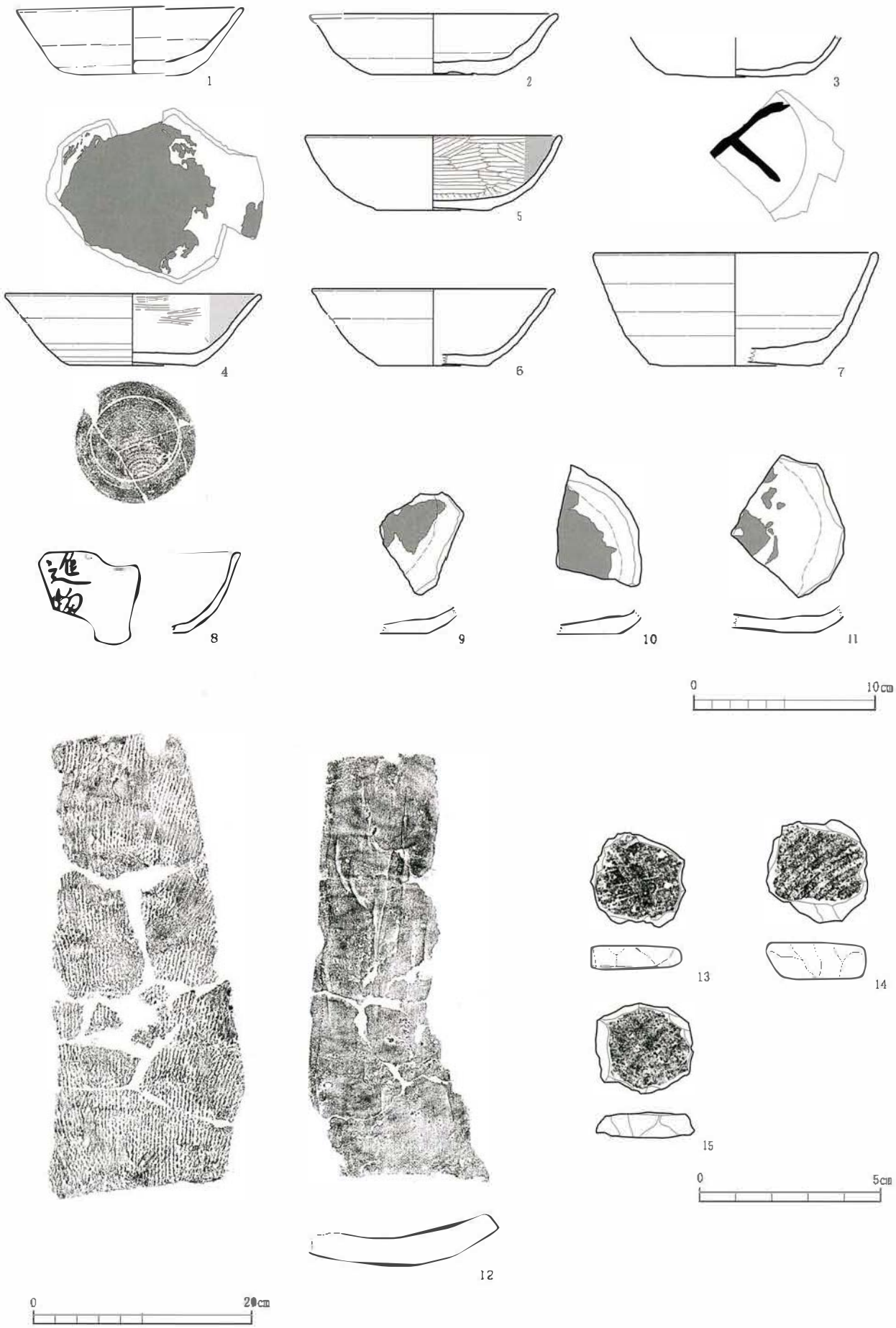
第5図　SX3057A・B河川跡出土遺物（1）



単位（cm）

番号	種類	遺構・層位	特徴 外面	特徴 内面	口径 残存率	底径 残存率	器高	写真図版	登録番号	備考
1	須恵器・杯	SX3057B・下層	ロクロナデ、底部：ヘラ切り	ロクロナデ	(14.2) 5/24	(8.0) 7.5/24	8.0		R38	Ⅲ類
2	須恵器・杯	SX3057B・下層	ロクロナデ、底部：ヘラ切り	ロクロナデ	(15.2) 4.5/24	(8.2) 6/24	8.2		R42	Ⅲ類
3	須恵器・杯	SX3057B・下層	ロクロナデ、底部：ヘラ切り	ロクロナデ	(16.0) 4.5/24	(9.6) 4.5/24	5.0		R45	Ⅲ類
4	須恵器・杯	SX3057B・下層	ロクロナデ、底部：ヘラ切り	ロクロナデ	(15.3) 11/24	(7.6) 20/24	5.3		R59	Ⅲ類
6	須恵器・杯	SX3057B・下層	ロクロナデ、底部：ヘラ切り	ロクロナデ	(16.2) 14/24	9.3 23/24	6.5	2－9	R36	Ⅲ類
6	須恵器・杯	SX3057B・下層	ロクロナデ、底部：ヘラ切り	ロクロナデ	(17.4) 12/24	8.8 24/24	6.7		R35	Ⅲ類
7	須恵器 高台付杯	SX3057B・下層	ロクロナデ、底部：ヘラ切り	ロクロナデ	(17.0) 3.5/24	(10.6) 18/24	7.9		R134	
8	須恵器・壺	SX3057B・下層	ロクロナデ、櫛描波状文	ロクロナデ	－	－	－		R51	
9	須恵器・杯	SX3057B・下層	ロクロナデ、底部：ヘラ切り	ロクロナデ	－	(8.1) 11/24	－		R53	底部外面に墨書「十」 Ⅲ類
10	須恵器・杯	SX3057B・下層	ロクロナデ、底部：ヘラ切り	ロクロナデ	－	(8.6) 4/24	－		R54	底部外面に墨書「十」 Ⅲ類
11	須恵器・杯	SX3057B・下層	ロクロナデ、底部：ヘラ切り	ロクロナデ	－	(7.9) 7/24	－		R80	底部外面に墨書「□」 Ⅲ類
12	須恵器・杯	SX3057B・下層	ロクロナデ、底部：ヘラ切り	ロクロナデ	－	(6.6) 5/24	－	2－13	R65	底部外面に墨書「□」 Ⅲ類
13	須恵器・杯	SX3057B・下層	ロクロナデ、底部：ヘラ切り	ロクロナデ	－	－	－		R81	底部外面に墨書「□」 Ⅳ類
14	須恵器・杯	SX3057B・下層	ロクロナデ	ロクロナデ	－	－	－		R82	体部外面に墨書「□」
15	須恵器・杯	SX3057B・下層	ロクロナデ、底部：ヘラ切り	ロクロナデ	－	－	－	2－14	R83	底部外面に墨書「□野」 Ⅲ類

第6図　SX3057B河川跡出土遺物（2）



第7図　SX30578河川跡出土遺物（3）

単位（cm）

番号	種類	遺構・層位	特徴 外面	特徴 内面	口径 残存率	底径 残存率	器高	写真図版	登録番号	備考
1	須恵器・杯	SX3057B・中層	ロクロナデ、底部：ヘラ切り	ロクロナデ	(12.7) 21/24	7.2 24/24	3.7	2－10	R61	Ⅲ類
2	須恵器・杯	SX3057B・中層	ロクロナデ、底部：ヘラ切り	ロクロナデ	(13.6) 9/24	(5.8) 22/24	3.4		R133	底部外面に墨書「十」 Ⅲ類
3	須恵器・杯	SX3057B・中層	ロクロナデ、底部：ヘラ切り	ロクロナデ	－	(7.8) 8/24	－		R64	Ⅲ類
4	土師器・杯	SX3057B・上層	ロクロナデ、底部：回転糸切り→回転ヘラケズリ	ヘラミガキ、黒色処理	(14.2) 2.5/24	7.0 24/24	4.0	2－11	R85	内面に漆付着 BⅠc類
5	土師器・杯	SX3057B・上層	ロクロナデ、底部：回転糸切り	ヘラミガキ、黒色処理	(14.2) 8/24	(6.0) 12/24	4.2		R86	BⅤ類
6	須恵器・杯	SX3057B・上層	ロクロナデ、底部：回転糸切り	ロクロナデ	(13.4) 6/24	(6.2) 10/24	4.3		R78	Ⅴ類
7	須恵器・杯	SX3057B・上層	ロクロナデ、底部：ヘラ切り	ロクロナデ	(15.7) 3.5/24	(9.6) 11/24	5.3		R107	Ⅲ類
8	土師器・杯	L-Ⅱ	ロクロナデ、体部下半：回転ヘラケズリ	ヘラミガキ、黒色処理	－	－	－	2－15	R120	体部外面に墨書「進物」 BⅠ類
9	転用硯	SX3057B・上層	ロクロナデ、底部：回転糸切り	ロクロナデ	－	－	－		R188	須恵器杯転用、墨痕あり
10	転用硯	SX3057B・下層	ロクロナデ、底部：ヘラ切り	ロクロナデ	－	－	－		R183	須恵器杯転用、墨痕あり
11	転用硯	SX3057B・下層	ロクロナデ、底部：ヘラ切り	ロクロナデ	－	－	－		R184	須恵器杯転用、墨痕あり
12	平瓦	SX3057B・上層	縄タタキ	布目	－	－	－		R136	ⅡBa類
13	土器片製円盤	SX3057B・上層	ヘラケズリ		直径 2.5	厚さ 0.6	重さ 5.0		R87	土師器甕の体部転用
14	土器片製円盤	SX3057B・上層	回転糸切り		2.8	1	10.0		R88	土師器甕の底部転用
15	土器片製円盤	SX3057B・上層	ロクロナデ		2.7	0.7	5.0		R95	土師器甕の体部転用

第7図　出土遺物観察表

ＳＫ3058 土壙

調査区西壁際のＳＸ3058Ａ埋土上面で検出した。重複関係からＳＸ3058Ａより新しく、ＳＸ3058Ｂより古い。西側は調査区外へと延びており全体を確認できなかったため平面形態は不明である。規模は１ｍ×0.65ｍ以上で、深さ 0.5ｍを計る。北壁は垂直に近く立ち上がるが、南壁はそれに比べ緩やかである。底面は南に向かって傾斜する。埋土は２層に分けられ、いずれもグライ化した暗緑灰色シルトである。遺物は土師器杯（ＢⅡ類）、須恵器杯（Ⅲ類）が若干出土している。

柱穴およびピット

11 基発見し、ほとんどがＳＸ3058Ａ・Ｂ埋土上面で検出した。このうち２基で柱痕跡、１基で抜き取り穴を確認したが、規模が一様ではなく建物としての構成も不明である。遺物は土師器杯・甕、須恵器杯・甕、平瓦が出土している。土師器杯はＢⅡ類を主体とするが、ＢⅤ類も１点確認された。須恵器杯はすべてⅢ類で占められている。

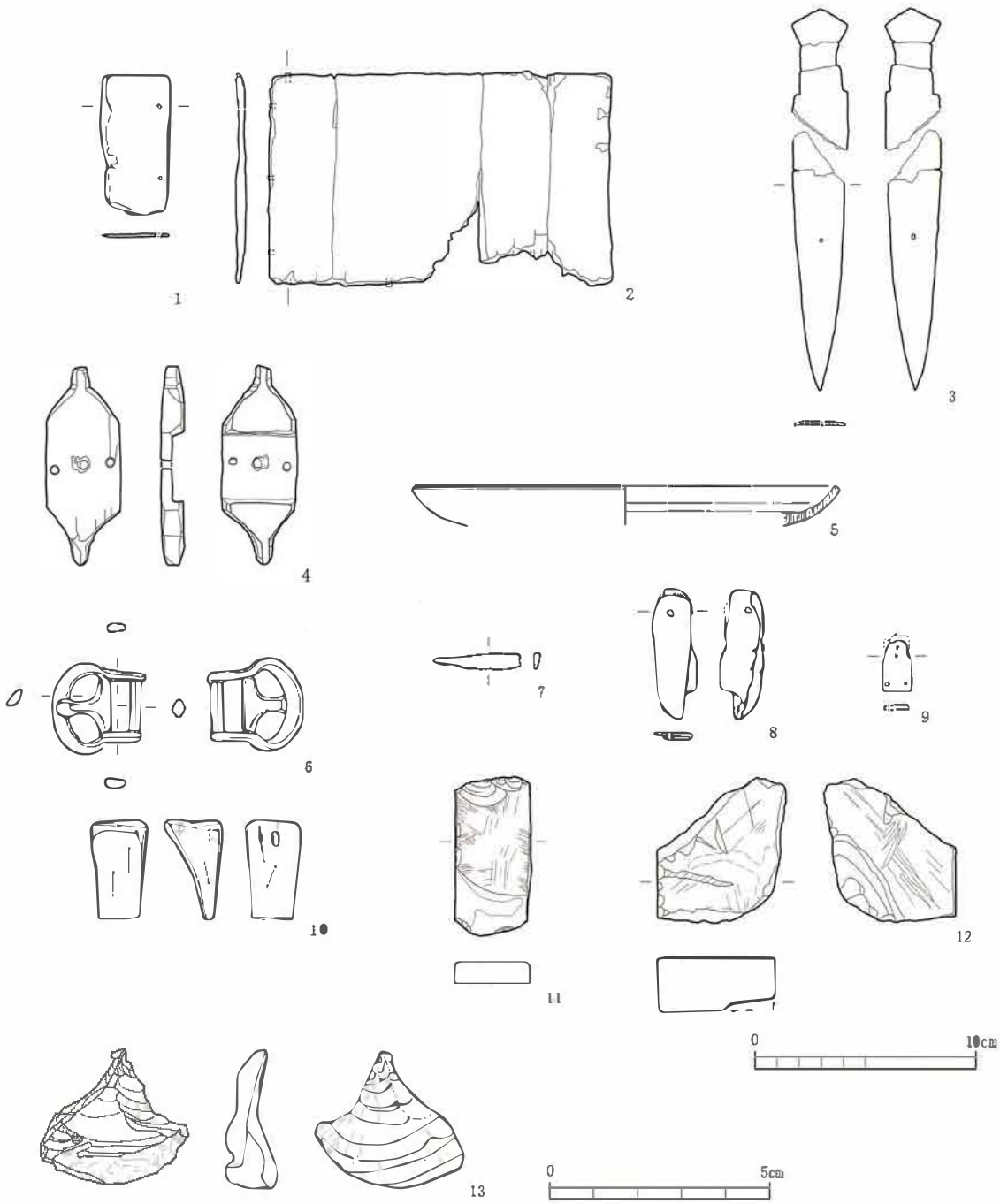
（3）　Ⅱ層出土の遺物（第７図８）

Ⅱ層から出土した遺物には、土師器杯・高杯・甑・甕、須恵器杯・高台付杯・双耳杯・盤・瓶・長頸瓶・甕、須恵系土器杯、灰釉陶器、丸瓦（Ⅱ類・ⅡＢ類）・平瓦（ⅠＡ類・ⅡＢ類）、墨書土器、製塩土器、鉄滓がある。土師器杯は28 点中、ＢⅤ類が 57%で、他は再調整が施されるＢⅠ・Ⅱ類である。須恵器杯は 41 点中、Ⅲ類が 68%、Ⅴ類が 29%、再調整のものはごく微量である。

３．考　察

はじめに、河川跡出土資料をもとに多賀城跡出土資料と比較を行い、その年代を検討する。

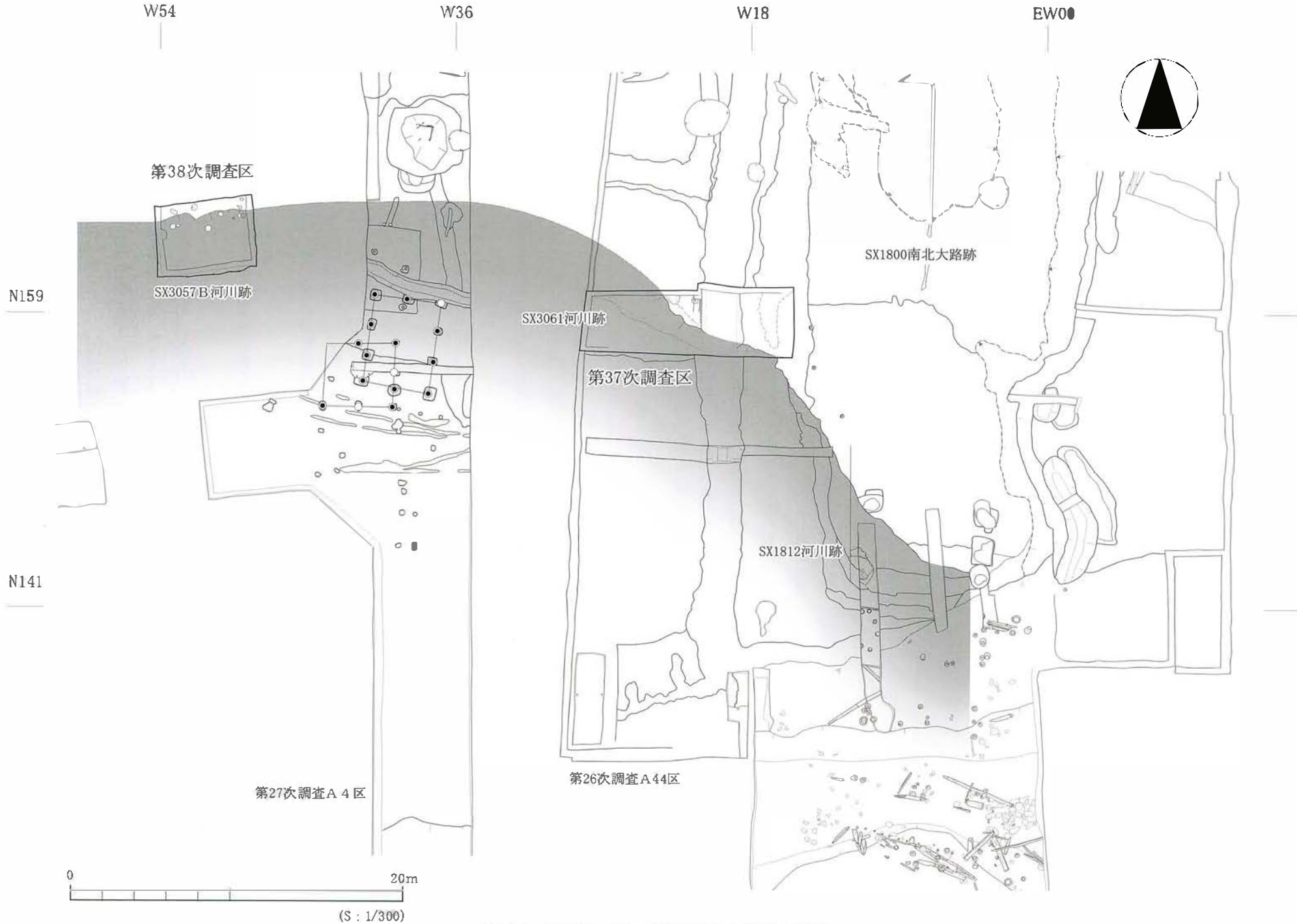
まず、上限年代について検討する。ＳＸ3057Ａ出土土師器杯の構成比は、前述の通りＢⅠ類とＢⅡ類が約半々の割合である。これとほぼ同じ数値を示すのが大畑地区のＳⅠ2153, 2160 出土土器群であり、年代は９世紀初頭～前葉とされている。須恵器との対比でも同段階が９割方Ⅲ類で構成され、Ⅴ類を含まない



単位（cm）

番号	種類	遺構・層位	長さ	幅	厚さ	特徴	写真図版	登録番号
1	木製品・漆器箱	SX3057B・下層	6.3	3.1	0.2	目釘穴あり 2の側板	3−1	R6
2	木製品・漆器箱	SX3057B・下層	15.5	9.5	0.5	側面に目釘あり、1と組み合う	3−2	R5
3	木製品・斉串	SX3057A・埋土	—	2.5	0.2		3−4	R2
4	木製品・糸巻	SX3057A・埋土	9.0	3.3	1.0	目釘1ヶ所残存	3−3	R3
5	木製品・挽物盤	SX3057A・埋土	口径(19.5)					R4
6	銅製品・鈕具	SX3057A・埋土	4.2	4.2	0.9		3−5	R1
7	鉄製品・刀子	P−1・埋土	4.0	0.7	0.2			R4
8	不明鉄製品(鏃?)	SX3057A・埋土	5.9	2.0	0.3	2枚の鉄製品が目釘で留められている		R3
9	不明鉄製品(金具?)	SX3057A・埋土	2.6	1.3	0.2	貫通しない孔あり		R2
10	石製品・砥石	SX3057B・上層	4.4	2.5	2.6	貫通孔あり、砥面4面、凝灰岩	3−7	R111
11	石製品・砥石	SX3057B・下層	7.1	3.4	1.0	砥面2面、黒色粘板岩	3−8	R112
12	石製品・砥石	SX3057A・埋土	6.0	5.1	2.5	砥面4面		R113
13	石製品・剥片	SX3057A・埋土	3.1	3.4	1.2	重さ：5.0g、黒曜石製(湯ノ沢産)	3−6	R33

第8図　SX3057A・B、ピット出土遺物（木製品ほか）



第9図　9世紀初頭～中葉頃の河川流路推定図

点で共通する（註）。

次に、下限年代を検討するためにＳＸ3057Ｂ上層土器についてみてみる。多賀城跡出土の土師器杯におけるＢＶ類の割合は、9 世紀第２四半期の大畑地区ＳＥ2101Ｂが４％、9 世紀中葉の大畑地区ＳＫ2167 が20%、9 世紀第 3 四半期の大畑地区ＳＫ2272 が 44%であり、時期が新しくなるにつれて増加していることが見て取れる。この比率からすると本上層出土土師器杯は、大畑地区ＳＫ2167 に近いものといえる。また、土師器と須恵器の組み合わせの点では、9 世紀中葉段階から須恵器が減少傾向にあり、大畑地区ＳＫ2167 を例にとって見ると、土師器 72.4%、須恵器27.6%となっており、供膳具の主体がこの時期から土師器へと転換している。これを参考にするならば、ＳＸ3057Ｂ上層土器の割合は、依然須恵器が半数以上（7割）を占めており、9 世紀中葉段階よりは古い様相を呈している。

これまでの検討で土師器と須恵器との間には若干の時間のずれが生じている。これは土師器ＢＶ類が多賀城跡では９世紀中葉頃に一定量存在することを根拠としたためである。しかし、近年の城南地区の調査ではＢＶ類が１割程度、８世紀末から９世紀初頭あるいはそれ以前の時期に確認されており、ＢＶ類の比率については、遺跡・遺構ごとに流動的な側面があり今後検討を要する。以上のことから、ＳＸ3057Ａ・Ｂの存続期間は９世紀初頭から中葉頃と推定しておきたい。

今回の調査区で発見した河川跡は、東側に隣接する第 27 次調査区（ＳＸ 1812）やさらにその東側の第 37 次調査区（ＳＸ3061）でも確認されている（第９図）。この河川跡は当時の多賀城南面を流れる主要な河川であり、南北大路の西側溝と接続し、これを横切るように東流していた。これまでの城南地区の調査成果によると、古墳時代中期から 10 世紀中葉頃にかけてこの河川は、ほぼ同位置で存続していたことが判明しており、今回の調査によって９世紀前半代の河川北岸の位置を明確に把握することができた。

（註）須恵器Ｖ類は、城南地区の報告において８世紀末から９世紀初頭とされているＳＸ1351Ｃ期河川跡に６％含まれていることから、８世紀末から９世紀中葉にかけて徐々に増加していったことが想定されるが、９世紀初頭～前葉の大畑地区ＳＩ2153,2160 では検出されておらず、遺跡・遺構単位で様相が異なるものと考えられる。

【引用・参考文献】

宮城県多賀城跡調査研究所「第60・61 次調査」『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1991』1992

宮城県多賀城跡調査研究所「第62・63 次調査」『宮城県多賀城跡調査研究所年報 1992』1993

宮城県多賀城跡調査研究所「第65 次調査・現状変更に伴う調査」『宮城県多賀城跡調査研究所年報1994』1995

白鳥良一「多賀城跡出土土器の変遷」『研究紀要Ⅶ』宮城県多賀城跡調査研究所1980

村田晃一「土器からみた官衙の終末」『古代官衙の終末をめぐる諸問題』第３回東日本埋蔵文化財研究会資料 1994

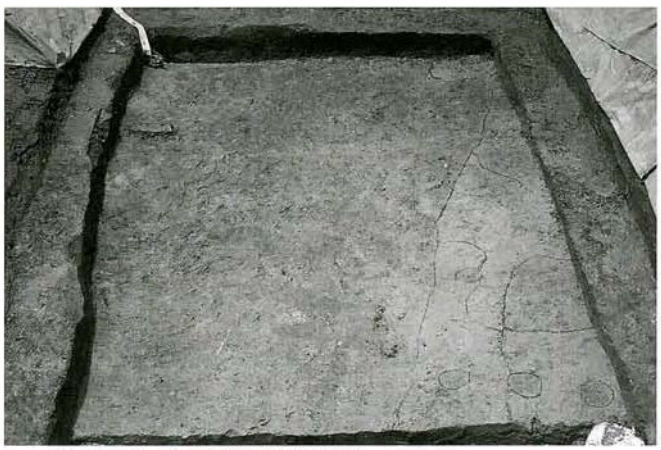
村田晃一「宮城郡内における 10 世紀前後の土器」『福島考古』第36号1995

多賀城市教育委員会「市川橋遺跡―城南土地区画整理事業に係る発掘調査報告書Ⅰ―」多賀城市文化財調査報告書第 60 集　2001

多賀城市教育委員会「市川橋遺跡―城南土地区画整理事業に係る発掘調査報告書Ⅱ―」多賀城市文化財調査報告書第 70 集　2003

柳澤和明「東北の施釉陶器―陸奥を中心に―」『古代の土器研究―律令的土器様式の西・東３　施釉陶器―』古代の土器研究会　1994

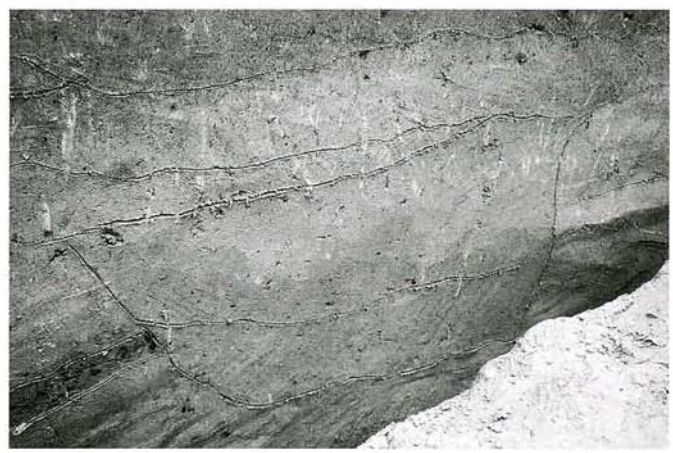
1　SX 3075A 河川跡全景　南東より



2　SX 3075A・B 河川跡検出状況　東より

3　調査区東壁土層断面

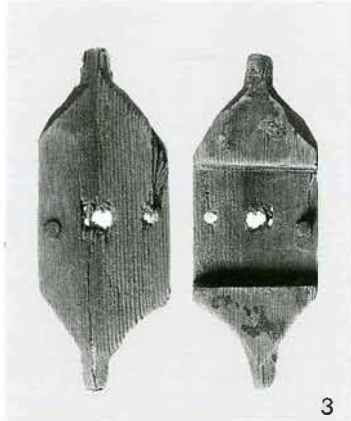
4　調査区西壁土層断面



5　SK 3058土壙土層断面

写真図版1

1　S X3057A・埋土出土　須恵器・杯
（第３図3　R7　S:1/3）
2　S X3057A・埋土出土　須恵器・杯
（第３図6　R10　S:1/3）
3　S X3057A・埋土出土　須恵器・杯
（第３図11　R74　S:1/3）
4　S X3057A・埋土出土　須恵器・杯
（第４図2　R3　S:1/3）
5　S X3057A・埋土出土　須恵器・杯
（第４図3　R8　S:1/3）
6　S X3057A・埋土出土　須恵器・杯
（第４図8　R47　S:1/3）
7　S X3057A・埋土出土　須恵器・杯
（第４図11　R12　S:1/3）
8　S X3057A・埋土出土　須恵器・杯
（第４図12　R22　S:1/3）
9　S X3057B・下層出土　須恵器・杯
（第６図5　R36　S:1/3）
10　S X3057B・中層出土　須恵器・杯
（第７図1　R61　S:1/3）
11　S X3057B・上層出土　土師器・杯
（第７図4　R85　S:1/3）
12　S X3057A・埋土出土　人面墨書土器
（第５図5　R27　S:任意）
13　S X3057B・下層出土　墨書土器
（第６図12　R55　S:任意）
14　S X3057B・下層出土　墨書土器
（第６図15　R83　S:任意）
15　Ⅱ層出土　墨書土器
（第７図8　R120　S:任意）
16　S X3057B・下層出土　墨書土器
（第５図11　R44　S:任意）



1　ＳＸ3057Ｂ・下層出土　漆箱（第8図1　R6　S:1/2）
2　ＳＸ3057Ｂ・下層出土　漆箱（第8図2　R5　S:1/2）
3　ＳＸ3057Ａ・埋土出土　糸巻（第8図4　R3　S:1/2）
4　ＳＸ3057Ａ・埋土出土　斎串（第8図3　R2　S:1/2）
5　ＳＸ3057Ａ・埋土出土　鉸具（第8図6　R1　S:1/1）
6　ＳＸ3057Ａ・埋土出土　剥片（第8図13　R33　S:1/1）
7　ＳＸ3057Ｂ・上層出土　砥石（第8図10　R111　S:1/1）
8　ＳＸ3057Ｂ・下層出土　砥石（第8図11　R112　S:1/1）

Ⅵ　市川橋遺跡第三七・三八次調査出土の木簡について

木簡は、第三七次調査において五点（第一一四～一一八号）第三八次調査において一点（一一九号）出土した。使用した釈文の符号や型式番号等は、木簡学会が定め『木簡研究』等で使用している方式に従った。また　木簡番号については　市川橋遺跡出土木簡の一連の番号である。図版および実測図の縮尺はいずれも約1／2である。

第一一四号木簡　149×22×7　032　SX3061　3層

「〈小川郷丈マ兄万呂三斗真与二斗」

完形。上端・下端ともに刃物によるキリオリ痕を確認することができる。表面はオモテ・ウラともに平滑に調整している。

小川郷から進上された米五斗の貢進物荷札である。小川郷は『和名類聚抄』によれば安積郡に所在（名古屋市立博物館本は「小河」につくる）し、現在の福島県郡山市田村町小川から中田町柳橋一帯に比定されている。

「丈マ兄万呂」が三斗、「真与」が二斗それぞれ輸納し、合計五斗すなわち一俵に付けられたものである。「真与」のウジ名は兄万呂と同じ「丈マ」であったため省略されたと考えられよう。

第一一五号木簡　(183)×41×6　039　SX3061　3層

「〈信夫郡税舂米五斗

上端は一部欠損するほかは原形をとどめ、下端は欠損している。左右両側面も一部欠損するが原形をとどめる。材は全体的に腐食が進んでおり、表面も荒れがはなはだしいが、オモテ面のみ表面を平滑に調整し、ウラ面は無調整であることが確認できる。

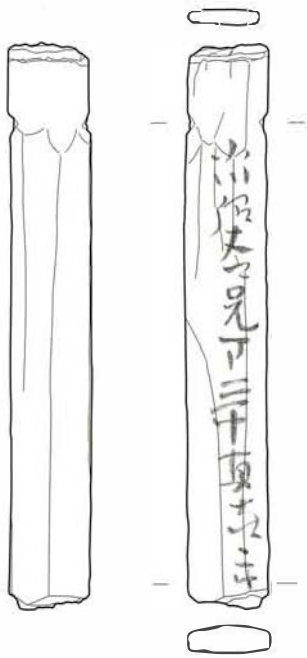
信夫郡から進上された舂米五斗に付けられた貢進物荷札である。信夫郡は現在の福島市域に比定されており、郡家は福島市五老内町に所在したとされる。

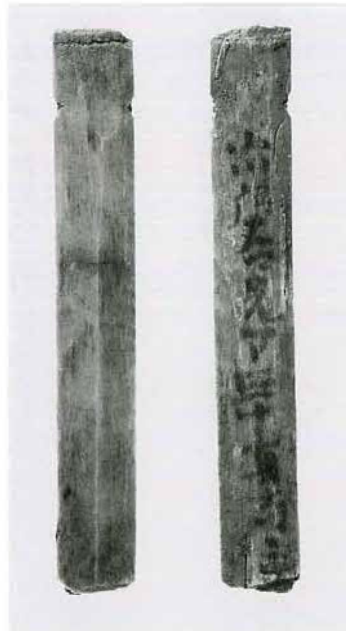
第一一六号木簡　233×(27)×4　011　SX3061　3層

・「書生丈部廣道［　　］
［　　］〔傳カ〕□□右　右［　　］〔書カ〕□
［　　］
・「［　　］
［　　］〔須カ〕□」

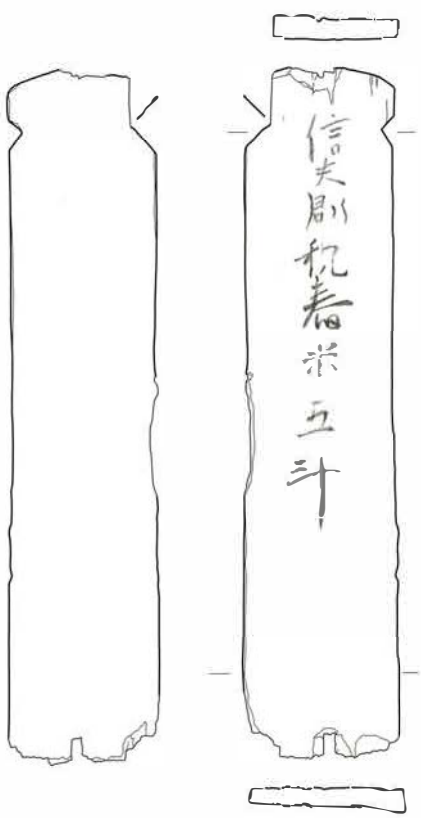
上端・下端および右側面は原形をとどめるが、左側面は欠損している。右側面には切り込み等の加工が施されていないことから、本木簡は現況よりも幅広の短冊形の木簡であることが想定される。

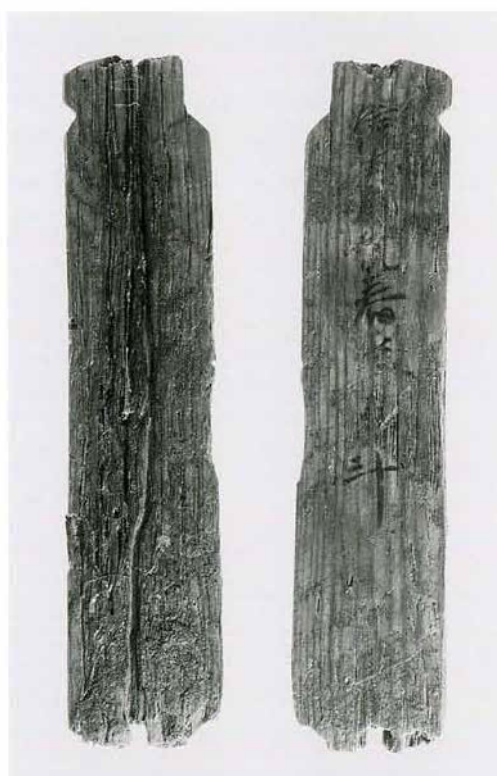
墨書はオモテ・ウラ両面に確認することができる。オモテ面は三行

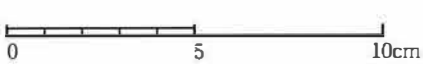




第114号木簡







第115号木簡

ほどの墨書が確認できる。三行目は文字の左半分が切れている。ウラ面は二行ほどの墨書が確認できる。両面ともにところどころ薄く削られており、その削り残りと思われる墨痕も多数確認できる。厚さは最大で四㎜であるが、最も薄い部分は約二㎜と半分の厚さである。また、重なり合っている墨書もあることから、繰り返し使用された習書木簡とも推測されるが、詳細は不明とせざるを得ない。

第一一七号木簡　(154)×39×4　019　SX3061　3層

「□□□□[　　]

上端は右隅を欠損するが原形をとどめ、下端は欠損する。左右両側面は原形をとどめる。表面はオモテ・ウラともに平滑に調整している。

墨書はオモテ面にのみ確認することができる。六～七文字程度の墨書であるが、詳細は不明とせざるを得ない。

第一一八号木簡　091　SX3061　3層

赤赤□

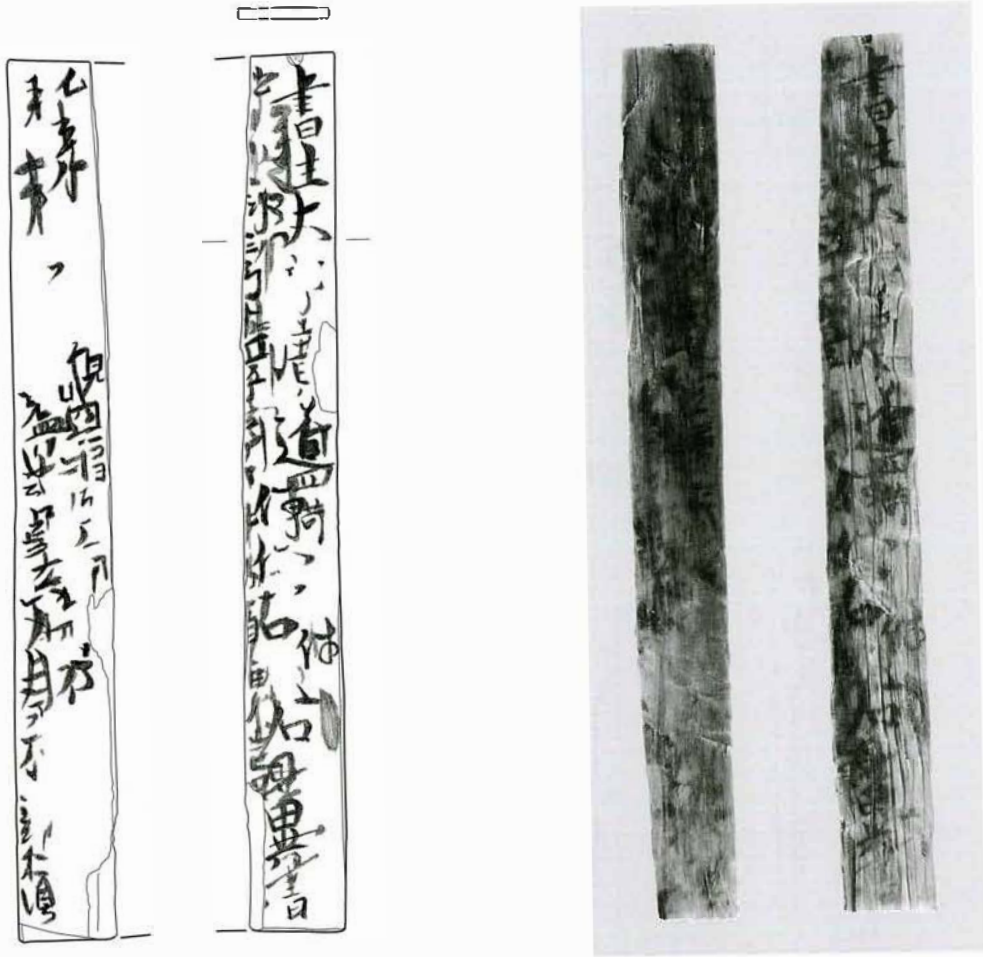
削り屑。三文字分の墨書を確認することができる。上二文字は同字であり、三文字目も同字の可能性がある。

第一一九号木簡　271×11×7　032　SX3057A　埋土

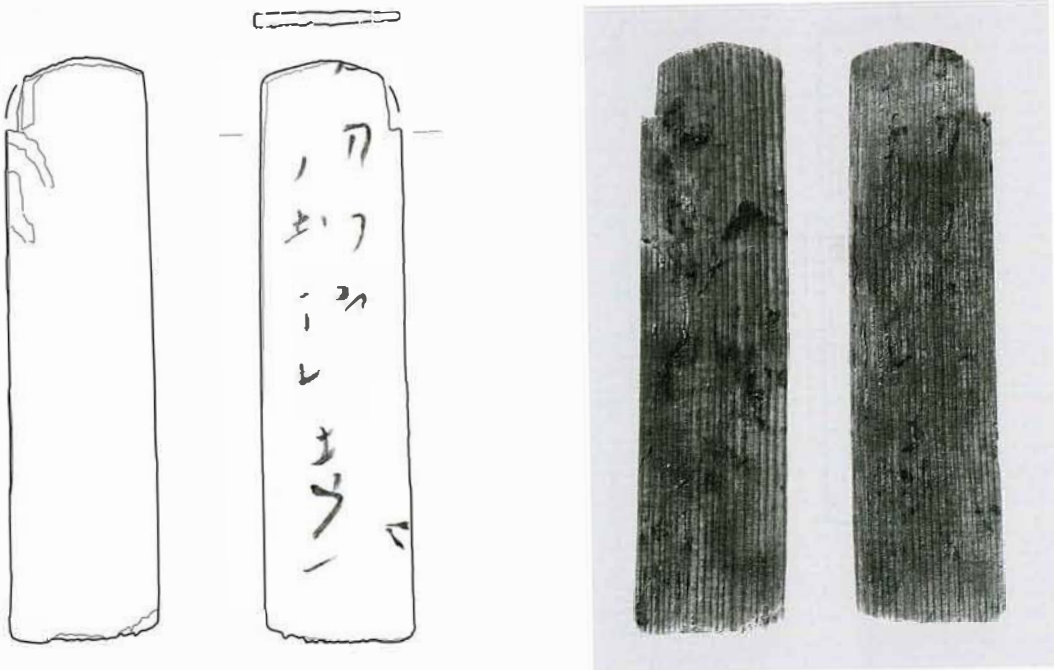
「く　　」

二片接合。右側面切込み部より上を欠損するほかは原形をとどめる。オモテ・ウラ両面ともに表面を平滑に調整している。また、オモテ面のみ上端を斜めに削り、面取りしている。

墨書は確認できない。墨書はないが切り込みのある木材に対しては、木簡状木製品・付札状木製品などと称して木簡の未使用品と捉える場合と、木簡以外の何らかの木製品と捉える場合とがある。本木簡の場合、切り込みがあるほか、上端も面取りの加工が施されていることなどから、現段階では木簡として位置づけておきたい。

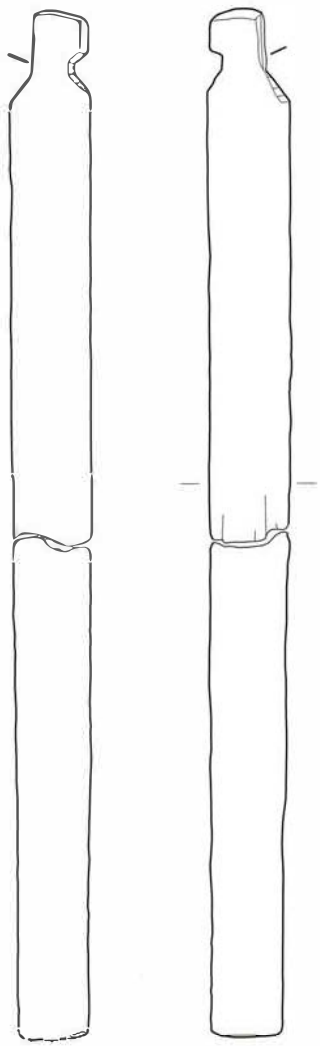


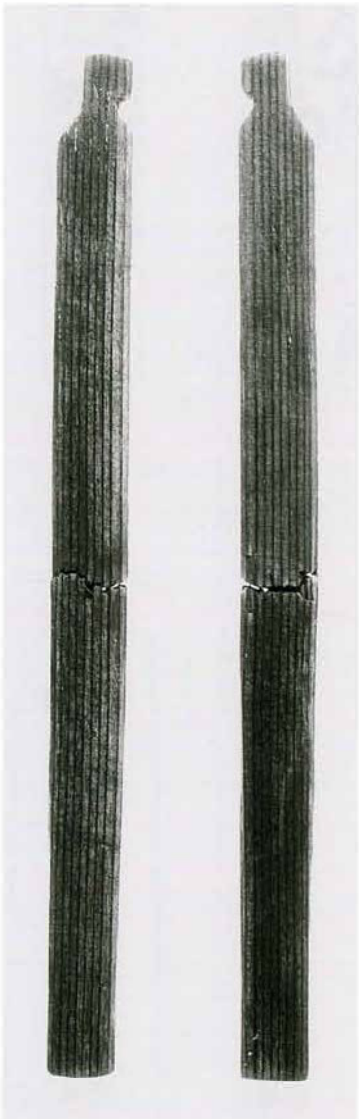
第116号木簡



第117号木簡

第118号木簡





第119号木簡

報　告　書　抄　録

ふりがな	いちかわばしいせき
書名	市川橋遺跡
副書名	市川橋遺跡第34・35・37・38次調査
シリーズ名	多賀城市文化財調査報告書
シリーズ番号	第74集
編著者名	島田　敬・相澤清利・武田健市・村松　稔・廣瀬真理子
編集機関	多賀城市埋蔵文化財調査センター
所在地	〒985-0873　宮城県多賀城市中央２丁目27番1号
発行年月日	西暦2004年3月31日

所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
市川橋遺跡（いちかわばしいせき） （第34次調査）	宮城県（みやぎけん） 多賀城市（たがじょうし） 市川字鴻ノ池地内（いちかわあざこうのいけ）	42099	18008	38度 17分 46秒	140度 59分 28秒	20030408 ～ 20030502	15㎡	個人住宅 建設
市川橋遺跡（いちかわばしいせき） （第35次調査）	宮城県（みやぎけん） 多賀城市（たがじょうし） 市川字鴻ノ池地内（いちかわあざこうのいけ）	42099	18008	38度 17分 47秒	140度 59分 30秒	20030409 ～ 20030425	96㎡	個人住宅 建設
市川橋遺跡（いちかわばしいせき） （第37次調査）	宮城県（みやぎけん） 多賀城市（たがじょうし） 市川字鴻ノ池地内（いちかわあざこうのいけ）	42099	18008	38度 17分 49秒	140度 59分 29秒	20030623 ～ 20030729	60㎡	個人住宅 建設
市川橋遺跡（いちかわばしいせき） （第38次調査）	宮城県（みやぎけん） 多賀城市（たがじょうし） 市川字鴻ノ池地内（いちかわあざこうのいけ）	42099	18008	38度 17分 49秒	140度 59分 28秒	20030624 ～ 20030804	24㎡	個人住宅 建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
市川橋遺跡 （第34次調査）	古代都市	奈良 平安	掘立柱建物跡、 小溝群	土師器、須恵器、須恵系土器、瓦	
市川橋遺跡 （第35次調査）	古代都市	奈良 平安	河川	土師器、須恵器、瓦	
市川橋遺跡 （第37次調査）	古代都市	奈良 平安	南北大路、 溝跡、土壙、 河川、小溝群	土師器、須恵器、須恵系土器、瓦、木製品（木簡、皿）、鉄製品（刀子）	
市川橋遺跡 （第38次調査）	古代都市	奈良 平安	河川	土師器、須恵器、瓦、木製品（木簡状木製品、斎串、糸巻、漆器）、金属製品（鉸具）	

多賀城市文化財調査報告書第74集

市川橋遺跡

—第34・35・37・38次調査報告書—

平成16年3月31日発行

編集　多賀城市埋蔵文化財調査センター
多賀城市中央二丁目27番1号
電話（022）368－0134

発行　多賀城市教育委員会
多賀城市中央二丁目1番1号
電話（022）368－1141

印刷　富士印刷有限会社
宮城県多賀城市笠神五丁目15－28
電話（022）367－0157

R100 PRINTED WITH SOY INK 古紙配合率100%再生紙を使用しています
印刷には大豆油インキを使用しています